長岡京市文化財調査報告書

第11冊

1983

長岡京市教育委員会

序　　文

本市は市街地のほぼ全域が長岡京跡に含まれる一方，各時代の集落跡，城跡，寺院跡，古墳等約110ケ所の遺跡が確認されており，市全体が埋蔵文化財の包蔵地です。

近年における市内の公共・民間の開発事業は相当数に達し，今後も引きつづき増加の傾向にあり，ますます各遺跡に及ぼす影響が大きくなっております。

教育委員会では，これまで顕著な遺跡の計画調査，開発に伴う緊急発掘調査を行い遺跡の解明と保護を図ってきました。また，昭和57年７月１日には，激増する埋蔵文化財発掘調査に対応するため，その調査研究体制の整備充実を図る目的で財団法人長岡京市埋蔵文化財センターを設立させました。

ここに刊行する本報告書は，昭和57年度に教育委員会が直営で実施した国庫補助事業の調査成果が主であり，その内容は，長法寺南原古墳の墳形に関するもの，長岡京跡七条大路付近の住居跡，長岡京域における奈良時代の官衙的倉庫と思われるもの等であります。

これらの調査成果は，今後，本市の文化財保護行政を推進する上で貴重な資料となるのみならず，広く市民に活用していただき，本市の歴史を理解する一助になれば幸いと考えております。

なお，その他の調査成果については，別途，財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが刊行の調査年報に掲載いたしております。

最後になりましたが，調査実施にあたって種々ご指導をいただいた諸先生方ならびに関係行政機関，また発掘調査に深いご理解とご協力していただいた土地所有者の方々に，紙上をお借りし，ここに厚くお礼申しあげる次第であります。

昭和58年３月31日

長岡京市教育委員会

教育長　田　中　理一郎

凡　　例

1．本冊は，昭和57年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長法寺南原古墳及び長岡京跡の発掘調査の概要報告である。なお昭和55年に実施した右京第39次(7ANQMK地区）調査も合せて集録した。

2．上記の調査地は，付表－1の通りである。その位置は，第1図に示した。

3．長岡京跡の調査地の次数は，長岡京跡左京，長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は，高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977)』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京内の条坊名は，山中章他「第126図 長岡京条坊図」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集，1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆は，各部の章のはじめまたは文末に執筆者名を記した。

6．発掘調査の実施にあたっては，京都府教育委員会，(財)長岡京市埋蔵文化財センター，長岡京跡発掘調査研究所等の多大なる協力を得た。

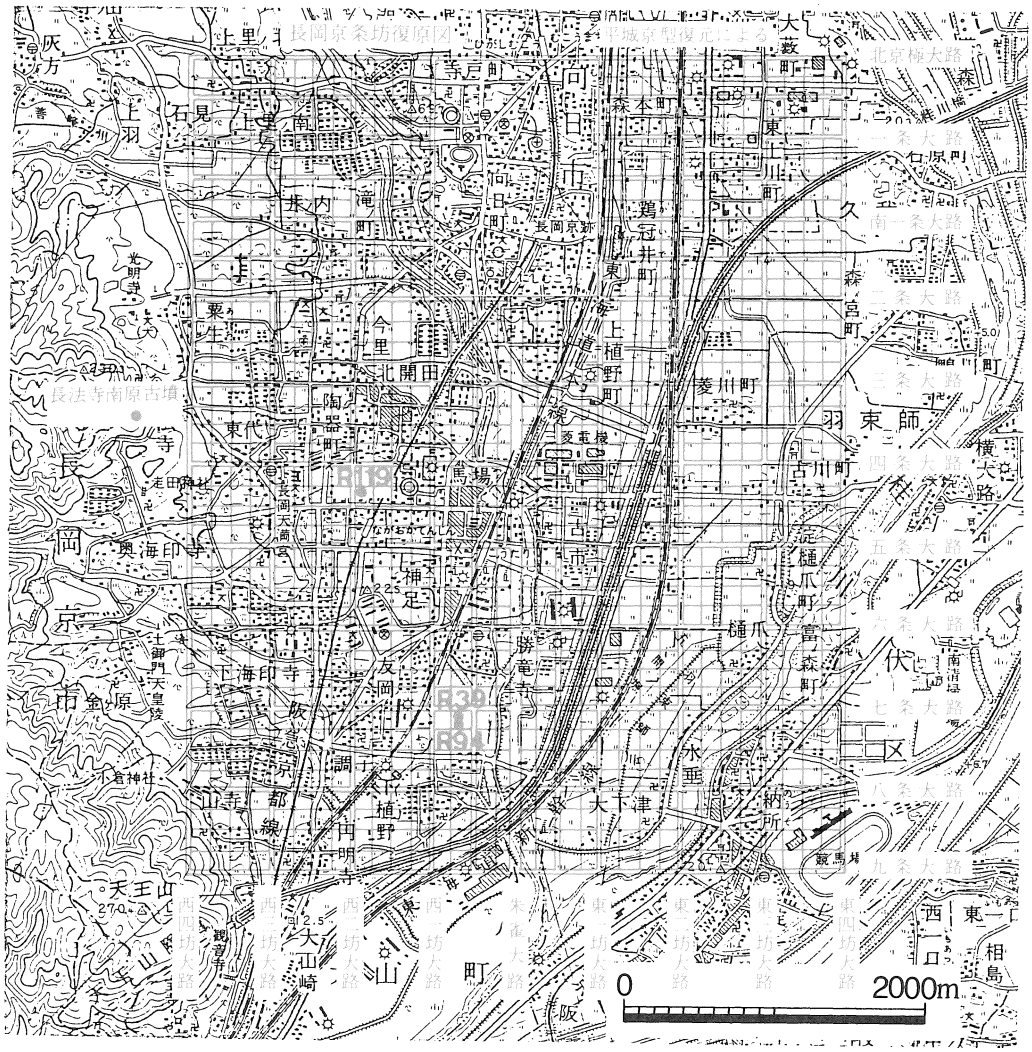
7．本書の編集は，長岡京市教育委員会社会教育課中尾秀正が担当した。

付表－1　　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	所有者（原因者）	調査期間	調査面積（㎡）	備考
長法寺南原古墳第3次調査		長岡京市長法寺南原11番	薮内　治作	1982.7.21～1982.8.13	76㎡	
長岡京跡右京第94次	7ANQUD	長岡京市久貝二丁目211他	(京都開発㈱)	1982.4.17～1982.5.29	578㎡	
右京第119次	7ANKSN2	長岡京市長岡二丁目434－1	塚田佐一郎	1983.1.5～1983.3.10	300㎡	
右京第39次	7ANQMK	長岡京市久貝二丁目801～812	(京都開発㈱)	1980.5.22～1980.6.30	400㎡	

第１図　本書報告調査地位置図

長岡京市の位置



目　　次

序 …… i

凡例 …… ii

第１部　長法寺南原古墳第３次調査概要

第１章　調査経過 …… 1

1　はじめに　2　遺跡の環境と過去の調査

第２章　検出遺構 …… 5

1　発掘区の設定　2　墳丘の形態　3　石室の構造

4　排水溝　5　その他の遺構

第３章　出土遺物 …… 19

1　遺物の概要　2　円筒埴輪　3　銅鏃

4　その他の遺物

第４章　長法寺南原古墳と今里大塚古墳の石材調査 …… 29

1　古墳とその周辺の地形と地質　2　長法寺南原古墳の石材

3　今里大塚古墳の石材

第５章　総括 …… 32

第２部　長岡京跡調査概要

第１章　長岡京跡右京第94次（７ANQUD地区）調査概要 …… 41

1　はじめに　2　調査経過・調査概要　3　検出遺構

4　まとめ

第２章　長岡京跡右京第119次（７ANKSN－２地区）調査概要 …… 49

1　はじめに　2　調査概要

第３章　長岡京跡右京第39次（７ANQMK地区）調査概要 …… 53

1　はじめに　2　調査経過・調査概要　3　検出遺構

4　出土遺物　5　まとめ

図　版　目　次

長法寺南原古墳第３次調査

図版　1　(1)墳頂部石室残存部分（北から）　(2)石室の控積と排水溝（南から）
図版　2　(1)石室の控積（東から）(2)Ａトレンチの柱穴群（東から）
図版　3　(1)Ｅセクション　(2)Ｄ区北壁西端部　(3)Ｄ区東壁
図版　4　排水溝（北から）
図版　5　排水溝（南から）
図版　6　(1)排水溝北端断面　(2)排水溝中央部断面　(3)排水溝南端付近（東から）
図版　7　(1)円筒埴輪（Ｈ１）　(2)円筒埴輪（Ｈ２）
図版　8　(1)円筒埴輪　細部　(2)円筒埴輪　ヒレ部
図版　9　(1)銅鏃　(2)円筒埴輪底部（Ｈ９）

長岡京跡右京第94次（７ANQUD地区）調査

図版　10　(1)第１トレンチ全景（南から）　(2)第１トレンチ全景（北から）
(3)第１トレンチ検出遺構（掘立柱建物ＳＢ9401・ＳＢ9402，柵列ＳＢ9403，南から）
図版　11　(1)第２トレンチ全景（南西から）　(2)第１・２トレンチ出土遺物

長岡京跡右京第119次（７ANKSN－２地区）調査

図版　12　(1)調査トレンチ全景（東から）　(2)Ａトレンチ全景（西から）

長岡京跡右京第39次（７ANQMK地区）調査

図版　13　(1)調査地東部遺構検出状況（北から）　(2)方形周溝墓3911　(3)方形周溝墓3914
図版　14　右京第39次調査出土遺物（鎌倉時代～古墳時代）
図版　15　右京第39次調査出土遺物（弥生時代以前）

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図

長法寺南原古墳第３次調査

第 2 図　長法寺南原古墳と周辺の古墳群…… 2
第 3 図　墳頂の石碑…… 4
第 4 図　天井石堆積状態…… 4
第 5 図　発掘区の名称…… 5
第 6 図　墳丘測量図…… 7
第 7 図　墳丘復原図……12
第 8 図　天井石実測図……14
第 9 図　石室と排水溝との関係……16
第 10 図　Ａトレンチの柱穴群と土層……17
第 11 図　埴輪実測図(1)……20
第 12 図　埴輪実測図(2)……21
第 13 図　埴輪実測図(3)……22
第 14 図　円筒埴輪の復原概念図……23
第 15 図　埴輪のハケメ拓影(1)……24
第 16 図　埴輪のハケメ拓影(2)……25
第 17 図　銅鏃実測図……27
第 18 図　排水溝の石材分布図…… 30
第 19 図　今里大塚古墳……31
第 20 図　長法寺南原古墳と今里大塚古墳の石室使用石材の産地と運搬ルート……31
第 21 図　墳丘断面図(1)……33
第 22 図　墳丘断面 図2)……35
第 23 図　排水溝の平面 図と断面 図……37

長岡京跡右京第94次（７ANQUD地区）調査

第 24 図　発掘調査位置図……41
第 25 図　第２トレンチ遺構配置図……42

第 26 図　第２トレンチ南断面図……42
第 27 図　第１トレンチ遺構配置図……43
第 28 図　第１トレンチ東断面図……43
第 29 図　掘立柱建物ＳＢ9401・ＳＢ9402実測図……44
第 30 図　柵列ＳＡ9403実測図……44
第 31 図　第1,第２トレンチ出土遺物実測図……46

長岡京跡右京第119次（７ANKSN－２地区）調査

第 32 図　発掘調査地位置図……49
第 33 図　検出遺構配置図……51

長岡京跡右京第39次（7ANQMＫ地区）調査

第 34 図　発掘調査地位置図……53
第 35 図　遺構配置図……54
第 36 図　土壙ＳＫ3901出土遺物実測図……55
第 37 図　溝ＳＤ3902実測図……57
第 38 図　溝ＳＤ3902出土遺物実測図……58
第 39 図　掘立柱建物ＳＢ3908実測図……59
第 40 図　溝ＳＤ3903・04，土壙等ＳＫ3905，Ｐ3906・07・10出土遺物実測図……60
第 41 図　方墳3909実測図……61
第 42 図　方墳出土埴輪拓本実測図……62
第 43 図　方墳出土埴輪実測図……62
第 44 図　方形周溝墓3911実測図……63
第 45 図　方形周溝墓3911の主体部……63
第 46 図　方形周溝墓3914実測図……63
第 47 図　方形周溝墓3911出土弥生土器実測図(1)……64
第 48 図　方形周溝墓3911出土弥生土器実測図(2)……65
第 49 図　方形周溝墓3914出土弥生土器実測図……65
第 50 図　方形周溝墓3911主体部出土石鏃実測図……65

付　表　目　次

付表－1　本書報告調査一覧表……iii
付表－2　右京第94次調査検出遺構観察表……45
付表－3　右京第94次調査出土遺物観察表……47
付表－4　右京第119次調査おもな検出遺構一覧表……52
付表－5　右京第39次調査検出遺構観察表(1)……66
付表－6　右京第39次調査検出遺構観察表(2)……67
付表－7　右京第39次調査出土遺物観察表(1)……68
付表－8　右京第39次調査出土遺物観察表(2)……69
付表－9　ＳＤ3902出土遺物高径指数表……72

第１部　長法寺南原古墳

第３次調査概要

第1章　調　査　経　過

1　はじめに

調査の目的　長法寺南原古墳は，京都府長岡京市長法寺南原1番地にある。ここ乙訓の地は竹林の発達することで著名であるが，この古墳もまた，緑豊かな竹藪となっている。

後にも述べるように，この古墳は1934年に発掘調査され，銅鏡をはじめ重要な遺物を出土した前期古墳として，学界でも有名な存在であるが，発掘後約50年の歳月がたち，竹の子栽培による，古墳の変形は年ごとに進んだ。これを，このまま放置するならば，この重要な遺跡の実態の解明が不可能になることを恐れて，本市教育委員会は，古墳の墳丘の現状と石室の構造を解明する調査を実施することとした。この調査にもとづいて本古墳の保存整備実施のための基礎資料を得ることをも意図しているのである。

そこで，昭和57年度は，まずてはじめとして，墳丘の現状を正確に把握することを主な目的とする調査を行うこととし，調査主任を大阪大学文学部助教授都出比呂志とする，市教委の調査体制を組織した。発掘調査期間は1982年7月21日から8月13日までであった。

参加者と役割分担　調査補助員として，大阪大学文学部の大学院と学部の学生および，大阪大学考古学研究会会員があたった。参加者名は次のとおりである。

西本昌弘，丹司正子，永松圭子，福永伸哉，禰宜田佳男，小野民裕，青谷尚美，福村千晶，川崎靖彦，松木武彦，国木健司，黒石哲夫，武田章，長谷川俊哉，中川すがね，細野一夫，樫原弘幸，鹿野正人，山向優，野村博，藤本真路，中西規之，竹中郁，松本みゆき，大隅伸一，岡本浩，中川匡夫，武田真治。

遺構の実測作業には全員があたった。遺物の整理・実測・製図などについても参加者の多くが従事したが，とくに西本昌弘，福永伸哉，禰宜田佳男，青谷尚美，松木武彦，国木健司，黒石哲夫，鹿野正人，山向　優らが中心的な役割を果した。

本書の執筆は，第4章が京都府立山城郷土資料館橋本清一氏によるほかは都出比呂志が担当した。

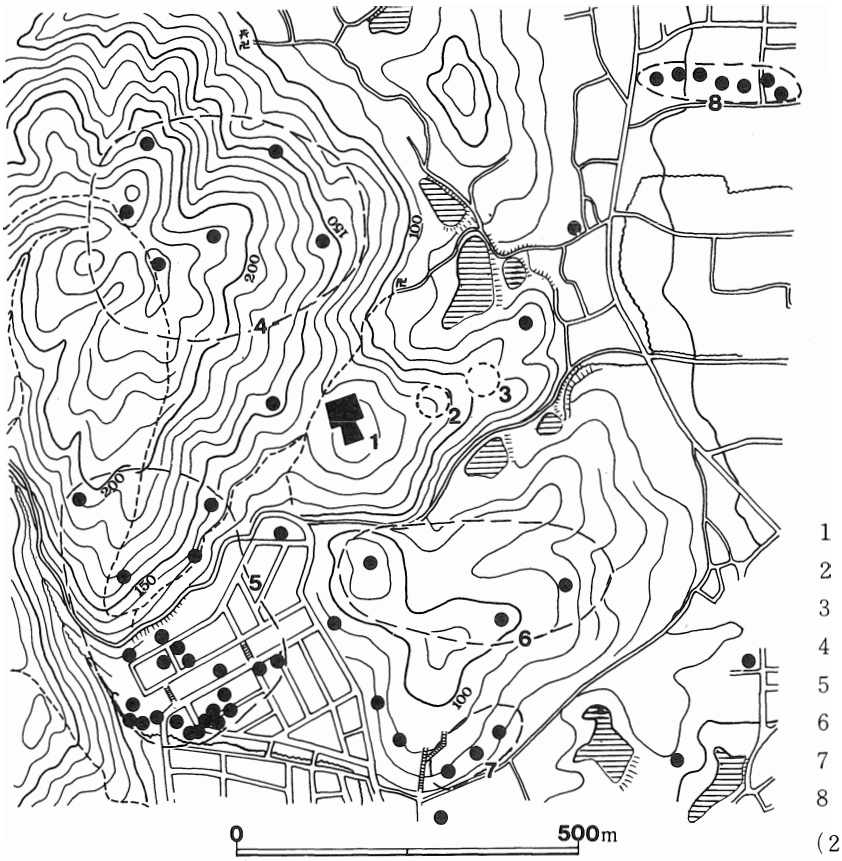
また写真撮影は，図版9の銅鏃が元文部技官高橋猪之介氏によるほかは，都出が担当した。

謝辞　調査に際して，多くの人々の御援助を受けた。土地の所有者藪内治作氏は調査を快諾されただけでなく，藤下清一郎，藤下多市の二氏とともに作業員の仕事を担当された。

古墳に近い天台宗長法寺住職の川西寂紹氏は調査に対して様々な便宜を与えられた。

子守勝手神社総代会は，調査団の宿泊のために社務所を貸与された。

古墳および周辺の土地所有者である藤下清一郎，佐藤宰四郎，小山乙吉，藪内信義の各氏は測量調査などにおける竹林への立ち入りを許可され便宜を提供された。



1　長法寺南原古墳
2　南原東１号墳
3　南原東２号墳
4　南原古墳群
5　大原古墳群
6　稲荷山古墳群
7　走田古墳群
8　七ツ塚古墳群
（２・３の名は仮称）

第２図　長法寺南原古墳と周辺の古墳群

京都大学名誉教授小林行雄氏は，調査地を訪れて有益な指導を行なわれ，また松岳山古墳出土銅鏃の写真撮影を快諾された。また京都大学保管の銅鏃の調査において，同大学助手の岡内三真氏のお世話になった。

岡山大学文学部教授近藤義郎氏のおはからいで，同文学部助手宇垣匡雅，同大学院生秋山浩三，吉村　健の三氏の援助を得た。

また，この報告書をまとめるについては前年度に大阪大学文学部国史研究室が実施した墳丘の測量調査と排水溝の一部の発掘成果に依拠するところが大きいが，その調査の実施において，同研究室の梅渓　昇・黒田俊雄両教授，脇田修助教授から御指導を得た。また，前年度の調査参加者のうち，今年度の調査に参加していない人々の名前を以下に明記して，その負うところを明らかにしておきたい。

岩松　保，伊藤寿夫，城石俊弘，清水薫，萩原政幸，野上瑞穂，

2　遺跡の環境と過去の調査

古墳の立地　古墳は桂川右岸地域の西山山塊の東斜面に立地し，西から東に舌状に張り出し

た尾根の最高部，標高にして約145mの地点にあたる。[1] この尾根の付け根にあたる西側にもまた小さな谷を形成しているので，視覚的には，古墳立地点は独立丘の頂部となっている。

周辺の遺跡　この古墳の成立の前史に関連する弥生時代の集落遺跡としては，東約1.5kmに今里遺跡があり，小畑川右岸の，この地域の水田開拓が早くから始まったことを示し，古墳のすぐ東の山裾の長法寺集落内でも弥生土器を出土する。

またこの周辺には，数多くの古墳があり，北に南原古墳群（6基），西には大原古墳群（25基），野山古墳群（3基），南には稲荷山古墳群（3基），走田古墳群（3基）などがそれである。すべて横穴式石室を有する後期の群集墳であり，この北約1kmのカラネガ岳古墳群（3基）や中山古墳群（2基）とともに長岡京市域において，山地に立地する群集墳の集中地域となっている[2]（第2図）。ただし，カラネガ岳古墳群中の第2号墳のみは前期末ないし中期初頭にさかのぼる，直径約30mの円墳であり，粘土槨の埋葬施設と埴輪を有している点で注目すべきものである。[3] カラネガ岳2号墳は，南原古墳とともに，この地域の古墳時代の首長系譜を考察する上で重要な古墳と考えられる。また今回の調査に伴って実施した周辺の分布調査の結果，本古墳の立地する丘陵の東斜面にも，前期・中期に遡る2基の古墳の存在が確認できた。この点については第5章で，あらためて述べることにしよう。

戦前の調査　南原古墳は1934年（昭和9）1月に竹藪の開墾中に発見され，梅原末治氏を担当者として，京都府による調査が実施された。[4] この調査の結果は以下のとおりである。

1）墳丘の形態は前方後円形であり，全長約70m，後円部直径は40～50mでその高さ4.5m，前方部を南にむけ，その幅は約24m，その高さ1～2mとなり，前方部が短い形式のものである。

2）埴輪，葺石は認められない。

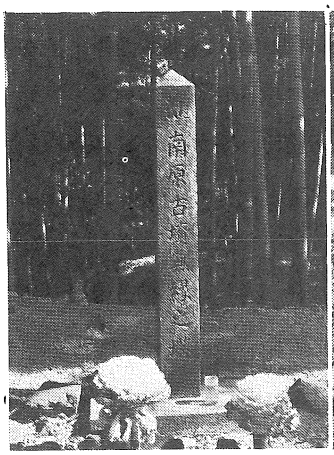
3）後円部の中央に，墳丘主軸に平行する竪穴式石室があり，長さ5.3m，幅1.0m，高さは北で1.35m，南で1.2mとなり，11枚の天井石で覆う構造をもつ。

4）石室内から発見された副葬品は三角縁神獣鏡4・盤竜鏡1・内行花文鏡1からなる鏡が6面，硬玉製勾玉6，碧玉製管玉19・ガラス製小玉287などの玉類，刀1・剣7・刀子7・鏃123・斧12・ノミ1・鉇片などの鉄器，漆付き麻布，石臼と石杵各1などから構成されている。

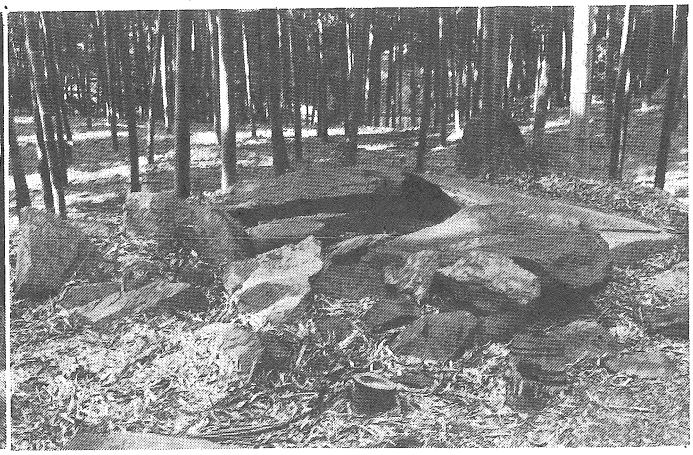
さらに，本古墳の副葬品が中国製の鏡のみからなり仿製の三角縁神獣鏡や碧玉製腕飾類など，前期古墳における新しい相の遺物群を含まない古墳の一つとして，小林行雄氏によって注目され，[5] 前期古墳の中で全国的にも重要な古墳として学界において有名なものとなった。

ところが，その後も竹藪の開墾は進み，石室部分のみは，かろうじて保存されたが，墳丘は著しく変形し，旧状を推測することさえ困難となった。また開墾にともなって円筒埴輪片が露出し，過去の調査時における，埴輪なし，との認識を修正した。

大阪大学による調査　破壊の進行する墳丘部分の現状保存と再調査の必要性とが認識されつ



第３図　　墳頂の石碑



第４図　　天井石推積状態

つも，有効な手だてが講じられないまま月日が経過したが，1981年（昭和56）１月，土地所有者薮内治作氏が竹薮の土入れ作業を実施中，石室の排水溝の一部が露出した。薮内氏から連絡を受けた都出は直ちに現状の写真と略測とによる記録をとるとともに，原状保存を薮内氏に要請し，長岡京市教育委員会に連絡した。

さらに同年７月20日から８月３日までの期間において，大阪大学文学部国史研究室を主体として発掘調査を実施し，墳丘測量，石室排水溝の北半部と石室墓壙控積の露出部分の調査と埴輪の検出を行った。

この結果，旧地形が保存されている北部と東部とにおける等高線を判読すると，後円部とされたものは，後方部の可能性があること，また葺石は一点も認められないことなど，重要な知見が得られ，今回の調査を実施する具体的な契機となった。[(6)(7)] なお，1934年の京都府による調査を第１次，1981年の大阪大学の調査を第２次，今回の調査を第３次の調査とそれぞれ呼ぶこととする。

注１）長岡京市発行の5000分の１の地図によれば，この最高部の標高は147.2mとなっているが，この数値は航空測量の評定点であり，府道山崎大枝線きわの基準点（No.54-5-2）のレベル52.798mを基準として測量の結果，145.49mの結果を得た。

２）長岡京市教育委員会『長岡京市遺跡地図』1982年。

３）岡内三真，和田晴吾，宇野隆夫「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」『史林』第64巻第３号，1981年。

４）梅原末治「乙訓村長法寺南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊，1937年。

５）小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』1956年。

６）大阪大学文学部国史研究室『京都府南原古墳の調査』（現地説明会資料）1981年。

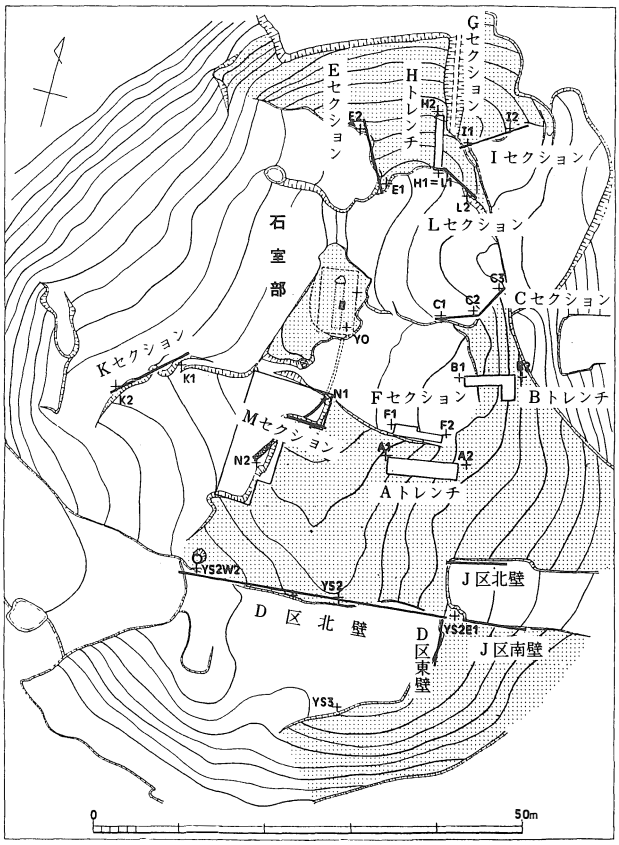
７）都出比呂志「京都府長岡京市南原古墳の調査」『日本考古学協会第48回総会研究発表要旨』1982年。

第2章　検　出　遺　構

1　発掘区の設定

1934年の調査以後，約50年間の墳丘の形の改変は極めて著しい。毎年の竹薮の土入れ作業によって深く削られた部分と，旧地形を保存している部分とを識別した結果，石室のある中央の高まりを中心として，北部と東部とにかろうじて旧地形が残っていること，また前方部は，かなりの部分が，まだ保存されていることが判明した。そこで，破壊され，削られた部分については，その崩壊部の崖面の断面観察を実施し，旧地形が保存されているところには，新たにトレンチを設定して断面観察を行い，これらを総合して墳形を確認することとし，西側クビレ部の排水溝については，その面的広がりを捉えるために発掘区を広く設定した。第5図に，トレンチと，断面観察区とを示す。

墳丘の主軸線が正確に把握できない発掘以前の段階で，方眼地区割にもとづくグリッドを設けてトレンチを設定するのは，今後の調査にかえつて不便をきたすおそれがあると判断し，ひとまず，トレンチの設定については墳丘の傾斜面のコンターに直交する方向を重視し，かつ栽培中の竹の伐採本数を極力少なくし得る位置を選んだ。トレンチ名と，断面観察セクション名とは，調査の進行にともなう設定の順にアルファベット名称A～Nをつけた（第5図）。



第5図　発掘区の名称（アミ部分は旧地形の保存された部分を示す）

2　墳丘の形態

(1)　トレンチおよび崖断面の観察

トレンチおよび崖面セクション（以下セクション区と呼ぶ）の断面観察にもとづき，墳丘の裾と段

築のテラスや斜面部の平面位置と高さとを考察することにしよう。墳丘斜面に葺石を施さないため，斜面，テラス，裾などの決定において必ずしも明確でない地点もあるが，各地点の観察を有機的に総合して，最も矛盾の少ない復原案を示すことをめざすこととしよう。

トレンチおよびセクション区における断面図は第21図と第22図とに示すが，図の判読の便宜を考えて，以下のように配列して解説する。

セクション区の切断線は，露出した崖面の清掃にもとづくから，方向は一定しない。そこで，このうち切断線が東西方向を優位とするものについては，南から北を見る方向に，図を統一して表現する。したがって，C，F，Kの各セクション図は，本来トレンチ南壁を北から見た実測図であるが，第21図においては，その反転図を掲げる。またJ区南壁セクションの北からみた実測図を反転させてD区北壁図と連続させ，前方部の横断面を一枚の図に合成した。

同じように，セクション切断線が南北方向優位の図は，西から東を見る方向に図を配列する。したがってF，Hの各セクション区は反転図を掲げる(第22図)。

なお，上述のようにセクション切断方向が墳丘主軸に対して多様な方向をとるために，断面図に示された水平距離は，そのままでは墳丘の斜面やテラスの幅を示さない。したがって以下の断面図の説明の叙述において，斜面やテラスなどの長さの数値は墳丘主軸方向に平行ないし直交する方向で計測した場合の数値に換算して示す。つまり，墳丘主軸は，ほぼ南北方位をとるので，南北y mといえば，墳丘主軸方向線上での長さを，東西x mといえば，主軸と直交する方向での長さに換算したものである。

以下に，それぞれのトレンチとセクション区ごとの観察結果を述べよう。

(2)　東西方向の断面図（第21図）

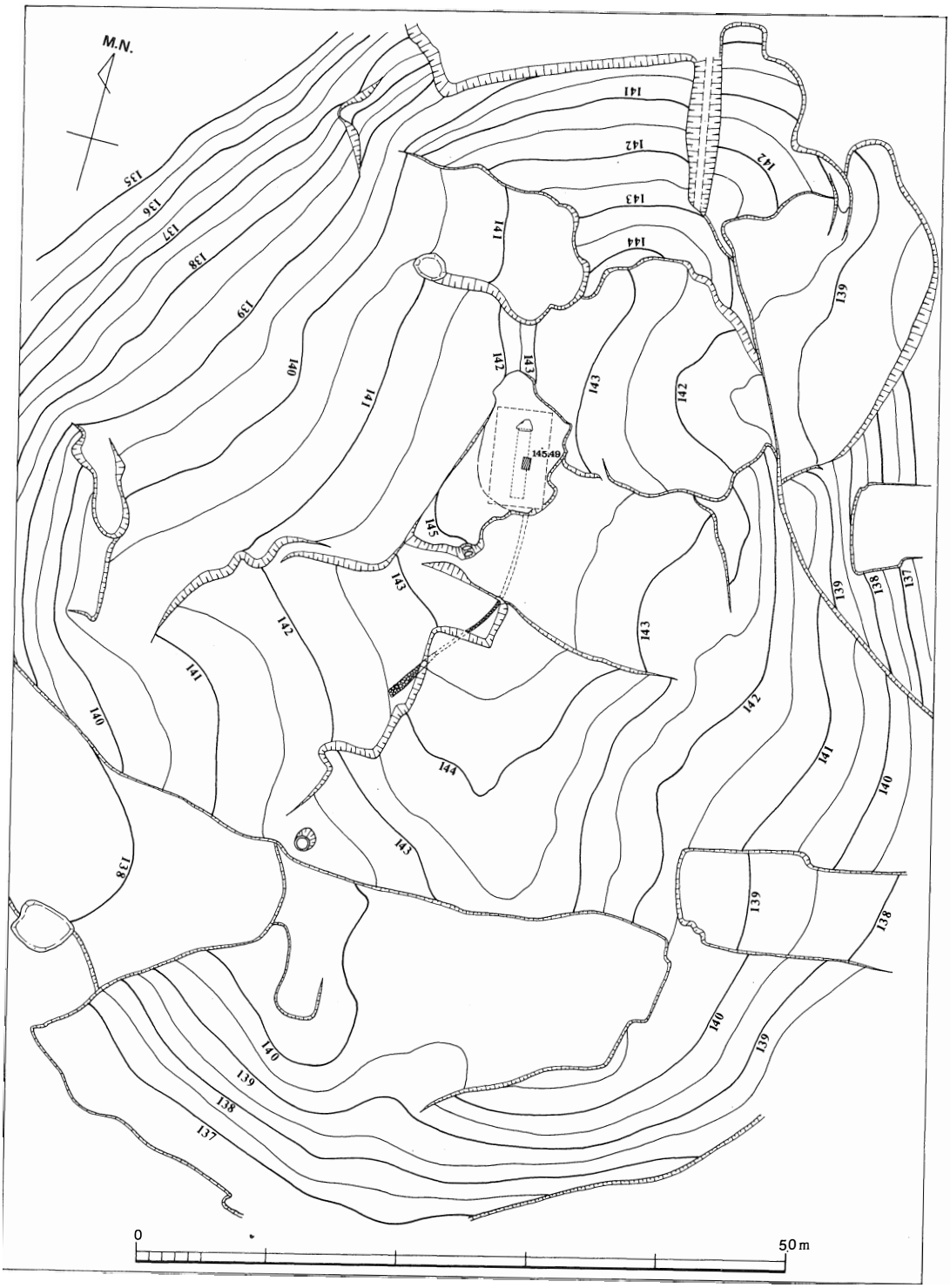
まず，断面観察を最も広く実施できた前方部のD区北壁から記述するのが理解しやすいと思われるので，ここから，順次北の区の図へと叙述することとしよう。

Dセクション区北壁（第21図10）　この部分において，前方部南端付近の崖面における東西方向の横断面の土層が明瞭に観察できた。

標高142 mを最高点とする地山上面は，中央付近が最も高く，その東と西とが低い。さてこの面の凹凸が激しいので，地山上面と考えるには不自然な感を与えるが，風化作用や雨水などの流水によつて丘陵上面が侵蝕された結果できた細かな起伏を示すものと考えられる。

墳丘の裾の位置は西辺において明瞭に検出できた。すなわち，YS_2 の西12.5m付近において地山を削つて高さ0.4 mの段状の落ちこみがあり，その西に幅1 mの溝と幅0.4 mの堤状の隆起があり，ここから，西約5 mにわたって徐々に上方に傾斜している。これらの起伏は，すべて地山面を削り出して作っている。この特徴から，YS_2 の西12.5m付近の落ちこみ部を前方部墳丘の西側の裾と考えて間違いない(図版3－2)。

この裾部から東へ幅2.0 mの平坦面が続くが，これを第一段目のテラスと考えよう。さらに



第６図　墳丘測量図（500分の１）

YS_2 から西10.5mの付近で急に立ち上がり，西８ｍ付近まで幅1.5ｍの平坦面をつくる。これは２段目テラスと考えられる。この部分も地山を削り残して造成している。ここから東の中央部にむかって，ゆるやかな傾斜が続き，さらに標高142.5ｍのレベルで盛土を水平に整えていることが観察できる。さらに，この上に厚さ0.5ｍの盛土があり耕作土層直下のこの土層の最高部のレベルは143.0ｍとなる。このことから，断面図では明瞭にあらわれないが，YS_2 の西８ｍ付近が第３段斜面の下端を示すと考えられよう。

次に，東の裾部を考察しよう。まずＪ区南壁反転図において，YS_2 から東へ13.5m付近に落ちこみがある。ここでも西裾と同様に幅約１ｍの溝と，その外側に堤状の高まりが認められるので，この部分を東端の裾と考えてよいであろう。こう考えると，２段目テラスの東端は YS_2 の東12ｍ付近に始まると考えられるが，土地の所有境界線にあたるため発掘不能であった。

一般に各調査区の断面図を通覧すると，現在の竹藪の地表面下に厚さ１ｍほどの耕作土（約50年間にわたる毎年の土入れの堆積土層）があり，その直下に厚さ約５cmの黒色土層が存在する地区が多い。この黒色土層は，竹藪開墾以前の旧地表と考えられるから，これが確認できる部分は，開墾による攪乱を受けていないと考えてよいわけである。

ところが，このＤ区北壁では，この黒色土層は認められない。藪内氏の記憶では，この部分は，耕作にあたって削らず，逆に土を他から持ち運んで盛ったというから，大きな削平はないとしても，旧表土は若干削られているのであろう。したがって，前方部南端におけるもとの墳頂部のレベルは，143.0ｍよりも若干高かった可能性を考えておきたい。

Ｊセクション区北壁（第21図９）　この部分では前方部東辺裾の外側を削平した平坦面と，その東側の立ち上りと考えうる段を検出した。この段の高さは0.2ｍである。この地点は前方部東辺裾の推定位置より東約４ｍにあたる。

Ｆトレンチ北壁（第21図６）　西端から幅0.6ｍの水平面があり，これに続いて東へ緩やかに傾斜する。ここも地山を削り出して造成している。水平面のレベルが142.5ｍであることから，後円部ないし後方部の２段目のテラス肩部にあたると考えられる。

Ｍセクション区反転（第21図２）　排水溝の掘方の東の肩部から東に上る傾斜面を検出した。排水溝に充填した礫の上面のレベルが142.5ｍであることから，これが西側クビレ部の第２段目テラス上面にあたると考えられる。また，この東に小さな斜面と水平面が存在し，さらにその東にまた別の斜面が始まっている。この水平面を重視するなら，ここが，第３段目のテラス上面で，レベルは143ｍ付近にあり，さらにこの東（東北）に後円部ないし後方部の第４段斜面が続くものと考えられる。

Ａトレンチ北壁（第21図８）　この部分は中世の柱穴などによる攪乱があるが，A_1 から東３ｍ付近に高さ0.3ｍほどの段があり，その東の外側に幅１ｍの浅い溝状のおちこみが認められるから，この部分を前方部東辺裾と考え得る。こう考えると，A_1 の東１ｍ付近の立ち上

がりの下端のレベルが141.5ｍであることから，ここから西に上る第２段目の斜面が考えられる。

Ｂトレンチ北壁（第21図７）　Ｂ$_1$の東約２ｍまでは標高142.0ｍの水平面をつくるが，ここから東はゆるやかな傾斜面となり，Ｂ$_1$の東６ｍ付近でかすかな段をつくる。この段の下端のレベルが141.0ｍを示すから，ここを後円部あるいは後方部の東辺裾と考えてよいであろう。

Ｃセクション区南壁反転（第21図５）　Ｃ$_2$の西1.5ｍからＣ$_2$の東0.8ｍまで，幅約２ｍの水平面が続きその東はゆるやかに傾斜して下る。したがってＣトレンチの調査区の東の外側に基底部裾を認め得るはずであるが，土地所有の境界線上にあたるため発掘はできなかった。またＣ$_2$の西1.5ｍでは西側に急に立ち上っており，Ｃ$_2$付近の地山上面のレベルが142.0ｍを示すことから，ここを後円部あるいは後方部の第２段テラスと考えてよい。さらに，この西の急な立ち上がりが第３段斜面とし得る。第３段斜面の上面テラスのレベルは142.8ｍとなり，斜面の水平距離0.8ｍ，テラス幅は1.3ｍ以上とわかる。

Ｌセクション区北壁（第21図３）　Ｌ$_2$の西1.4ｍに低い段があり，この東が142.2～142.5ｍのレベルを示して水平に近いこと，これが次に述べるＩセクション区の西端で検出した急角度の段と連続するものと考えられ，第２段目のテラス部と推定する。こう考えれば，Ｉ$_2$の西1.4ｍから西の低い段は第３段斜面の残存部を示すと考えられよう。

Ｉセクション区北壁（第21図４）　Ｉ$_1$の東0.3ｍで西に上る急角度の段があり，この段の下端から東2.5ｍは水平で，さらにＩ$_1$の東3.4ｍで高さ0.3ｍの低い段が認められる。この東側の低い段の下端レベルが140.8ｍであることから，ここを東辺の裾と考えてよい。したがって，この図の西端の急な段は第２段目の斜面と考えられる。

このセクションにおいても，東端裾の東の外側に幅２ｍの，浅い溝状の削りこみが認められることは注目されよう。

Ｋセクション区南壁反転（第21図１）　Ｋ$_1$の西2.4ｍから4.4ｍまでの幅２ｍの間に明瞭な溝を削りこんでいる。溝底のレベルが141.3ｍを示すことから，この部分を後円部あるいは後方部の西辺の裾と考えてよい。ここでも裾部には高さ0.35ｍ，幅1.5ｍの第１段目のテラスが設けられていることが確認できた。

(3)　南北方向の断面図（第22図）

つぎに，南北方向の断面図の説明にうつろう。

Ｇ・Ｈトレンチ西壁反転（第22図１）　Ｈ$_1$の北1.5ｍから北へ水平面が続き，この部分の地山上面のレベルが142.2ｍを示すことから第２段目テラスと考えうるが，Ｈ$_1$の北５ｍ付近に大きな自然の岩塊があり，ここでは北辺裾を明瞭につかみ得なかった。岩塊が障害となって，この部分ではもともと裾を削り出していなかった可能性もある。

Eトレンチ西壁（第22図2，図版3-1）　E_2付近に段があり，そのレベルが141.5mとなるので，この部分が北辺裾と考えられる。E_2の南1.5m付近から南へ若干の傾斜をもつ水平面があり，その幅が約2m，上面レベルが142.0mを示すから第2段目テラスと考え得るが，他の調査区の第2段目の立ち上りに比べて高さも低く，傾斜もゆるくなっていることから，この部分では第2段目の肩部は，土砂の流出などによる変形を受けているものと考えたい。

またE_1の南4m付近から南に幅1m前後の平坦部が認められるが，これは第3段目の斜面のテラスを示すものであろう。テラスのレベルは142.8mをはかる。さらに，E_1の南5m付近から，約30度の角度でE_1の方向へ南に立ち上る傾斜面は第4段目の斜面と考えられよう。

Fトレンチ西壁反転（第22図3）　ここで，標高142.5mの水平面の南の肩部を検出した。そのレベルからこの肩部が，後円部あるいは後方部の第2段目テラスの南端肩部にあたると考えられる。

Dセクション区東壁（第22図4，図版3-3）　標高140.4mの平坦面がここで落ちこみ，高さ0.4mの低い段をつくって，その南に幅1mの溝と，さらに南方外側に幅1.2mの堤状の高まりがある。これらの段や溝は，すべて地山を削り残して造成している。この溝の北端が前方部南端を示すと考えられる。

Nセクション区西壁（第22図5）　N_1から南4m付近で傾斜角35度で南に下降する斜面が終り，ここでレベル143.0mの平坦面の北端が検出された。このレベルからいって，後円部あるいは後方部の第3段斜面の上面テラスと考えられるから，その北の斜面は第4段斜面と解釈する。なお，このレベル143.0mの平坦部より南はゆるやかな傾斜部となるが，このセクション部の平面的位置は，前方部の西側斜面部を縦断しているので，前方部墳丘の段築成のポイントを反映するものではないと考えられる。

(4)　墳丘形態の復原

墳丘裾と周溝　以上の断面図の考察にもとづき，墳丘の形態と規模とを復原してみよう。まず，墳丘の裾部を検出し得たところでは，裾の外側に幅約1mの浅い溝がめぐり，D区の前方部の西辺，東辺，南辺，また後円部ないし後方部の東辺I区と，西辺K区では，この溝の外側に堤を削り残すか，わずかな高みを残している。このことは，墳丘の外側に幅1m内外の周溝をめぐらせて墳丘と外側とを意識的に画していることを示しており，この古墳が葺石を有しないことによる，裾の不明確さをこれによって補っていると考えられよう。

こうして，裾の基底部のレベルは前方部の南端の周溝底で140.5mを示すほかは概して141.0m付近にあり，墳丘の裾を水平な基底面上におこうとしていることがわかる。このことは，前方部においてとくに，周溝の外側にさらに幅4～5mの水平面を削り出していることとも密接な関連を持つといえよう。

段築成　墳丘斜面には段築成が認められるが，他の畿内地方の前期古墳のそれとは異なる

特徴を有することは注目すべきである。

まず，第１段目は，葺石をもつ古墳の場合，裾端部から，いきなり傾斜面が始まるのであるが，本古墳にあつては，0.3～0.4mの低い段を有する，幅２m前後のテラスを設けており，この点は特異である。この部分を，墳丘裾の「犬走り」としてのテラスと考えてもよいが，上記の断面図の説明においては，これを第１段テラスと呼んだ。

この上に，さらに，第２段目斜面が築かれるが，どの調査区においても，２段目は地山を削り出していることが観察できた。第２段斜面の上面のテラスのレベルは142 m前後であるから，第２段斜面の高さは１ m前後であり，上面テラスの幅は1.5～２ mを示す。さらに，この上に第３段目斜面がつくられ，その上面テラスのレベルが143 m付近にあり，ＥとＭのそれぞれのセクション 区の観察結果からテラスの幅は１ m前後と考えうる。

さて，後円部あるいは後方部においては，さらに第４段斜面部をつくる。第４段目の高さつまり墳頂高を正確にはかり得る部分は既に消滅してしまった。しかし，1934年の調査時に天井石が地表下約1.2mで検出されたとの記録がある。天井石の上の覆土のうち，表層に存在したと考えられる腐蝕土の厚みを0.3m程度と見積って差し引くと，天井石の上の盛土の厚さは 0.9 m となる。現在も原位置にある北端の天井石の上面のレベルが 145.２mであるから，これに 0.9 mを加えて計算すると墳丘頂のレベルを 146.1 mと推定できよう。

このことから第４段斜面部の比高は約３ mと推定できる。ところで，Ｅセクション区において，第４段斜面部の角度は約30度であるから，比高３ mを得るには，斜面の斜距離は６ m，水平距離は5.２ mとなる。

後方墳としての復原　以上の各調査区の，裾，斜面，テラスの位置と高さとを勘案して，墳形を復原すると，後円墳と考えるよりは後方墳と考えるほうが適合的であることがわかる。とくに，Ｉ，Ｃ，Ｂの各調査区における東裾の位置が直線で結び得ること，また，Ｉ区における東の裾と，Ｅ区における北裾とを結んで，円形をつくり，かつこれとＩ，Ｃ，Ｂにおける東裾とを円として結ぶことは不可能である（第７図）。

このようにして，後方墳としての復原案を考えることは，発掘以前の墳丘測量図において，旧地形残存部の等高線が北部と東部とで直線的であり，かつ，Ｉ調査区付近でほぼ直角にまがることとうまく適合するのであり，発掘の結果においても，I_2付近が東北の裾にあたることが確認できた。以上の考察にもとづき，後方墳と結論づけたい。

さて，前方部の墳頂の高さは，Ｄセクション区の項で述べたように，現存の143.0 mより若干高いと考えたい。周溝底面 のレベルが140.5 mであるから，前方部の墳頂の高さは最低2.5 mはあり，2.5～3.0mの間に考えておきたい。

以上の考察にもとづき，墳丘の規模は次のように考えられる。

全長；58～60m

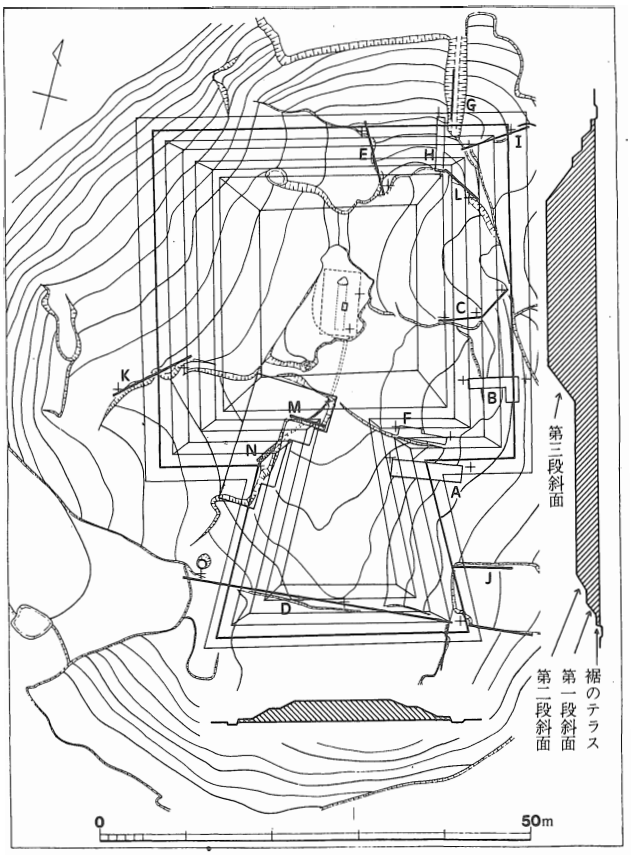
後方部の一辺の長さ；40m，高さ(推定)；５m

前方部長さ；20m，前方部幅；28m，高さ；2.5～3.0m

後方部３段，前方部２段　さて，以上の記述では，基底部の低いテラスを第１段テラスと表現したが、ここを第１段と呼称すると、後方部は４段築成となる。しかし、これを，墳丘裾の「犬走り」的な平坦面と見なすと，先に第２段斜面と記述した部分以上が，墳丘斜面部にあたることになるから，後方部３段，前方部２段の前方後方墳となる。

墳丘の復原を，このように考えると，後述する排水溝は，西側クビレ部において，後方部と前方部との境界の谷底線下に掘削されたことがわかる。また，排水溝の最下部の終点は，クビレ部の基底裾に合致し，排出された水が，周溝部に流れこむよう計画されたものと言えよう。

また，３に述べる「石室部」で観察できた地山上面のレベルは144.6～144.7mであり後方部の墳頂の推定高が146.1 mであるから，後方部は高さ５mのうち３分の２が自然地形を利用していることになる。また前方部は，その北半部のほとんどは地山を削り出したのみであるが，南端部では，地山のくぼみに厚さ１m内外の盛土を施していることは先に述べたところである。



第７図　墳丘復原図

３　石室の構造（第８図・第９図，図版１～２）

天井石　後方部墳丘の，かなりの部分は原形を失ったが，石室のある中央部分のみは，かろうじて保存されており，南北約15ｍ，東西約７ｍのほぼ長方形の高まりとして残っている。この部分を「石室部」と呼ぼう（図版１）。

1934年の発掘後，石室は埋めもどされたが，薮内氏の記憶によれば，天井石の北端の一石が原位置にとどめられたのみで，他の天井石は動かされて墳丘上に留められ（第４図），この石のうちには後に長法寺集落内に持ち運ばれたものもあるという。

調査としては，まず墳頂部に放置された石を実測し，さらに原位置にある北端の天井石を再発掘し，過去の石室実測図と対照することとした。また，ここから搬出された天井石の一つが本古墳の北200ｍの天台宗長法寺の碑石に利用されているので，これをも調査した。

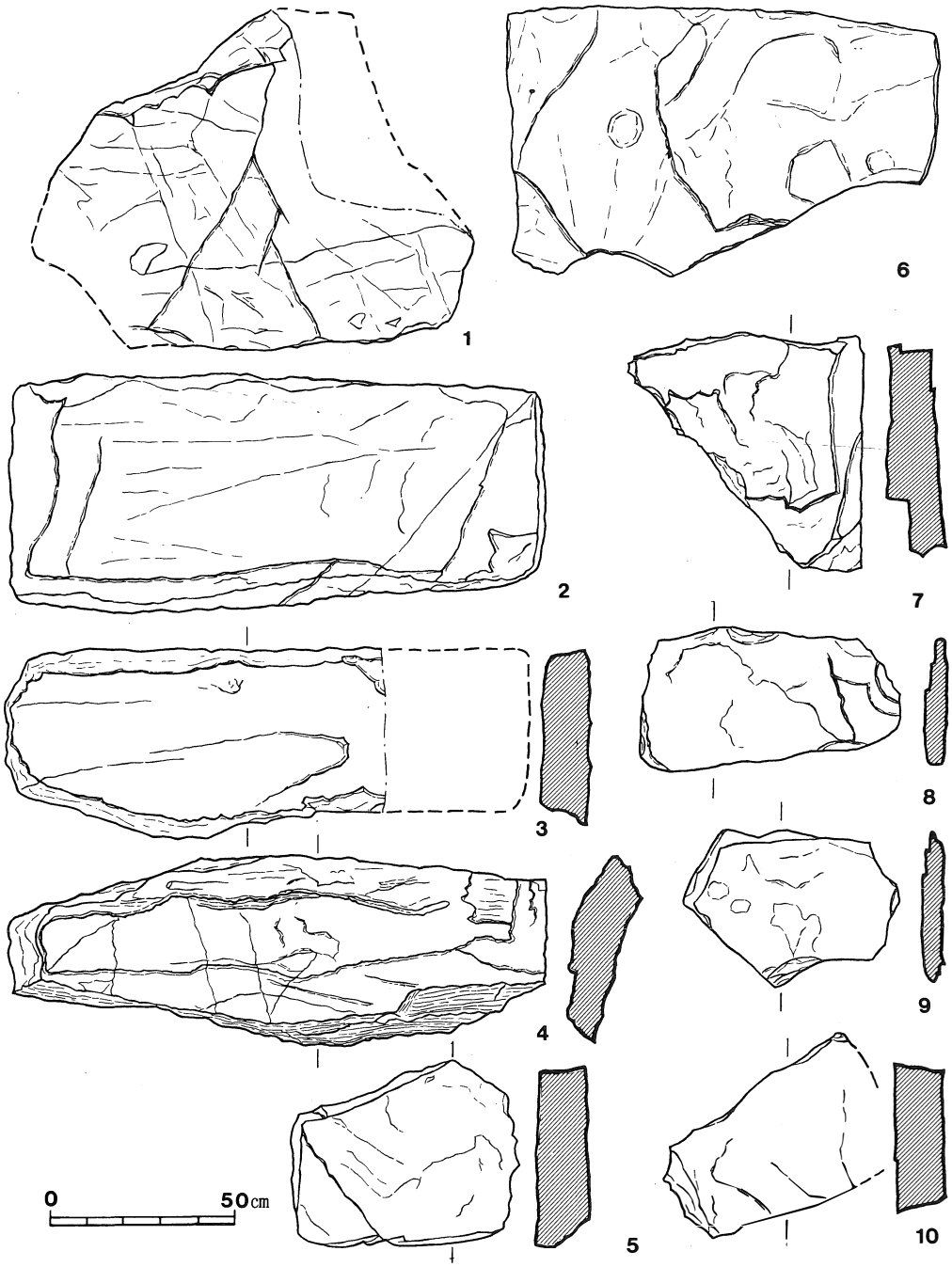
第８図は，これら天井石の実測図であるが，これを過去の実測図と比較対照して，遺存する資料の確認作業を実施した。

過去の調査図における石室天井石に，北端から第１～第10の番号を付すと，現在も残存するものは，１（第８図－１），２（同図－２），３（同図－３），５（同図－４），６（同図－６）であり，図に示す他の石（同図５，７～10）は，大きな天井石の隙間を覆っていた小石と考えられる。このうち，天井石の第１石は原位置に，第３石は長法寺の碑石として，第６石の３分の２が石室部西側の斜面に転落して埋没して，それぞれ残存し，これ以外のものは墳丘上に積み上げられている（第４図）。このうち堆積の下部にある石については実測図を作成できなかったものもあるから，あと若干の石が残存していると考えられる。

これらの石の材質については第４章に橋本清一氏が記すように，やや熱変成を受けた石灰岩，砂岩，頁岩～粘板岩，チャートからなっている。

墓壙の露出　つぎに，石室部の高まりの東南部崖面で検出した墓壙内控積と排水溝の「とりつき部」とについて述べよう。まず，前者は，東南部崖面に露出した割石のことであり（図版２－１，第９図），石室の位置との関係から，この部分を石室用の墓壙掘方の東南隅と推定でき，従って，水平に長軸をもつ割石は，この墓壙内の控積の石と考えられる。ここで認められる石材は，緑色岩と砂岩とからなる。また，この崖面において観察し得た地山上端のレベルは，144.7ｍである（第９図）。

排水溝　また，石室部の南部崖面を調査した結果，ここで，排水溝の断面を検出し得た。まず，144.5ｍのレベルを示す地山上面から切り込んで，上面幅0.5ｍ，深さ1.3ｍの溝を掘りこみ，この中に角礫と円礫とを詰めている（第９図）。石材は，砂岩，チャート，緑色岩からなる。図に示す，排水溝上面左の大きい石は墓壙内控積の上端の石が露出しているものと考えられる。



第８図　天井石実測図

過去の調査において石室内壁の実測図は作成されたが，墓壙や控積など，細部の構造は未解明のままである。今回の調査は崖面の露出部のみの小部分に限定されたが，この調査結果だけからでも，墓壙の形態や規模とに関して推定を加えることが可能となったので，それを次に記すこととする。

石室墓壙の構造　まず，過去の調査の磁北ラインと北端の天井石とを基準にすると，石室の基底部の平面形は第９図に示すとおりである。この石室中心軸との位置関係からいって，石室部東南部崖面に露出する割石は，墓壙東南部隅に近いと考えられることから，墓壙が長方形として，その大きさは，地山上面で，南北7.5ｍ，東西4.8ｍと復原できよう。また，石室部の北部と西部の崖面で観察できた地山上面のレベルは，144.6～144.7mを示しており，墳頂部における地山上面は北がわずかに高い平坦面をなしていたことが窺えるが，石室の墓壙の大部分は地山を削って掘りこんでいることが判明した。

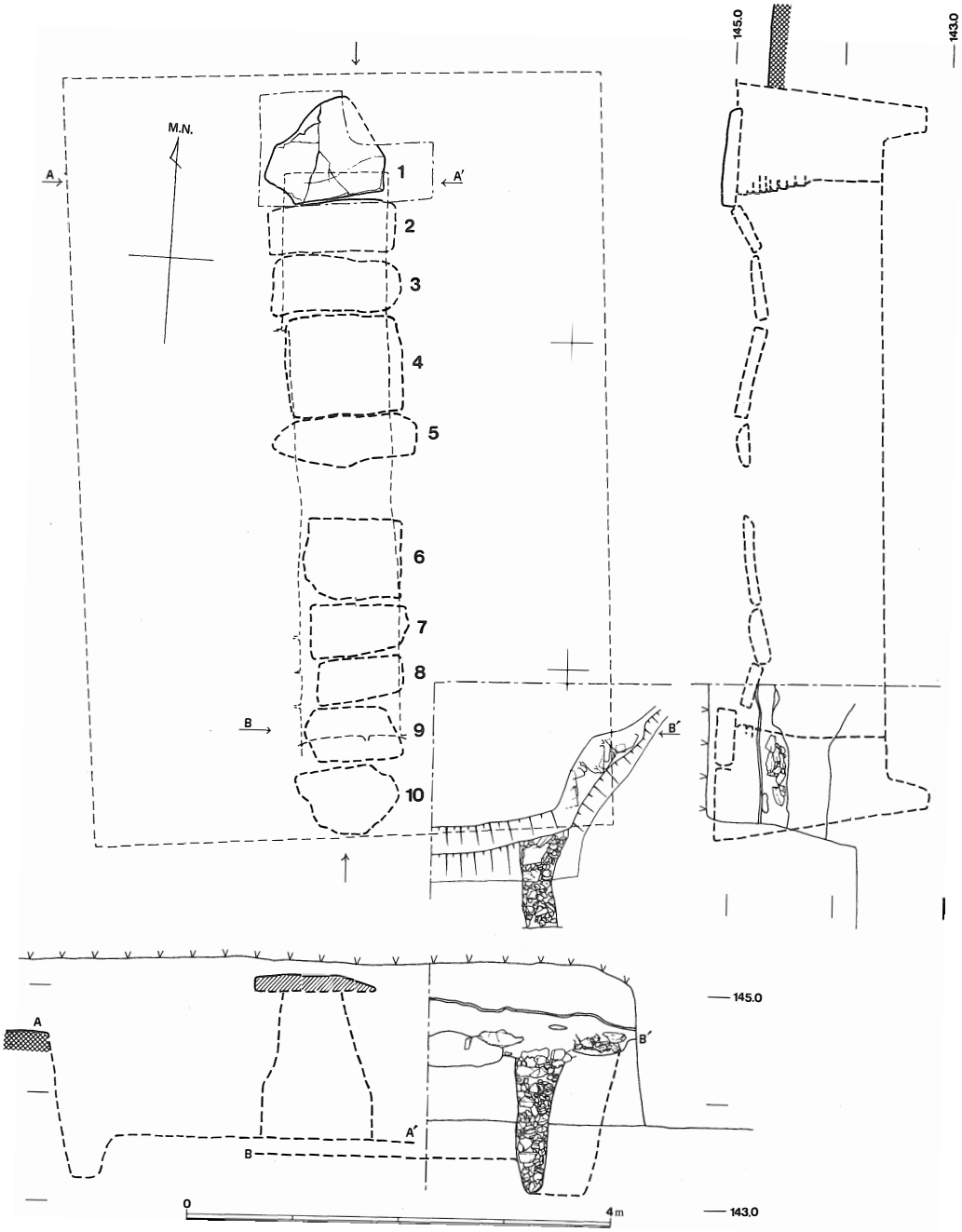
また過去の調査において梅原氏は石室内の粘土床の直下は砂地の地盤と記述している。過去の実測図と対照すると，粘土床直下の地盤のレベルは石室南端部で143.5ｍと計算される。ところが，先述の排水溝の底面のレベルは143.1ｍで，これより0.4ｍ低い。したがって，墓壙南端部で，底面が急に落ちこんでいるか，そうでなければ，向日市の元稲荷古墳や寺戸大塚古墳，あるいは大山崎町鳥居前古墳など，乙訓地域の他の前期古墳で確認されているように，墓壙底の四周に溝をめぐらせ，粘土床面下の基盤は高く削り残す構造と考えられる。前者の案のような構造は類例に乏しいことから，同じ乙訓地域の他の古墳と類似する後者の案で推定復原図を示しておくこととする（第９図）。

したがって排水溝は，墓壙壁の地山部分を深く削りこんで，南方へ水を流そうとしていることがわかる。平面図（第９図）に示すように，かろうじて残存した部分から，その走向の方向が分かるが，これより南部は竹藪の開墾で，消滅しているが，この南方約７ｍの西側クビレ部において，この排水溝の南半部が遺存していた。それを次に述べることとしよう。

４　排水溝（第23図）

溝の走向　石室墓壙東南部にとりつけられた排水溝は，その南は消滅しているが，西側クビレ部に，延長部分が遺存した。遺存部の北端は平面図においてちょうど，後方部第３段斜面の中央付近にあたり，溝の掘りこみ点における地山上面のレベルは144.0ｍであるから，高さの点からも，第３段斜面部の２分の１付近と考えて矛盾しない。この位置と，先述の石室東南部の「とりつき部」とを結ぶと，ほぼ南北方向となり，ここまでは石室の主軸と同じ方向で，約7.5ｍほど延長されていることがわかるが，ここまでの溝底の比高差は0.3ｍであるから25分の１勾配である。

さて，この北端部の断面観察によれば，地山を掘りこんで上面幅0.4ｍ，深さ1.2ｍの，底



第９図　石室と排水溝との関係

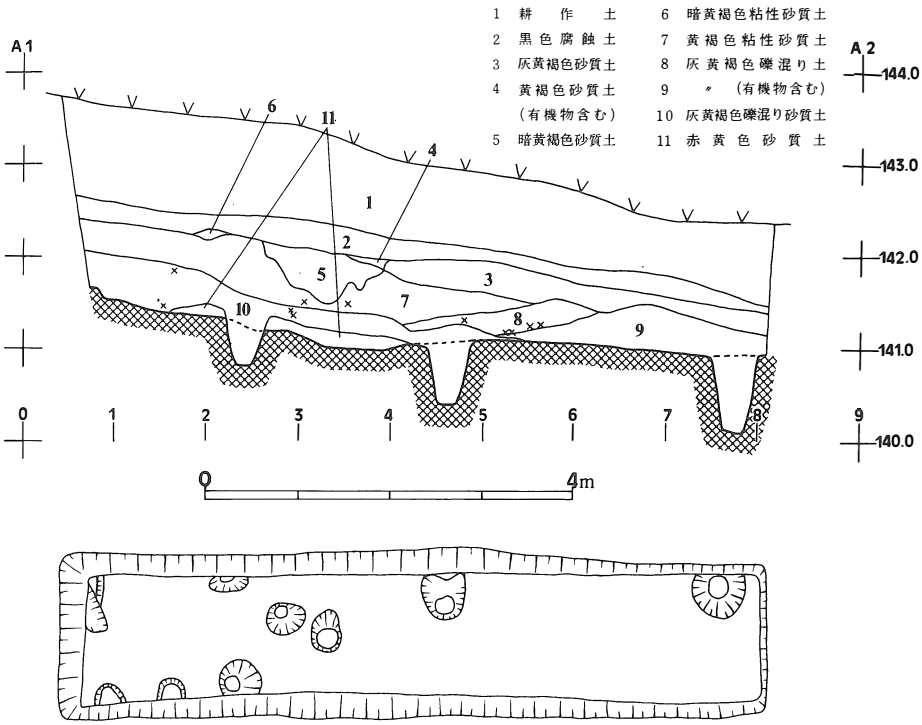
この図は，石室部東南部崖面における壁体と排水溝の露出部および石室天井石のうち原位置にある北端の石の実測図と1934年の石室実測図とを合成して，墓壙の輪郭を推定復原したものである。排水溝の「とりつき部」は，第18図をも参照。

がU字形を呈する溝を掘り，厚さ 0.6 m，つまり溝の下半部を礫で詰めたあと，この上に土を覆って埋めもどしていることがわかる（図版６，第23図）。

さらに，この地点から南へ約1.5 mの地点で，急に西向にカーブを描いて走向を変え，南西方向に約10.5 mまで延びている。この南西方向の走向線の位置は，第１章２に述べた西側クビレ部の谷の線に一致していることから考えると，排水溝は石室から南９ mほどは，石室主軸と同じ方向に走り，クビレ部にぶつかったところで，南西に角度を転換したと説明できるのである。

詰石の作業単位　さて，排水溝は実測図基準点N 1の西南４ m付近から徐々に幅を広くつくり，N 1 西南6.5 m付近のセクション図に示すように，深さも浅くなっている。さらにN 1の西南９ m付近では，さらに浅くなって厚さ0.3 mぐらいに礫を詰めるのみとなる。このような変化を生んだ原因として，墳丘の低い部位ほど後世の土砂の流出が激しく，上面が削られた結果と考える余地もないではないが，溝底のレベルを比較すると，N1 付近で142.85m，N1 西南2.35m地点で142.55m，N1 西南6.4m地点で142.15m，そして南端部では142.10mとなり，全体としての平均勾配は14分の１ではあるけれども，N1 西南６ m付近から南方で，急に緩やかな勾配に変って，水平に近くなることがわかる（第23図）。

つまり，この勾配の転換点がクビレ部第１段斜面上部と一致し，ここでは段築の高さが約１ mと低いから，傾斜度が急に緩やかになる部分にあたるのである。



第10図　Ａトレンチの柱穴群と土層

このように考えると，排水溝の深さ，詰めた石の厚さの数値が小さくなることの意味も合理的に説明できるから，溝の深さの変化は当初の状態をとどめたものと理解してよいであろう。

さて，使用石材は角礫と円礫とからなる。石の材質などについての詳細は第４章にゆずるが，緑色岩類，チャート，砂岩からなり，また地点によって礫の大きさの差が認められた。すなわち，N_1 から南２ｍ付近を境にして，北は小さく，南は大きい。また，同じく６ｍ付近を境にして，南には特別に大きい礫が使われ，また８ｍ付近から南は，再び小さい礫となる（第23図，図版６－３）。これは，溝内に石を詰めるに際し，ほぼ２ｍぐらいおきに作業工程の節目，あるいは作業単位が存在したことを示している。それぞれ異る地点で採集された大きさの異る礫群が使用されているとも考えられよう。

こうして，南端部では，礫の厚さは薄くなり小さな礫が，散在する形で終っているが，この溝の終点は第１章に述べた墳丘復原案によれば，クビレ部の裾に合致するが，ちょうど，この地点で浅い落ちこみの肩部が残存したことは，以上の復原案に適合的である。こうして，排出された水は，墳丘外の周溝に流れこむように設計されていたと考えられる。

５．その他の遺構

以上に述べた古墳時代の遺構のほか，東側クビレ部付近に設定したＡトレンチにおいて柱穴群を検出した（第10図）。直径0.4ｍ内外の円形の掘方を有し，深さ0.4～0.8ｍである。調査範囲が狭いため建物の性格などは明確にし得ないが，柱穴を覆う土層中に中世の瓦器片と瓦片とを含むので，この柱穴群も中世のものと考えられる。小規模な僧堂となる可能性もあろう。

第3章　出　土　遺　物

1　遺物の概要

今回の調査で出土した遺物の大部分は埴輪片であるが，若干の瓦片，瓦器片，石器剝片がある。以下，埴輪の記述にあたっては，薮内氏採集品と1981年の大阪大学の調査資料のうち，考察にとって重要なものを援用することとし，薮内氏保管の銅鏃は，本墳の年代論などの考察にとって重要と考えられるので，ここで紹介しておきたい。

2　円筒埴輪（第11図～第13図，図版７～９）

墳丘の各調査区から出土した埴輪片は，約 200点となるが，小破片の比重が高い。そのほとんどは普通円筒埴輪であり，朝顔形円筒埴輪と考え得るものも存在する。本古墳出土埴輪の形態や製作技法の特徴を示すものを選別して第11図～第13図に掲げた。完全に復原できる個体がないため，以下の記述においては個体ごとに記述せず，各部位の特徴を示しつつ総括的に述べることとする。

直径と段数　比較的大きく接合できたもの（第11図　Ｈ１～Ｈ３，Ｈ９）はあるが，底部から口縁部までを完全に復原できたものはない。

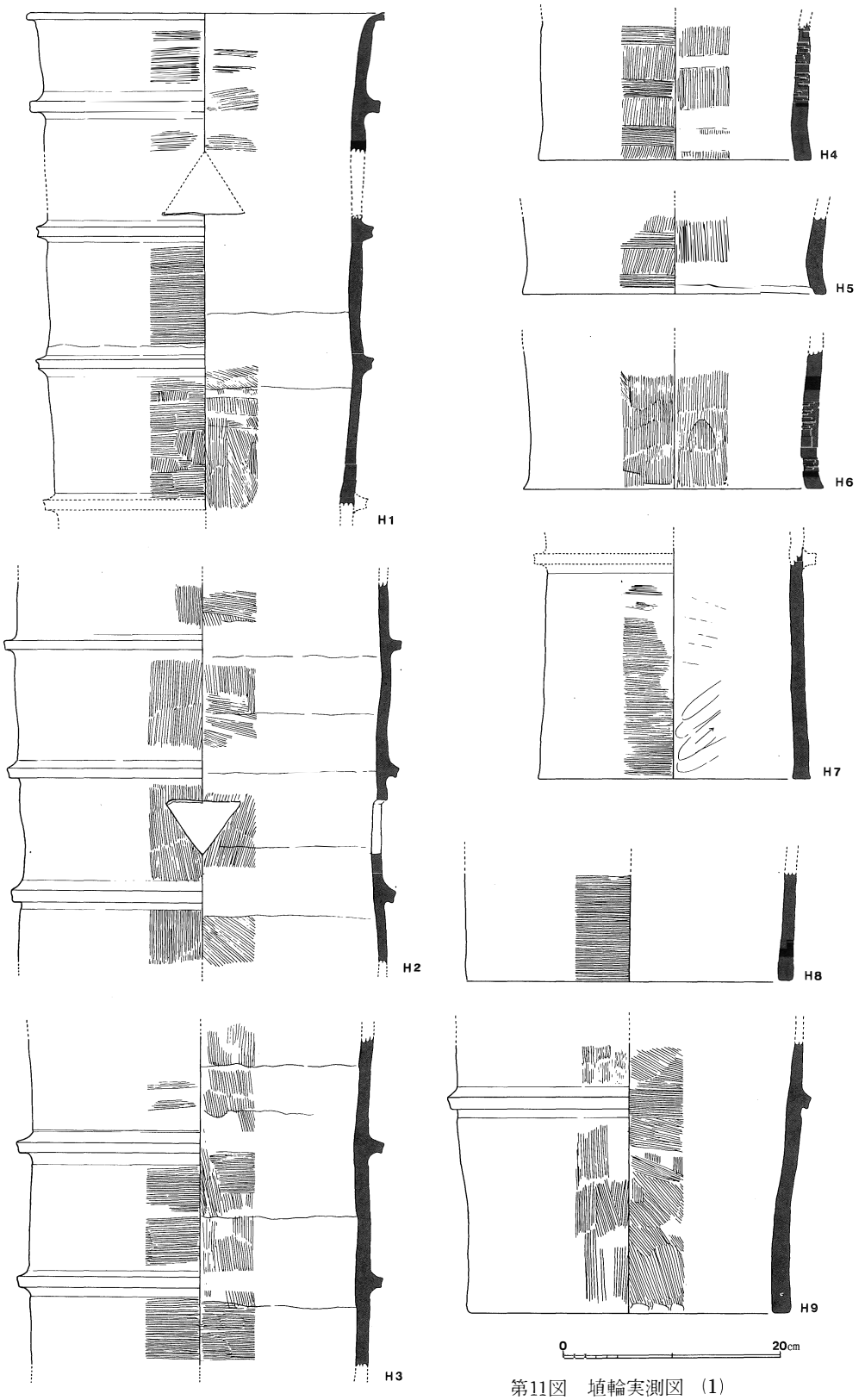
底部は６個体分ある。底部径は26.0～30.0cmの間に分布し，口縁部径は33.0～40.0cmの間にある。また中間部の直径は両者の中間的数値を示すから，上部にゆくにつれて直径を増して外開き気味となる円筒形と考え得る。

底部から第１段突帯までの間隔は18.5～19.0cmである。またこの上の突帯間の距離は10.5cm（Ｈ２）～12.0cm（H15）の間に分布するのに対して，口縁端部と，その直下の突帯との間隔は7.0～8.0cmの間にあって，特に小さく，前期古墳における普通円筒埴輪の一般的傾向と共通点を有している。

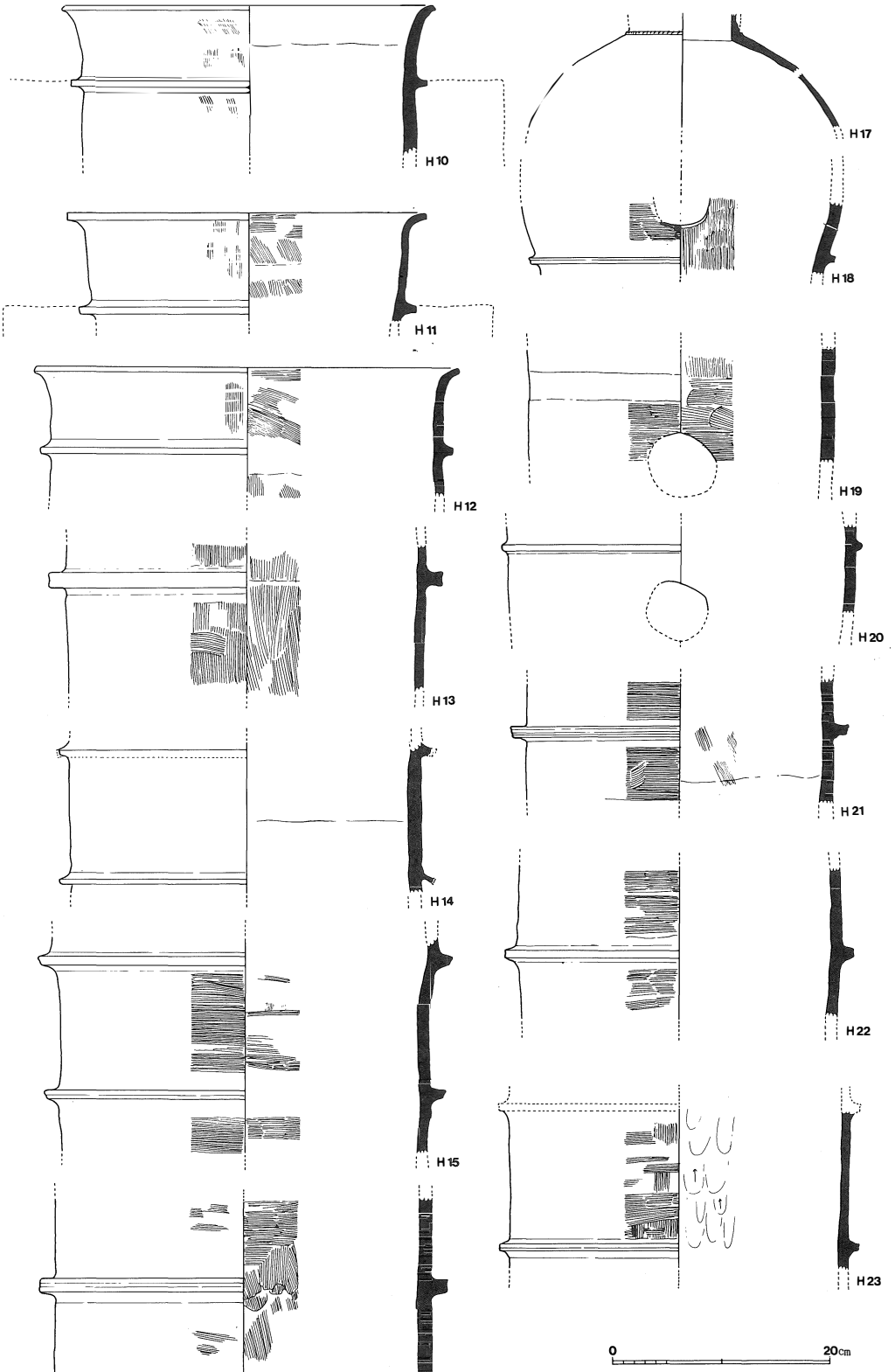
突帯で挟まれた段数は，Ｈ１，Ｈ２の例にみるように，最低４段を有することは判明するが，正確な段数を確定できるまで接合できた資料はないので，以下に，復原案を考察する。

透　孔　段数を考察する上で，透孔の配置の約束を把握することは一つの手がかりとなろう。透孔の形態は三角形（Ｈ１，Ｈ２），円形（H18～H20）とがあり，１片であるが，三角形か長方形か決定しがたい小片がある。

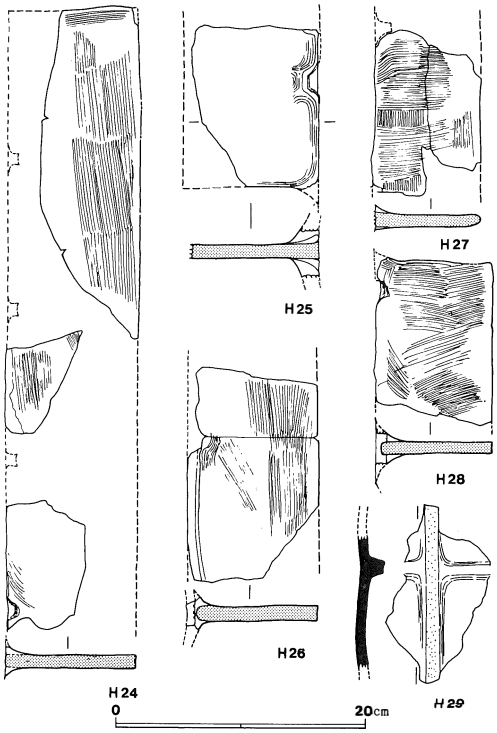
さて，透孔の配置を検討すると，Ｈ１においては，口縁直下の突帯の下の段に正立の三角形を配するが，その下の段の真下の位置になく，さらに，２段下の直下においても，さらにまた直下から４分の１円周分ずらせた位置にもない。この個体の破片の遺存程度では，円周の３分



第11図　埴輪実測図（1）



第12図　埴輪実測図（2）



第13図　埴輪実測図（3）

の1ずらせた位置に透孔が存在するか否かは確認できない。したがって，この個体においては，透孔が2段下の段にあるとすれば，3分の1円周ごとに3個配することになり（A案)、4分の1円周ごとに配するとすれば，この段には透孔は存在しないことになる（B案)。

また，H2においては，図の下から2段目の段に逆三角形を配するがその一つ上の段と二つ目の段には，直上の位置では透孔はない。この個体はヒレ付円筒埴輪である。先述の透孔の位置から4分1円周分ずらせた位置にヒレの剝落痕が存在するから，ヒレが左右対称の位置にあるとすれば，二つ上の段においても，4分の1円周分ずらせたヒレの位置に透孔はあり得ない。したがって，別の可能性として，3分の1円周分ずらした位置に透孔を配するとも考え得るがヒレを付した個所を境にして，裏側に2個の透孔を配列することになって無理が生じる。したがって，この個体では透孔のある段の上に，透孔のない段を2つ設ける約束があると考えてよいであろう(第14図)。

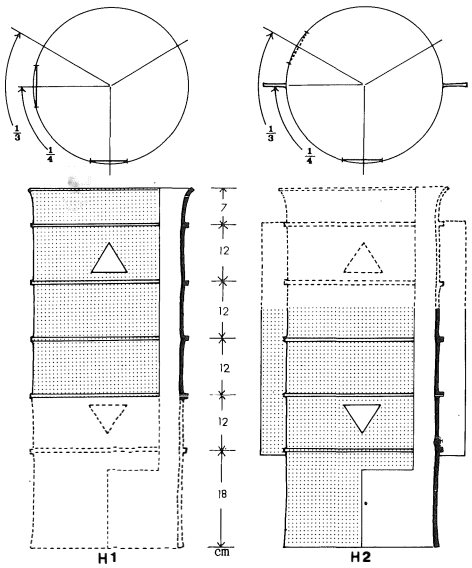
H2の個体における上記の約束を考慮に入れると，先に，H1において考えた，A案，つまり，3分の1円周分に3個の透孔を配する案を消去して，B案をとることになり，H1においても，透孔のない段を2段連ねる復原案を考えてもよいのである。

以上のように考えれば，外面を縦に分割する一直線上に透孔を少くとも2個配そうとすれば第14図に示すように，H1にあっては，さらに下に1段の中間段を設け，H2にあっては，上に2段を設けなければならない。このことから底部第1段を含めて最低5段を有することになり，復原総高は最低約70cmとなる。

ヒ　レ　ヒレ部の図はH24～H29に示す。ヒレの幅は8～10cm，厚さ1.0～1.2cmの細長い短冊状の板を円筒部の側面に貼りつけている。H10におけるヒレの剝離痕跡から，ヒレは，口縁部直下の突帯の位置から下に貼りつけていることがわかるが，H28のヒレにおいては，突帯より2cmほど上から接合している。また，H25のヒレ下端部と思われる破片の突帯の剝離位置から，最下段突帯の7cm下までヒレが伸びていると考えられるが，それが一般的な約束ならば，H9の底部は，底部直上第1段までの残存状態がよいにもかかわらず，ヒレが認められないか

ら，この個体は，Ｈ１とともに，ヒレを有しない円筒埴輪とも考え得るのである。

さて，ヒレの接合にあたっては，H10やH26の個体のように，貼りつけ位置に３条の沈線を刻み，粘土の接着をよくするように意図したものもあるが，Ｈ２の個体では，接着部を指で軽く押さえて凹部をつくるだけである。



第14図　円筒埴輪の復原概念図
Ｈ２はヒレを有する円筒埴輪であるが，Ｈ１には，ヒレがつかないと考えられる。アミ点の部分は，埴輪の遺存部を示す。

朝顔形円筒埴輪　H17，H18は朝顔形円筒埴輪の一部になる可能性がある。H17は直径30cmの球形胴部の直上に，直径10cmの垂直に立ち上る頚部を付するもので，頚部下端に刻み目突帯を施す。またH18は小片であるため明確ではなく，円筒胴部の可能性もあるが，図のようなカーブを有するため，朝顔形円筒埴輪の胴部下半となる可能性をも考えている。

以上の解釈は朝顔形円筒埴輪としての復原案であるが，これまでの資料中には朝顔形円筒埴輪の口縁部と断定できる破片がないので，H17，H18の評価は確定的でないことを付記しておきたい。

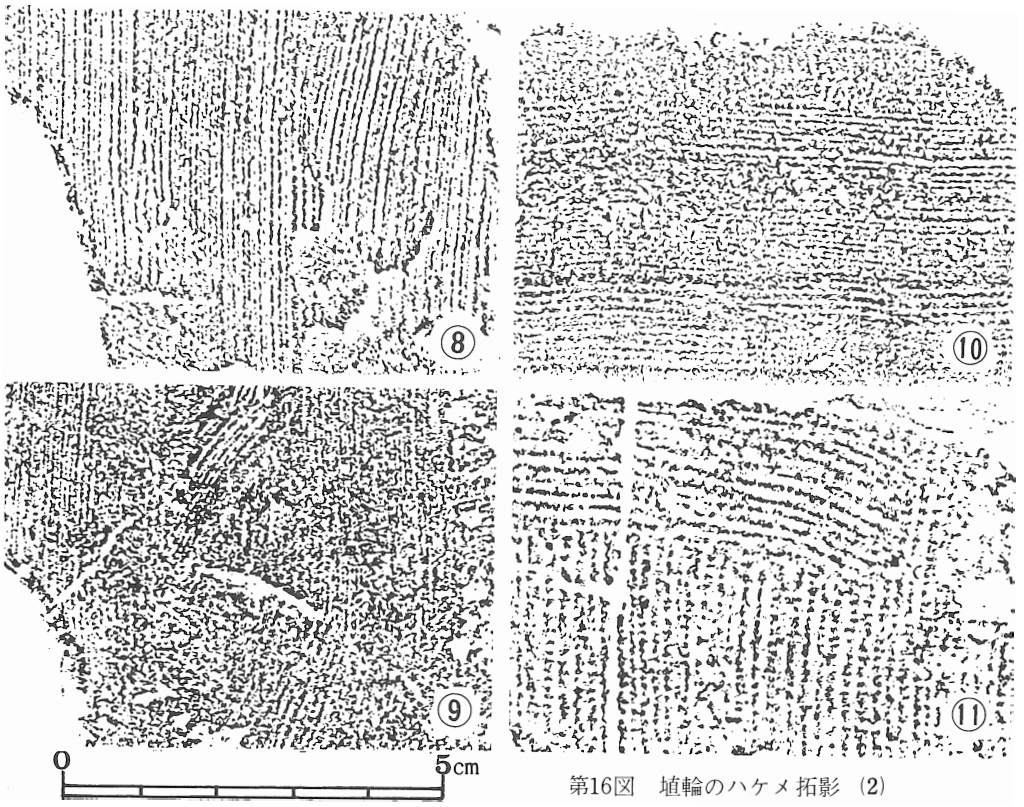
製作技法　成形にあたっては，Ｈ９におけるように幅12cmぐらいの粘土板を巻いて円筒部の基部をつくり，その上に，Ｈ２，Ｈ３に示すような幅５～８cmの粘土帯を重ねて積み上げている。成形にあたって木製の板の台の上で操作が行われたことは，Ｈ９の底部下端に，板の粗い木目が圧痕として陰刻されていることからわかる。

突帯の突出度は1.0～1.5cmで指ナデを施した際の稜線のシャープさをよくとどめるものが多い。H14の個体は薄い突帯を下がり気味に貼りつけており，類例の少ない特異なものである。

突帯の剝落した円筒胴部において，H19におけるような刺突孔を有するものがある。この刺突孔は先端の横断面形が一辺５mmの方形の原体で押圧されており，円筒部の円周上を４～５cmの間隔で施されている。これは突帯の接着をよくするための工夫と考えられる（図版８－１）。

胴部内外面の調整は，まず，タテあるいはナナメ上りのハケメを施し，この後に外面においてはヨコ方向の第２次的なハケメを施すのが普通である。内面においてはハケメ上にユビナデを施してハケメを消している場合もある。Ｈ２～４に明瞭に認められるように，突帯のつく部分の内面では横位のユビナデが，それ以前のハケメを消している。これは，突帯の貼りつけが

第15図　埴輪のハケメ拓影（1）



第16図　埴輪のハケメ拓影（2）

内面のハケメ調整のあとに施されたことを示す。さらにまた，Ｈ７，H22，H23のように，横位，縦位，斜位のユビナデを意識的に施してハケメを消してしまう個体もある。

外面の二次調整の横位のハケメが，これに先行する縦位のハケメを殆ど消してしまうもの（Ｈ３，H21)，半分程度残すもの（Ｈ４，Ｈ５，H23)，とともに横位のハケメの観察できないもの（Ｈ２）などがある。また底部第１段に横位のハケメを施す程度はＨ６・Ｈ９⟶Ｈ４・Ｈ５⟶Ｈ７・Ｈ８の順に多くなる。

以上のように，外面調整においても，その手法に若干の相異が認められることは，製作者の人数などを推定し得る手がかりとなり得るが，さらにそれを物語るものは，内外面の調整に使用されたハケメ原体のバラエティである。

出土した破片の内外面のハケメを比較したところ，これまでに５種類の原体が摘出できており，うち３種類の原体が復数の個体に使用されている。また，同一個体の埴輪においては内外面ともに同一原体を用いて調整する点は一般的に認められることである。５種類のハケメ原体と,それが使用された個体(破片)の記号を以下に列挙することとする。ハケメの拓影は第15図と第16図とに示すが，以下の条線密度は平均値で示す。

ハケメＡ原体（条線密度８本／cm）；Ｈ１，Ｈ４，Ｈ７，H23，ヒレ(H27)〔第15図１～３〕

ハケメＢ原体（条線密度６本／cm）；Ｈ２，Ｈ５，Ｈ６，Ｈ９，ヒレ(H24)〔第15図４～７〕

ハケメC原体（条線密度13本／cm）；H３，H16，H19，ヒレ(H26)〔第16図８～９〕

ハケメD原体（条線密度11本／cm）；H21，〔第16図10〕

ハケメE原体（条線密度５本／cm）；H13 〔第16図11〕

なお，胎土は，大部分が明褐色の基質にアズキ色のクサリ礫の微細片を含んだ，乙訓地方特有のものであるが，暗茶褐色基質に角閃石様の粒子を含む破片が数片あり，後者については今後の検討を必要とする。

編年論的評価　以上に述べた観察結果のうち，ヒレ付円筒埴輪を有する点，外面の第二次調整のハケメが横位をとること，円形の透孔を有する個体のある点などは，前期古墳の埴輪の中でも新しい様相を示している。また横位のハケメが弥生土器の廉状文のごとく，規則的に短く断続するような，中期古墳の埴輪に多く認められるような技法を示さないことから，中期までは下らない。このことから，この技法は筆者のいうC様式埴輪の範疇[1]で把握してよいものであり，前期古墳の円筒埴輪の中では第３番目の新しい相に位置づけ得るものと言えよう。

３　銅　　鏃（第17図，図版９－１）

今回の調査による出土品ではないが，薮内治作氏が，１点の銅鏃を保管されている。これは氏の談によれば，過去の調査の直後に後方部石室の付近の発掘の排土中から採集したという。過去の調査においては，梅原氏らが現地に赴く以前に銅鏡などが石室内からとり出されていたというから，この際に石室から不用意に土とともにとり出されたものとも考えられる。

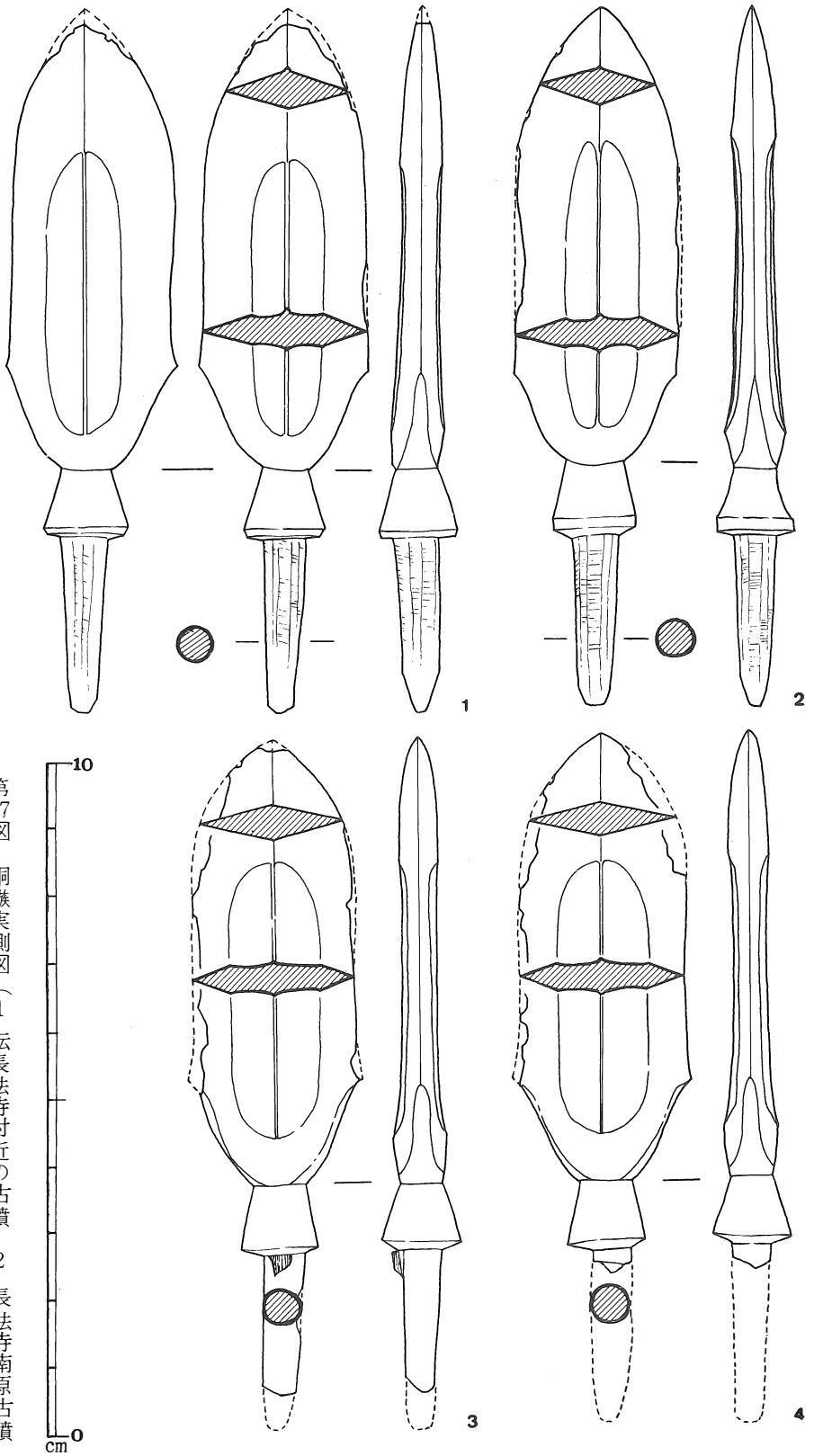
銅鏃は第17図－２に示すように，全長10.2cm，刃の形は柳葉形で刃部長6.7cm，刃幅2.4cm，厚み0.5cm，中央に細い隆起線をつくり出し，その両側に凹部をつくる。さらに基部には円錐台形の篦を有し，これに長さ2.5cmの茎がつく。

さて，これと同形同大のものが，３例あり，京都大学文学部保管の，長法寺付近の古墳発見とするもの（第17図－１），と大阪府松岳山古墳出土品（同図３・４）とである。このうち後者の二つの遺跡例の相互の関係については，小林行雄氏が「両者は細部まで一致し，おなじ鋳型による製品かと思われる」と述べている。[2]

本例は，保存が良好なために，長法寺例や，松岳山例よりも凹部隆起線がシャープであるし，また刃部先の横断面形は，単純な菱形ではなく，中央線がわずかに突出するなどの特徴がよく保存されている。

しかし，以上の４例を注意深く比較すると，中央の凹部の匙面取りが，中央隆起線を境にして，厳密に対称とはならない点まで酷似するから，本例もまた同一の鋳型で製作されたものと考えてよい。ちなみに本例の重量は50ｇあり，保存状態のよく似た長法寺例と一致する。

ただし，鋳造後の研磨による微妙な違いも認められる。茎部分を30倍の実体顕微鏡で観察すると本例は茎の主軸に直交する方向で，９面に分けて削るが，長法寺例は，わずかに斜めの方



第17図　銅鏃実測図（1　伝長法寺付近の古墳　2　長法寺南原古墳　3・4　大阪府松岳山古墳　3・4は本章注2文献による）

向で削り面数は12面とわずかに多い。また篦の円錐台形の下端部は本例は垂直に近いが，長法寺例は下細りに削る。松岳山例は保存が良好でないため，鋳造後の研磨の微妙な差異は議論できない。

さて，以上に長法寺例と記述してきた京都大学保管資料は，長法寺付近の古墳採集品というものを山村金三郎氏が京都大学に寄贈したものである。山村氏の教示によれば，これは本古墳の前方部の土地所有者である佐藤宰四郎氏から譲り受けたという。薮内氏保管品の採集時の経緯と比較すると，本古墳の出土品である可能性は極めて大きい。

本例と同型式の銅鏃は，いまのところ以上の４例のみであるが，一般に大形の柳葉型銅鏃は，古墳時代前期でも新しい段階で出現することを考えれば，この資料もまた本古墳の年代を通説よりは下げて理解する根拠となろう。

４　その他の遺物

本古墳と直接に関係しない遺物として，墳丘築成以前の石器剝片１と，古墳以後の中世の瓦および瓦器の破片が若干ある。石器剝片は，西側クビレ部裾の二次堆積土中にあったもので，盛土中に含まれていたものと考えられる。風化によるパティナが認められることから先縄文時代の剝片の可能性があり，この時期の遺物が，この丘陵頂部に存在したことを示している。

中世の瓦は丸瓦片１，平瓦片１で布目圧痕を有するが，小片のため年代を決めがたい。瓦器は碗形態で，高台の断面が三角形を呈する点，年代的に若干新しく，鎌倉期のものとすべきであろうか。

注１）都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」（小野山節編『王陵の比較研究』）1981年
　２）小林行雄『松岳山古墳の調査』（『大阪府文化財調査報告書』第５集）1957年　Ｐ.39

第４章　長法寺南原古墳と今里大塚古墳の石材調査

１　古墳とその周辺の地形と地質

長法寺南原古墳と今里大塚古墳は，京都盆地の南西部の丘陵と段丘上に位置する。長法寺南原古墳は，標高 145ｍ前後の丘陵の頂部にあり，東方の見通しが良い。古墳直下には，大阪層群と呼ばれる新生代第４紀更新統の未固結の砂層が分布していることが，古墳直下の露頭で観察される。その年代は，約 100万年前である。古墳から東の長法寺の集落までは，断層によりとう曲した砂・礫・粘土層から成る大阪層群が分布する。更に古墳の５ｍ下方と西方には，およそ１億年ないしはそれ以上古い丹波層群と呼ばれる古・中生層が分布する。

今里大塚古墳は，長法寺南原古墳の約１㎞東にあり，標高30ｍ前後の段丘上にある。この段丘は，未固結の砂礫層からなる低～中位段丘に相当し，その年代は数万年前と推定される。

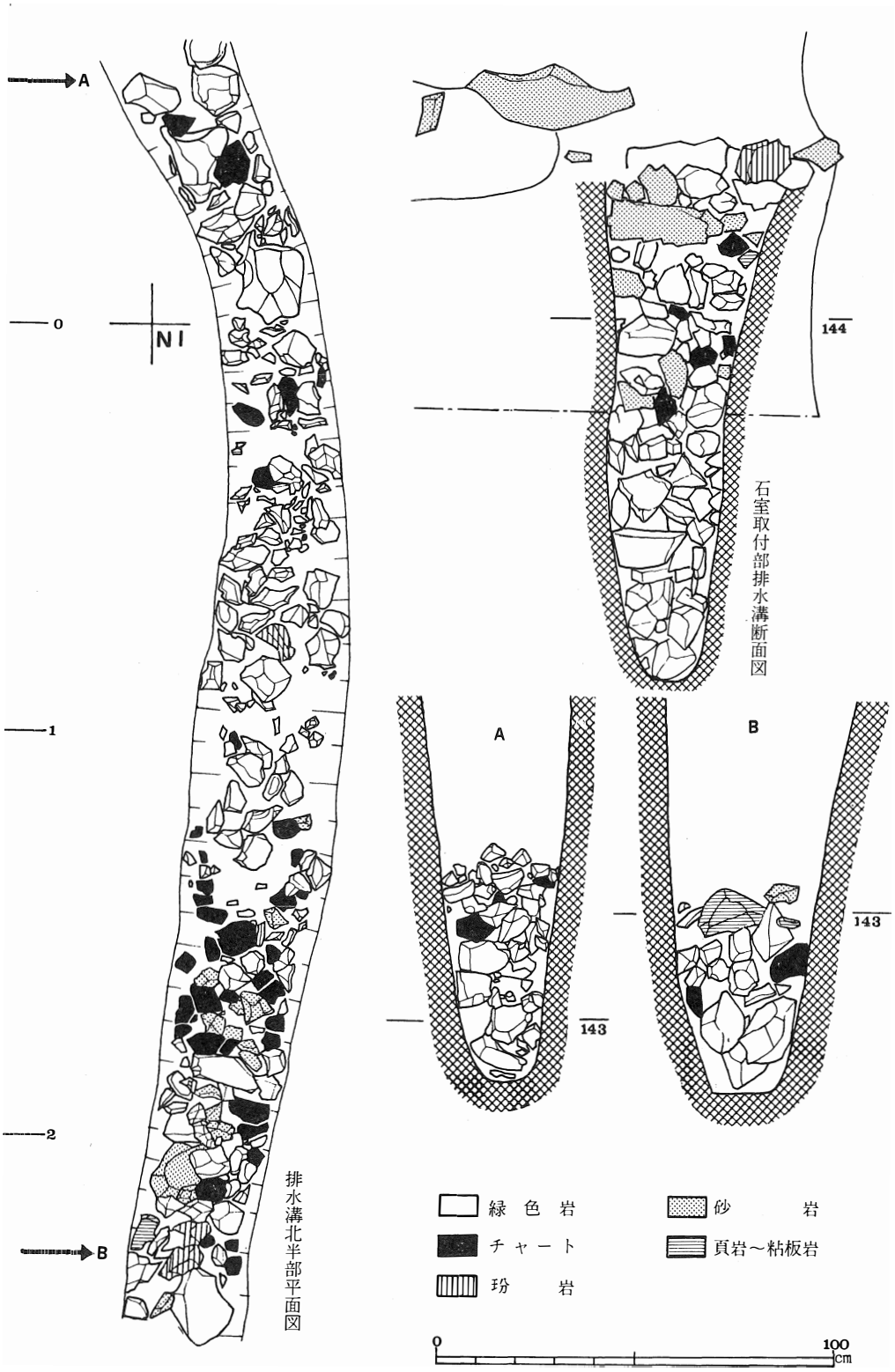
２　長法寺南原古墳の石材

石室の石材　竪穴式石室の天井石に使用された石材は11個で，岩石名としては，やや熱変成を受けた石灰岩，砂岩，チャート，頁岩～粘板岩である。その円磨度は 0.2～0.6にわたり，角ばったものから比較的丸いものまである。その大きさは，天井石の平面図に示されており（第８図），その重量は，30～600kg程度である。

壁体石としては，砂岩・緑色岩類が多く，玢岩・チャート・半花崗岩・脈石英がみられる。砂岩は，500ｇ～13kgの重量の範囲内にあり,円磨度は，0.1～0.2の角ばったものがほとんどで，ごくまれに0.6の比較的丸いものがみられる。緑色岩類は，300ｇ～16kgの範囲内にあり，円磨度は，0.1～0.5の範囲にある。なお，緑色岩の円磨度の0.3～0.5のものは，よく観察すると玉ねぎ状風化であることが明らかである。

排水溝の石材　排水溝の石材は，第18図に示すように緑色岩類が最も多く，次いでチャート・砂岩であり，まれに頁岩～粘板岩・玢岩がみられる。これらの石材は，50ｇ～２kg程度の握りこぶしぐらいのものが多く使用されている。円磨度は，緑色岩類の場合は壁体石と同じであり，チャートにおいては0.5～0.7と丸いものがほとんどであり，砂岩は0.1～0.3と角ばっている。また，チャートは，表面が漂白化したものが比較的に多い。

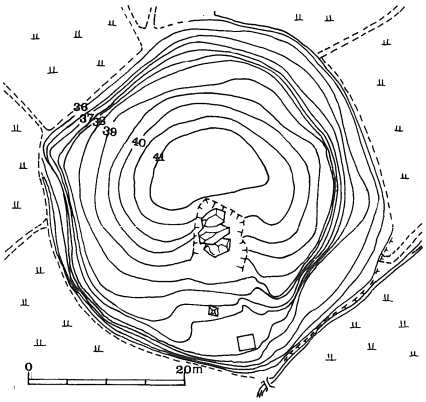
古墳の石室に使用した石材の産地　排水溝の石材のチャートのほとんどは，円礫でしかも漂白化が見られることから，古墳から東の数百ｍ以内の大阪層群の Ma ６の上位の約50万年前の砂礫層中から採取したと考えられる。大阪層群中の砂岩は，風化度が強くて手で握るとつぶれるくらいのものがこの付近では多いのでほとんど使用されていない。緑色岩類は，古墳直下



第18図　排水溝の石材分布図

とすぐ北側および西側の 200m 程度の所に分布する丹波層群の緑色岩類の岩石の組織が非常によく似ており，急斜面に崩落した岩石を採取したと考えられる。砂岩・頁岩～粘板岩も，緑色岩類の採取地付近と考えられる。

天井石については，石灰岩は，平べったくて大きく，しかも円磨が比較的に良い。本古墳の 500m 南の小泉川の支谷の大原古墳群の付近に石灰岩が多く堆積しており，この付近から採取したものと考えられる。砂岩・チャート・頁岩～粘板岩も第20図のＡ地域にしめす所に同じ性質のものがみられるので，この付近から採取されたと考えられる。

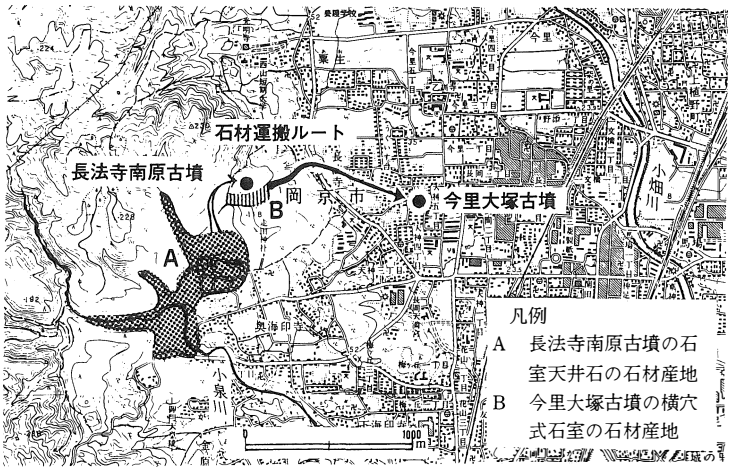


第19図　今里大塚古墳（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』1968年による）

3　今里大塚古墳の石材

今里大塚古墳（第19図）の横穴式石室の石材は，今までチャートと考えられていたが，今回の調査で，天井石と石室内の石材は，全て緑色岩類であることが明らかになった。しかも，いわゆる集塊岩状をなしており，この産状を示す緑色岩類は，今回の調査で，第20図のＢ地域のみにしか産出せず，しかもその分布地の急斜面上には，全く同じものが崩落して巨石をなして存在することが発見される。巨石をここから採取して，修羅等で運搬したものと考えられる。

（橋本清一）



第20図　長法寺南原古墳と今里大塚古墳の石室使用石材の産地と運搬ルート

第5章　総　　括

墳丘の形状，石室，排水溝などの遺構，そしてまた，埴輪や銅鏃などの遺物については以上の各章において，総括的な叙述をおこなっているので，あらためて繰り返さないが，本古墳が葺石を持たない前方後方墳で，その規模も全長60mと判明したこと，石室の墓壙の型式が乙訓地方の他の前期古墳と類似する可能性のあること，出土の埴輪や銅鏃が，前期古墳の中でも，新しい段階の特徴を示す点などが解明され，この古墳の年代や性格をめぐる通説的な理解に変更を迫る知見を得た。

このことが，乙訓地域や山城地域の古墳時代前期の首長系譜の分析作業に影響する点は大きいが，[1] さらに本古墳の東側に別に2基の古墳の存在することが今回の調査中に判明した。

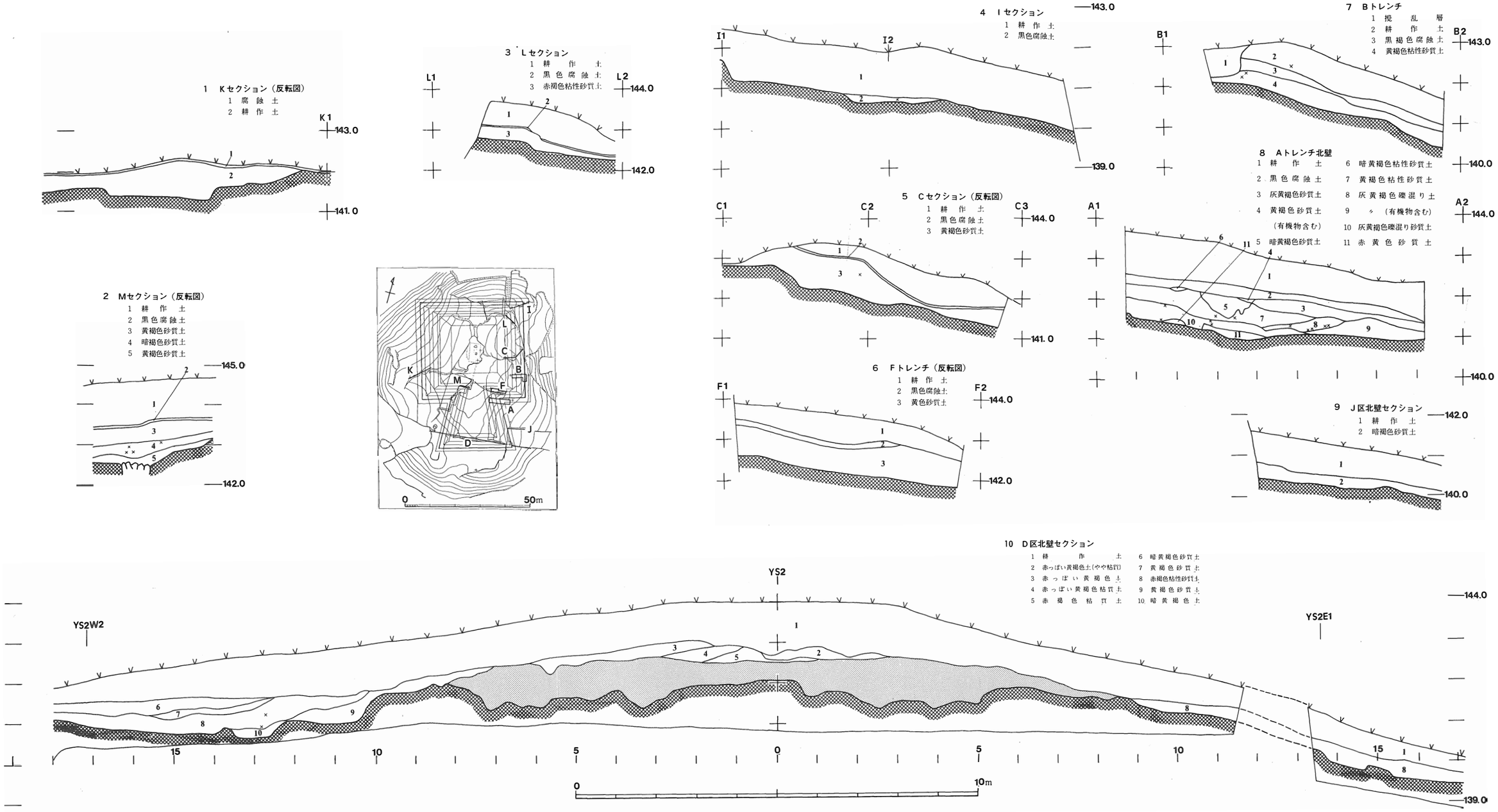
本古墳の東に接する土地の所有者である藤下清一郎氏の教示によれば，第2次大戦前，本墳の立地する丘陵の東斜面を開墾中に「壺の中に勾玉が多数入った」ものを発見し，これに伴って「直径10cmぐらいの銅鏡」があったという。石室の存在を示すような話はないので，粘土槨か木棺直葬かと考えられる。勾玉が灰色をしていたという氏の記憶を尊重すれば，滑石製勾玉の可能性もあり，壺なるものは埴製合子かとも想像されるが，これらの遺物は，届出た警察署でその後散逸したという。

さらに，この地点の東 100mに埴輪を出土する場所があるという。氏の御案内を得て，その地点を調べたところ，円筒埴輪の小片を確認した。小破片のため年代的に確定的なことは言えないが，突帯の特徴などから前期末～中期初期のものと考え得る。この地点も竹の子の栽培によって地形の変形は著しいので，発掘によるのでなければ墳形などは決めがたいが，重要な発見である。以上の2古墳の立地点は第2図2・3に示す。

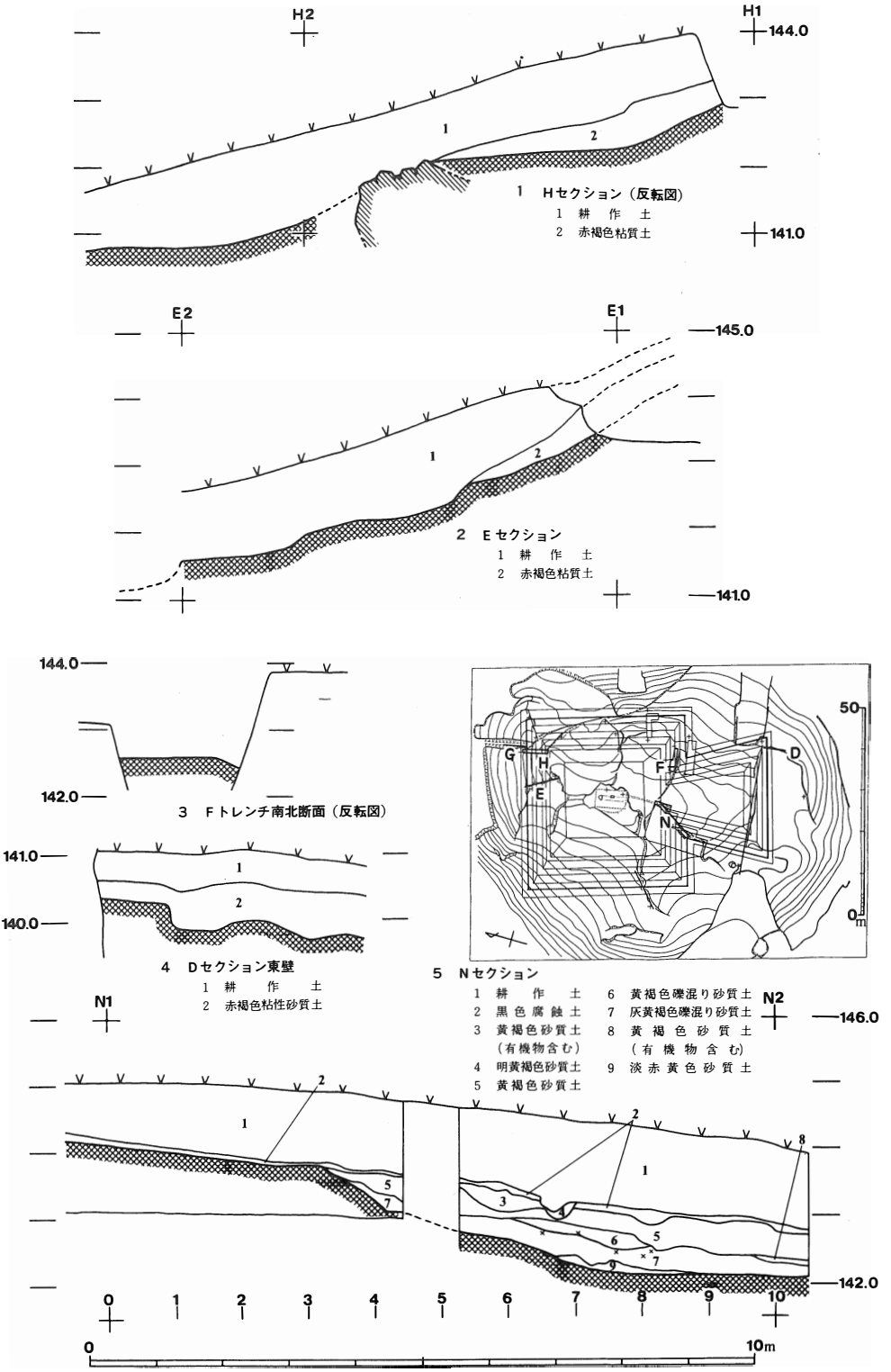
以上の新しい知見は，学術調査によるものではないが，本古墳の被葬者の後裔が，この丘陵の東側斜面に古墳を継起的に造営した可能性を示すものとすれば，この北の地域の粟生のカラネガ岳2号墳あるいは平野部に立地する今里車塚古墳などとの関係があらためて問題となろう。本墳の東側斜面の遺跡調査の必要性をここで喚起しておきたい。

また，南原古墳に関する今回の調査は，墳形の確認を目的としてトレンチや崖面の断面の観察を中心とした小規模のものであるため，いまなお確定的でない点がある。墳丘裾が面的に把握し得ると考えられる東側クビレ部の平面的調査と埴輪列の追求，石室構造の解明と保存整備など，残された課題は多いが，現段階の調査成果の報告については，ここで，ひとまず筆をおくこととしたい。

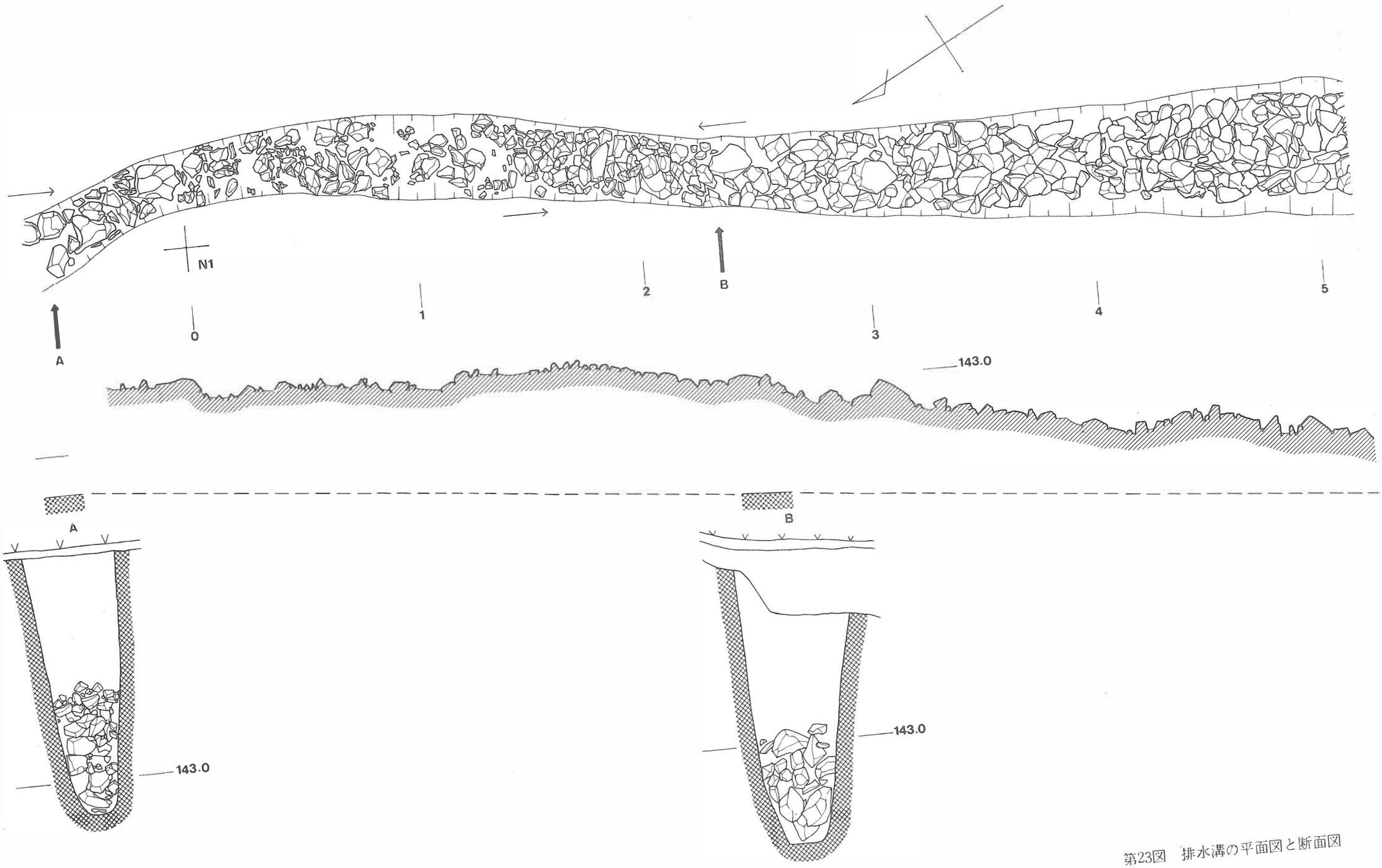
注1）都出比呂志「古墳時代」『向日市史』上巻・1983年，PP.152～158.



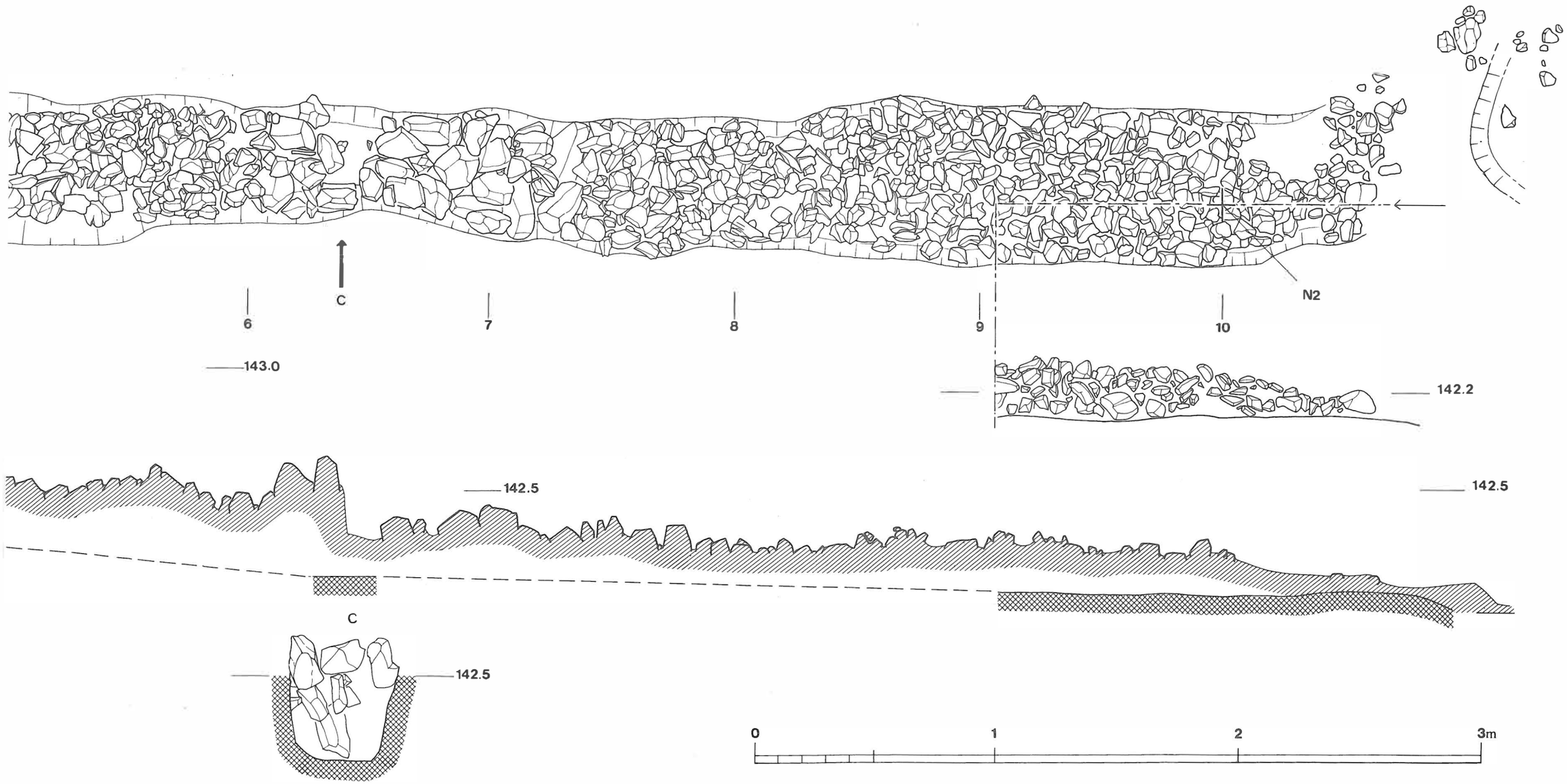
第21図　墳丘断面図（1）東西方向断面を南から見た図　（×印は埴輪片出土位置）



第22図　墳丘断面図（2）南北方向断面を西から見た図（×印は埴輪片）



第23図　排水溝の平面図と断面図


C
6
7
8
9
10
N2
143.0
142.2
142.5
142.5
C
142.5
0
1
2
3m

第２部　長岡京跡調査概要

第１章　長岡京跡右京第94次（７ＡＮＱＵＤ地区）調査概要

１　は　じ　め　に

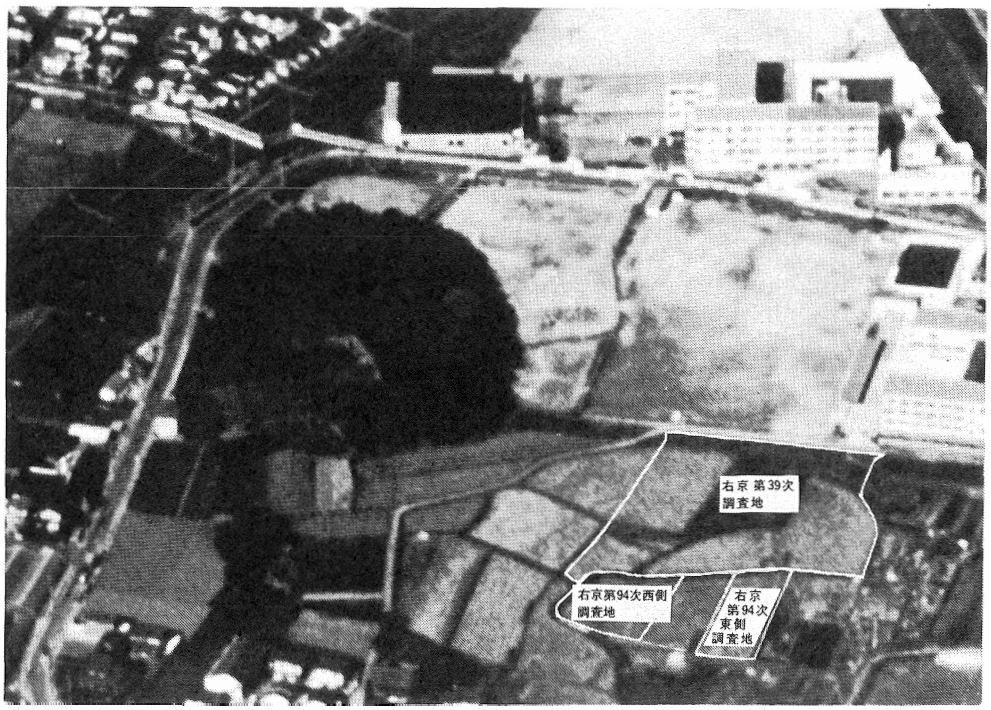
1　本書は、1982年４月17日から５月29日まで、長岡京市久貝二丁目211 他において実施した発掘調査に関するものである。

2　当調査は、宅地開発に伴うものである。調査費用は原因者負担によったが、長岡京期の建物跡や柵列及び、木簡等の発見があり、また現在までに行われた長岡京発掘調査のうち、遺構、遺物の確認された最南端にあたる貴重な調査となったため、一部は国庫補助金をあてて調査したものである。

3　遺物整理・実測は、小塩礼子、木村美智代が、遺構図面整理、遺構・遺物のトレースは、白川成明、渡口忠、小泉陽、宮崎茂夫が主に担当した。編集は岩崎誠が行った。

4　本報告は、岩崎誠が執筆した。

5　現地調査は、長岡京市教育委員会社会教育課嘱託岩崎誠が担当した。調査に当っては、地元住民の方々はじめ、諸大学学生諸君の協力を得た。(1)



第24図　発掘調査位置図

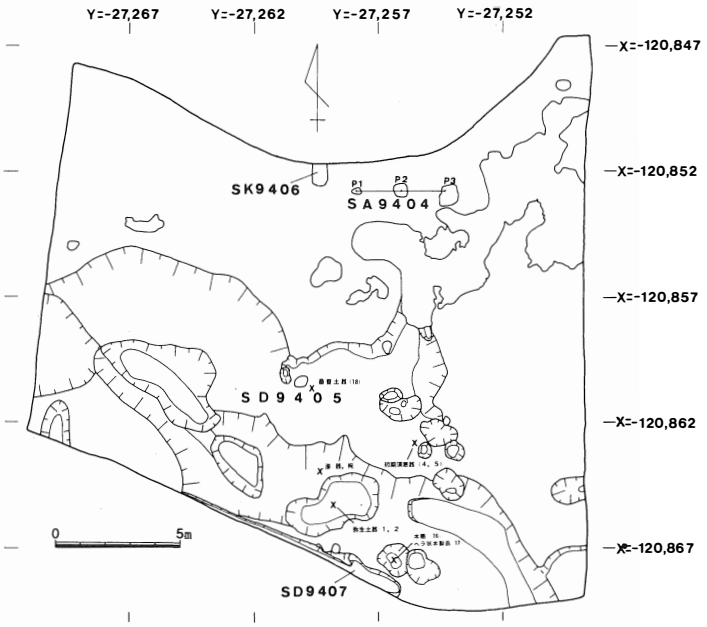
2　調査経過・調査概要（図版10～11）

本調査地は、緩扇状地性低地にあり、右京39次（７ＡＮＱＭＫ地区）調査地の南に隣接している。右京39次調査では、先土器時代ナイフ形石器文化期、弥生時代中期前葉、古墳時代中期後半、平安時代中期の各時期の遺物や遺構が発見された。長岡京についても、西一坊第二小路東側溝と思われる溝が確認されている。[2] 本調査地は，このような成果をあげた上記調査地の南に隣接しており、長岡京はもとより、弥生、平安時代を中心とする南栗ケ塚遺跡の範囲確認をも調査目的とした。

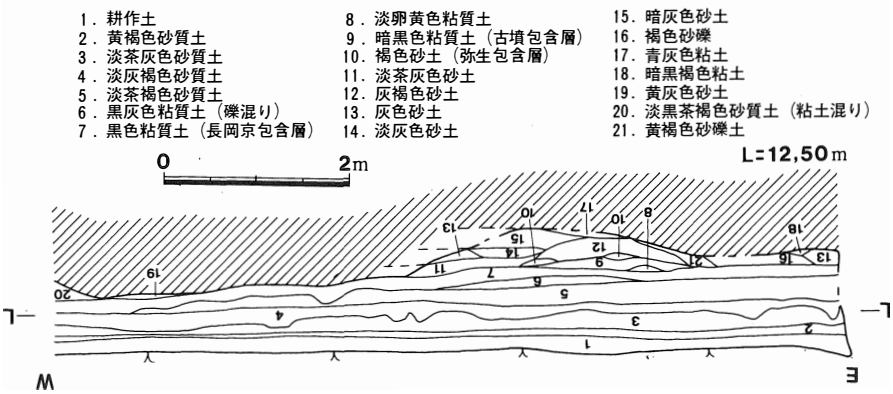
本調査では、開発対象地が東と西に２分されており、それぞれの対象地に各々、調査トレンチを設定した。東側のトレンチを第１トレンチ、西側のトレンチを第２トレンチとして、調査を開始した（第24図）。

第１トレンチでは、耕作土直下で黄褐色砂礫又は黄褐色砂質土の無遺物地山層になる。トレンチは、南方向に低くなっていき、耕作土と地山層の間に中世包含層が現われる。黄褐色砂礫（砂質土）層も南方へ薄くなり、その下層にある青褐色の砂礫層が地山層となる。

検出遺構には、掘立柱建物（ＳＢ9401・02）と柵列（ＳＡ9403）がある



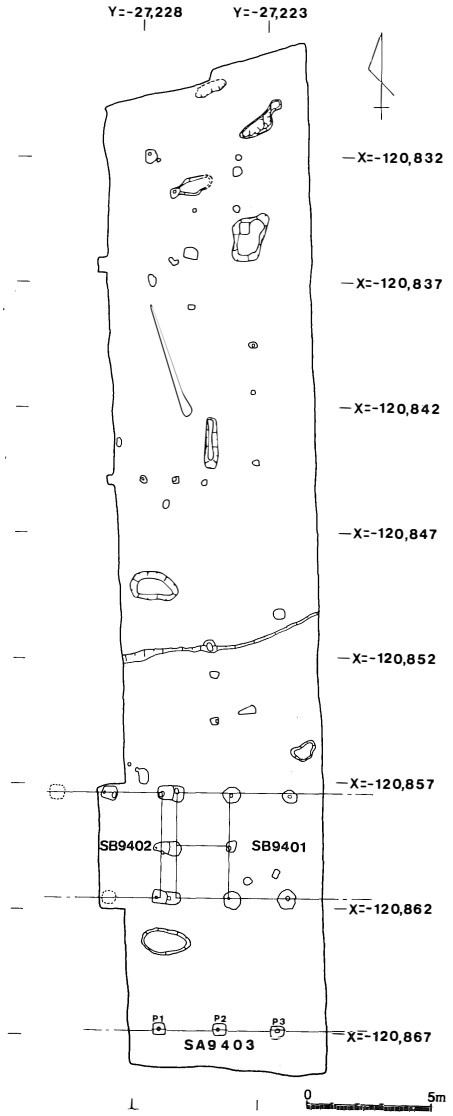
第25図　第２トレンチ遺構配置図



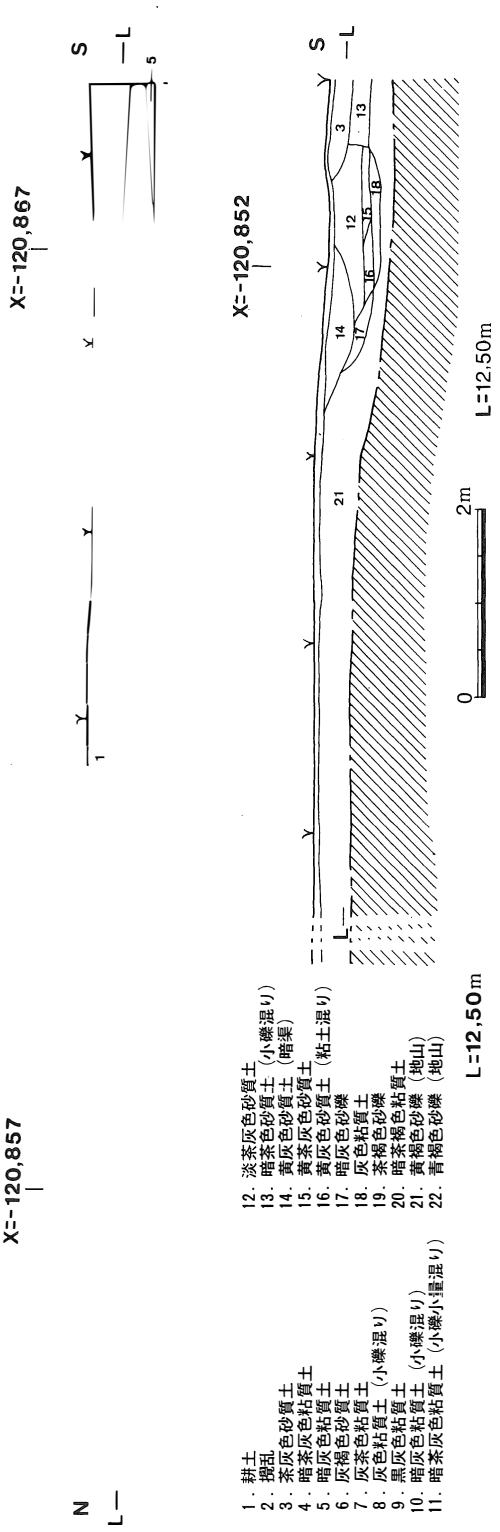
第26図　第２トレンチ南断面図

が、いずれも、地山層（黄褐色砂礫・砂質土、青褐色砂礫土）の上面で検出された（第27・28図）。

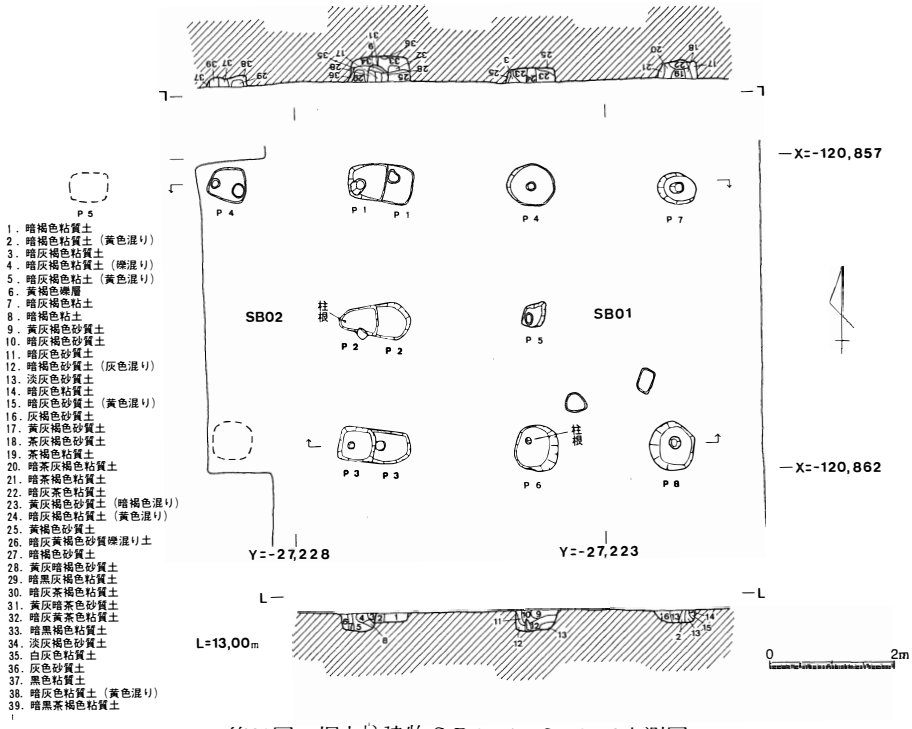
第２トレンチでは、耕土直下に青褐色砂礫土が北部で確認できたが、南部では、河川ＳＤ9408の堆積層が厚く、弥生から鎌倉時代にわたる遺物包含層が確認された（第25・26図）。



第27図　第１トレンチ遺構配置図



第28図　第１トレンチ東断面図

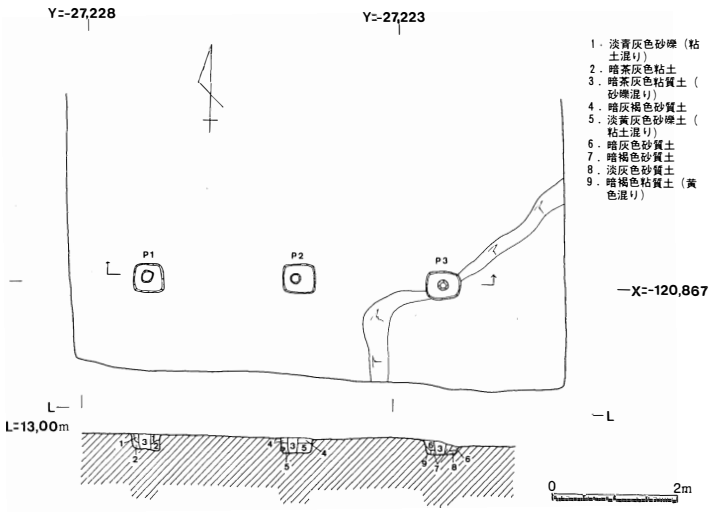


第29図　掘立柱建物ＳＢ9401・SB9402実測図

3　検　出　遺　構

掘立柱建物ＳＢ9401・ＳＢ9402（第29図）

いずれも、第１トレンチから検出された東西方向の建物跡である。これらの検出された位置は、条坊復元の単純割り付けでは、八条第一小路北側溝推定位置にあたる。ＳＢ9401はＳＢ9402より古いが、さほどの時期差はない（図版10—(3)）。



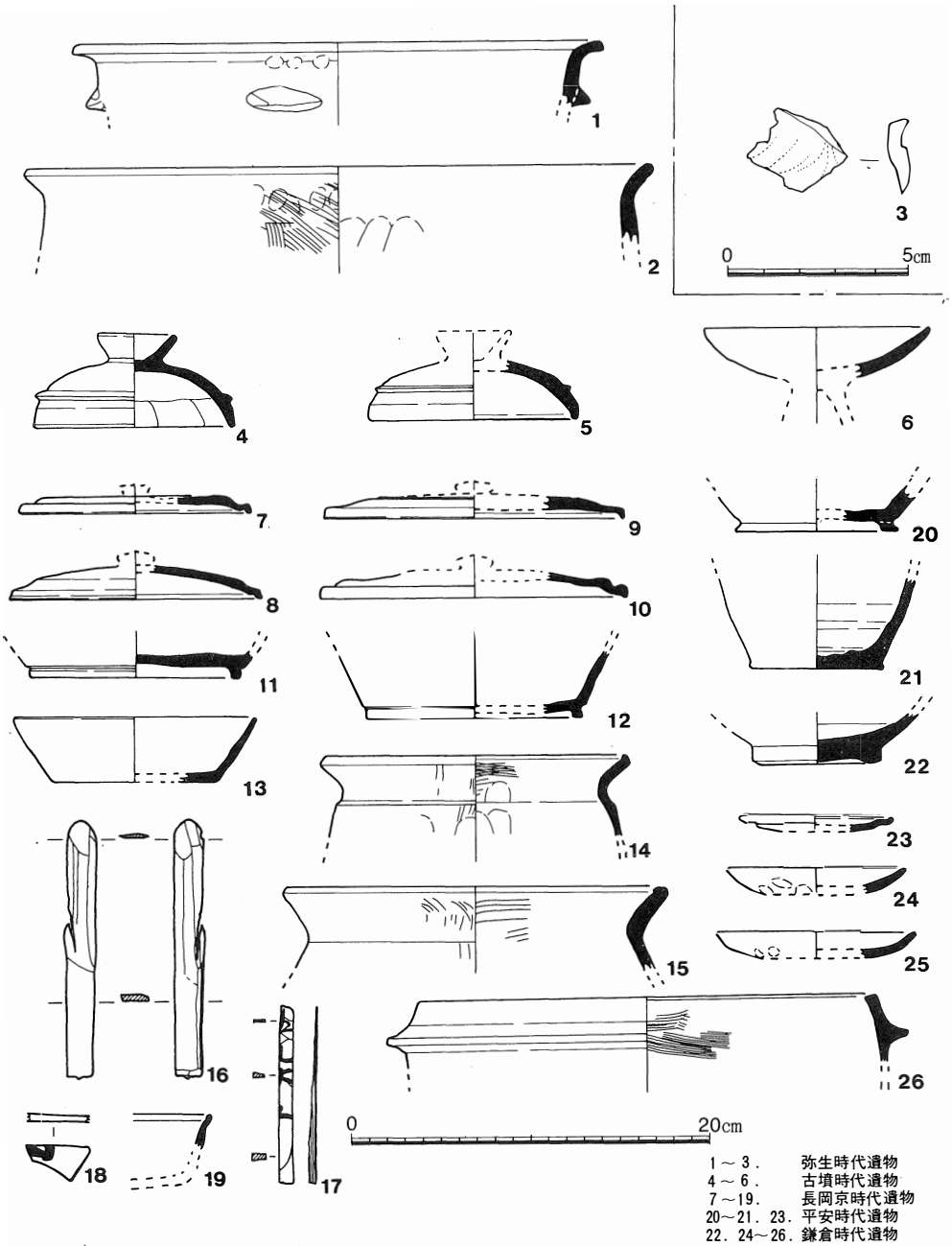
第30図　柵列ＳＡ9403実測図

柵列ＳＡ9403（第30図）

第１トレンチから検出された東西方向の柵列である。条坊復元の単純割り付けでは、八条第一小路路上にあたる。ＳＢ9401・02との配置関係から、ほぼ同時期の計画的施設であろう。

付表２　右京第94次調査検出遺構観察表

遺構名	時代・性格	規模	特徴	出土遺物	備考
第１トレンチ ＳＢ9401	長岡京時代 掘立柱建物	梁行　２間 桁行　３間以上	主として円形掘り方柱穴からなる 梁行１間約 210cm南北 桁行１間約 210cm東西 } Ｎ－1°－Ｅ		Ｐ６を除いて、比較的単純な埋土である。 Ｐ１～３はＳＢ9402のＰ１～３に全て西辺を削り取られている。 Ｐ５は、間取りのための柱穴と思われ、他に比較して小ぶり。 **柱間はＳＢ9402と等しく、方向も同じ。** **東西**棟。
Ｐ１	同上の柱穴	東西　50＋αcm 南北　64cm 深さ　40cm	四隅が丸い方形 柱痕の直径20cm　深さ20cm	土師器甕口縁部片 坏口縁（第31図19）	
Ｐ２	〃	東西　60cm 南北　60cm 深さ　15cm	隅の丸い五角形 柱痕不明	な　し	
Ｐ３	〃	東西　50＋αcm 南北　56cm 深さ　18cm	四隅の丸い方形 柱痕不明	土師器 須恵器 製塩土器 } 小片	
Ｐ４	〃	東西　76cm 南北　64cm 深さ　25cm	円形 柱痕の直径18cm　深さ25cm	土師器小片	
Ｐ５	〃	東西　40cm 南北　25～40cm 深さ　20cm	四隅の丸い不整台形 柱痕の直径12cm　深さ20cm	須恵器壺体部片 土師器椀皿類小片 黒色土器小片	
Ｐ６	〃	東西　70cm 南北　70cm 深さ　30cm	円形 柱根を残す　柱根最大径10cm 柱根残存高20cm	須恵器壺体部片	
Ｐ７	〃	東西　60cm 南北　50cm 深さ　50cm	円形 柱痕不明	土師器甕体部小片	
Ｐ８	〃	東西　74cm 南北　82cm 深さ　25cm	円形 柱痕の直径20cm　深さ20cm	な　し	
第１トレンチ ＳＢ9402	長岡京時代 掘立柱建物	梁行　２間 桁行　３間以上	主として方形掘り方柱穴からなる 梁行１間約 210cm南北 桁行１間約 210cm東西 Ｎ－1°－Ｅ		
Ｐ１	同上の柱穴	東西　60cm 南北　50～60cm 深さ　40cm	四隅が丸い台形状 柱痕の直径20cm　深さ20cm 柱痕は掘り方南西隅による	土師器小片	Ｐ１はＳＢ9401－Ｐ１埋土を削って掘られる Ｐ１Ｐ３Ｐ４に埋土の異なる掘り方を２ケ所づつ確認　建て替えの可能性あり。 柱間は、ＳＢ9401と等しく、方向も同じであることから、さほど時期差はないと考える。 東西棟
Ｐ２	〃	東西　60cm 南北　30cm 深さ　15cm	四隅が丸い長方形 柱根を残す　柱根最大径５cm 柱根残存高10cm	な　し	
Ｐ３	〃	東西　60cm 南北　54cm 深さ　35cm	四隅が丸い方形 柱痕は検出困難	土師器甕体部片	
Ｐ４	〃	東西　50～64cm 南北　40～58cm 深さ　15cm	四隅が丸い不定台形 柱痕と思われる痕跡が２ケ所残る。 柱痕の深さ15cm	な　し	
Ｐ５	〃	東西　約50cm 南北　約50cm	四隅が丸い方形を示す	な　し	擁壁工事に伴う立会調査で確認
第１トレンチ ＳＡ9403	長岡京時代 掘立柱柵列	東西　２間以上	全て方形掘り方 １間　約240cm　Ｎ－1°－Ｅ		Ｐ１の真北約 550cmの位置にＳＢ9402の南東柱穴（Ｐ３）があり、当柵列との計画的配置を暗示している。 １間当りがＳＢ9401、ＳＢ9402の両方より約30cm長い。 建物の可能性もあるがこれより南が第２トレンチより続く河川にあたるため一応柵列とした。東西方向。
Ｐ１	同上の柱穴	東西　50cm 南北　40～50cm 深さ　25～30cm	四隅が丸い方形 柱痕直径20cm　深さ30cm	須恵器坏蓋（第31図９） 土師器小片	
Ｐ２	〃	東西　50cm 南北　50cm 深さ　20～25cm	四隅が丸い方形 柱痕直径20cm　深さ25cm	土師器小片	
Ｐ３	〃	東西　58cm 南北　50cm 深さ　20～25cm	四隅が丸い方形 柱痕直径20cm　深さ25cm	土師器小片 製塩土器小片	
第２トレンチ ＳＡ9404	長岡京時代 掘立柱柵列	東西　２間	主として方形掘り方　真南北 １間180cm		遺物の出土がなく、時期を決めかねるが、方向から、１トレ検出の建物柵列と同時期と考えている。 東西方向。
Ｐ１	同上の柱穴	東西　40cm 南北　32cm 深さ　10cm	隅円形 柱痕不明	な　し	
Ｐ２	〃	東西　50～58cm 南北　60cm 深さ　16cm	四隅の丸い方形 柱痕不明	な　し	
Ｐ３	〃	東西　80cm 南北　80cm 深さ　10～20cm	四隅の丸い方形 柱痕不明	な　し	
第２トレンチ ＳＤ9405	弥生～長岡 河川流路	幅　1700cm以上 検出長2400cm 深さ　40～50cm	弥生・古墳・長岡京各時代の河川の北河岸付近で、なだらかに南方へ深くなる。淀んだ状態での堆積層で、炭化木木葉、小枝や立木の根株もみられる。	弥生土器（第31図12） 古墳時代須恵器（同図4～6）長岡京時代土師器（同図14・15）須恵器（同図８・13）木簡（同図17）等	堆積層を弥生・古墳・長岡京・平安各時代の遺物包含層に分けられるが、堆積年代を示すか否かは不明。
第２トレンチ ＳＫ9406	長岡京時代 土　壙	60cm四方深さ5cm	四角い形状をなす	須恵器（第31図7・11）	
第２トレンチ ＳＤ9407	弥生～長岡 河川流路	幅60cm以上 深さ20cm以上	ＳＤ9405より極端に南方へ深まる堆積土はＳＤ9405と酷似	須恵器（第31図12）土師器小片	ＳＤ9405と一連の河川流路か、より新しい。



第31図　第1，第2トレンチ出土遺物実測図

付表3　右京第94次調査出土遺物観察表

器種	器形	法量（口形）(cm)	法量（器高）(cm)	第31図の番号	器形の特徴	手法の特徴（　）内は第31図土器番号	胎土	焼成	色調	備考
弥生土器	甕鉢類	28.9～34.8	3.65～4.5 残存高	1～2	外弯する口頸部をもち，口縁端部は，短かく平坦である。又，コブ状把手を有する。鉢又は甕であろう(1)。ゆるく外弯する口頸部をもち，口縁端部は丸くおさまる(2)。	内面にナデを施す。外面にナデを施し，後に頸部に指圧痕を施す(1)外面に，頸部から体部に向かってハケメを施し，後に，ナデを施す(2)。外面は頸部に，内面は頸部より少し下方に指圧痕を残す(2)。	粗 2mm大の長石粒，石英粒，石粒を多く含む。	良好	暗茶～黄褐色	畿内第Ⅱ様式の特徴を有する。当調査地の北方(右京第39次調査)において同時期の方形周溝墓が確認されている。これにかかわるものか。
須恵器	蓋	11.3～11.6	5.3～3.25 残存高	4～5	全体に丸味のある蓋で，丸い天井部に，大きく外に張り出すつまみをもつ。天井部と口縁部との境に断面三角形の凸帯状の帯を有する。又この部分は器体の最も肉厚な個所である。	内外面全面ナデ（5）内面口縁部に横方向の，回転を利用しないヘラ削りを施す(4)。	密 長石粒，黒色斑粒を含む	良好	白灰色～灰色	当調査地の北方（右京第39次調査）において，古墳時代中期の方墳が確認されている。これにかかわるものか。
土師器	高坏	12.5	2.8 残存高	6	体部はゆるやかに斜め上方へ伸び，口縁端部は少しとがりぎみにまるくおさまっている。	坏部外面ナデ 坏部内面ナデ後ヘラ磨き 坏部内面の一部にハケ目が残る。	密 **長石粒，銀雲母，赤色**斑粒を含む。	やや甘い	淡赤褐色	
須恵器	坏蓋	12.9～17.2	1.2～1.9	7～10	屈曲する口縁部と平らな天井部からなるもの(7.8 10)と，下方へまがるだけの口縁部をもつもの(9)とがある。8は天井**部が**まるい。	内外面**とも**ロクロナデ 天井部にヘラ起こしの痕跡が残る。	密 細石**粒を**含む(7)(**8**) 長石を**含**む(7)	良好	灰色～白灰色	転用硯（7）
須恵器	坏A・B	小型11.7 大型12.1 底部径	1.15～3.6 残存高	11～13	高台の位置が体部と底部の境よりやや内側にある大型（12）小型（11）	内外面ともロクロナ**デ**	密 長石粒含む 黒色粒含む(12) 銀雲母含む(13)	良好	灰色	転用硯。ヘラ記号「メ」あり。(11)
		13.4	4.6		高台のないもの（13）	底部外面はヘラ起こし				
土師器	甕	16.8～21.0	4.5～4.4 残存高	14～15	口縁端部を強くナデて，「く」の字に外反させる器形。口縁端部を内側へ折りまげてまるくおさめている。	内面体部から頸部までナデ。頸部から口縁部まで横ハケ。口縁端部ナデ。外面口縁部から頸部までハケ後ナデ。頸部から体部まで縦方向のハケ	密 銀雲母を含む。赤色斑粒を含む(14)。長石粒を含む(15)。	やや甘い	淡赤褐色	
墨書土器		現長 3.5	最大幅 2.0	18			密 赤色斑粒，銀雲母を含む。	良好	赤褐色	坏か皿の底部と思われる。土師器
土師器	坏			19	外面口縁部の近いところでくびれ口縁部は内側へ折りまげて丸くおさめている。	内外面ともにナデ。	粗 金雲母を少量含む。	やや甘い	淡茶褐色	奈良時代末から平安初期と思われる。
白磁	碗	6.1 底部径	2.7 残高	22	体部はやや内弯しながらたちあがる。高台は，ケズリ出しの高台で，低い。	内面ロクロナデ。外面ヘラケズリ。底部ケズリ出し高台	粗 鉄分は少ないが，気泡が多い。	良好	灰白色	内面に施釉しているが，底部内面に釉ハゲが見られる。
須恵器	壺	7.1～9.0 底部径	1.9～2.2 残高	20～21	内面底部から上方にむかって45度の傾斜でたち上がり，高台部分はやや外に張り出すもの(20)と，底部は平底で，内面に強いロクロ目を残し，まるみのある体部をもつもの(21) がある。	底部内面から外面高台までロクロナデ。(20)ははりつけ高台、(20，21)とも糸切り底	密 長石粒，黒色斑粒(21)を含む。	良好	灰色	内外面に部分的に自然釉が付着（22）
土師器	小皿	4.15～11.0	0.85～1.45	23～25	平底で体部は直線的に上方を向く（24･25）ものと平底で体部はゆるやかに上方を向いているが，途中で弯曲し，口縁端部は内側に折り曲げて丸くおさめている(23) もの	内面から外面口縁部にかけてナデ 底部は未調整 底部に指圧痕が残る(24･25)	密 長石粒，赤色斑粒(24･25) 銀雲母(24)，石英粒(25)を含む	やや良好	淡黄～淡茶褐色	(23)は右京39次調査の溝ＳＤ3902出土の土師器皿Ａ類小型（第38図1～9）と同じ
瓦質土器	羽釜	25.4	3.7 残高	26	内傾する口縁部からなり，口縁部外面の鍔は，ほぼ水平につく，口縁端部は平坦である。	内面ハケメ 外面ナデ	密 長石粒，銀雲母石粒を含む	やや甘い	淡黒褐色灰色(内)(外)	

器種	法量 幅(cm)	法量 長さ(cm)	木取り	番号	調整	備考
木器	1.7	14.2	板目	16	中央部より，一方向に向かって，削り痕がある。先端にいくほど薄くできている。	ヘラ状木製品
木簡	0.8	9.9	板目	17	墨書面は，刀子による削り跡を明瞭に残す。数度にわたって使用されたのか，側面が上部近くで薄く，端部近くで厚くなる。上部は欠損。	□□□□

4 まとめ

南栗ケ原遺跡について

平安時代と弥生時代を中心とする南栗ケ塚遺跡が、当地周辺に所在することは、右京39次調査において明らかとなった。本調査は、ひとつには、この範囲の確認と性格追求を行う目的があった。第2トレンチの河川ＳＤ9405堆積層において、弥生時代、古墳時代、長岡京時代、平安、鎌倉時代の各時期単純包含層が確認されたことは、先にもふれたところである。これをそのまま、各時期の堆積層と考えるには、調査面積が狭く、当調査位置より南の調査が必要と思われる。現時点では、一応、各層出土遺物が堆積時期を反映していると考えている。とすると、河川ＳＤ9405と南栗ケ塚遺跡の関係が問題となる。

まず、弥生時代においては、本発掘地点の北接地には、弥生時代中期前葉の方形周溝墓群が検出されており、墓域であったことが知られているが、立地環境からみて、集落中心部は北方、又は河川ＳＤ9405対岸に推定される。

また、右京39次調査において、南栗ケ塚古墳が検出されている。五世紀後半の須恵質埴輪をもつ方墳であったが、周溝のみが残り、封土は確認されなかった。当調査では、これに関する遺構等、古墳時代の遺構はみられなかった。注目を集めたのは、初期須恵器の発見である。陶邑編年[(3)]ではＴＫ73型式に比定でき、近在する恵解山古墳と南栗ケ塚遺跡との中間的時期もしくは、恵解山古墳築造時期と思われる。

また、右京39次調査では、13世紀の瓦器埦等が土壙から出土し、トレンチ外から白磁碗が発見されている。しかし、今回の調査からは、河川ＳＤ9408堆積土の中世包含層から、平安時代遺物と鎌倉時代の遺物が混じって出土する状況であり、遺構は確認できなかった。

長岡京時代について

長岡京に関する遺構は、溝ＳＤ3904が、右京39次調査で検出され、長岡京西一坊第二小路東側溝に推定された。本調査の第1トレンチでは、この溝の延長上（Ｙ軸）より東に約８ｍの位置に、掘立柱建物ＳＢ9402や柵列ＳＡ9403が検出された。柵列や建物は、計画的に設置せられている点で、興味が持たれる。しかし、右京八条一坊九町の宅地割りを見るには、調査面積がせまく、付近の調査を待ちたい。尚、当調査地出土遺物は、第31図と付表３にゆだねたい。

注１）現地調査には、以下の方々に協力を得た。

岩崎又男　田中寅吉　平木琳一　今井幸子　岡田裕子　岡田義人　北村浩之　小泉陽
佐藤善久　白川成明　辻林磨宏　中村康典　波多野徹　伏見茂　渡口忠　見目とも子
安達美穂　西村良子

２）岩崎誠「長岡京跡右京第39次（７ＡＮＱＭＫ地区）調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第11冊（1983）』昭和58年３月）

３）田辺昭三『須恵器大成』角川書店昭和56年

第２章　長岡京跡右京第119次（７ANKSN－２地区）調査概要

１　は じ め に

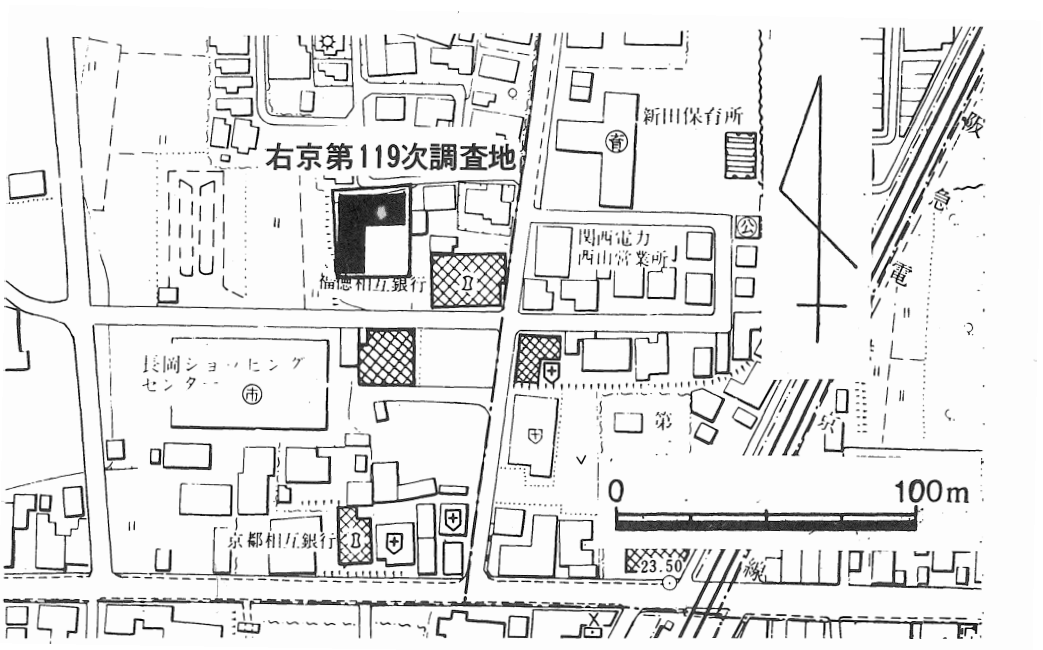
1　本報告は，1983年１月５日から３月10日まで，長岡京市長岡二丁目434－１において実施した長岡京跡右京五条二坊十五町の発掘調査に関するものである。

2　本調査は，調査地周辺で実施した小規模開発工事に伴う立会調査において，掘立柱建物の柱穴を数ケ所で確認したため，これらの遺構，遺物の確認と南約150ｍの地点で検出した開田城ノ内遺跡の広がりを追求することを目的とした発掘調査である。

3　調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，国庫補助金を使用して実施した。現地調査は長岡京市教育委員会社会教育課文化財係中尾秀正が担当し，調査参加者として，竜谷大学院生續伸一郎氏をはじめ諸大学学生諸氏，地元住民の皆さん[(1)]に協力を得た。

4　調査実施にあたり，土地所有者である塚田佐一郎氏をはじめ，長岡つり具店ほか近隣住民の方々には種々の御協力を得た。また，調査中には，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長福山敏男氏・京都文教短期大学教授中山修一氏等から御指導，御援助をいただいた。

5　調査の結果については，来年度以降に予定している遺物整理，実測の終了をまって本報告する。今回はとりあえず，調査概要について略述し，写真・平面図を掲載するにとどめた。



第32図　発掘調査地位置図

2 調 査 概 要

調査トレンチは，西二坊大路と五条第一小路に沿って，幅７ｍで東西21ｍ・南北28.5ｍのＬ字型のトレンチを設定し，東西トレンチ・南北トレンチをそれぞれ，Ａトレンチ・Ｂトレンチと名付けた。調査が進むにつれて，Ａトレンチで掘立柱建物の柱穴群を検出したため，トレンチを南に幅４ｍ拡張した。

調査の結果，地表下約30㎝の床土直下で同一平面において，奈良時代～平安時代の掘立柱建物７棟，柵列４列，土壙１基などが検出された。

奈良時代の遺構は，掘立柱建物ＳＢ11903・ＳＢ11909・ＳＢ11910・ＳＢ11912・ＳＢ11919の５棟と柵列ＳＡ11916，溝ＳＤ11908・ＳＤ11921の２条，他に多数のピット群がある。掘立柱建物群は，柱の重複関係や棟方向から３期に分けられる。これらの遺構からは，奈良時代後期の様相をもつ須恵器・土師器や製塩土器などが出土している。特に，建物ＳＢ11903とそれを建て直した建物ＳＢ11919は，３間×３間の総柱建物で倉庫と思われる。これらの建物は，乙訓地域でいままでに検出した奈良時代の倉庫のうち最大の規模で，その建物の性格が注目される。

また，長岡京・平安時代の遺構は，掘立柱建物ＳＢ11911・ＳＢ11913の２棟，柵列ＳＡ11915・ＳＡ11917・ＳＡ11918の３列，土壙ＳＫ11902の他に多数のピット群がある。これらの遺構もその重複関係や棟方向から３期に分けられる。特に，土坑ＳＫ11902からは，長岡京時代と思われる土師器・須恵器・製塩土器・丸瓦などが多量に出土しており，当時のゴミを廃棄した土器溜りと思われる。

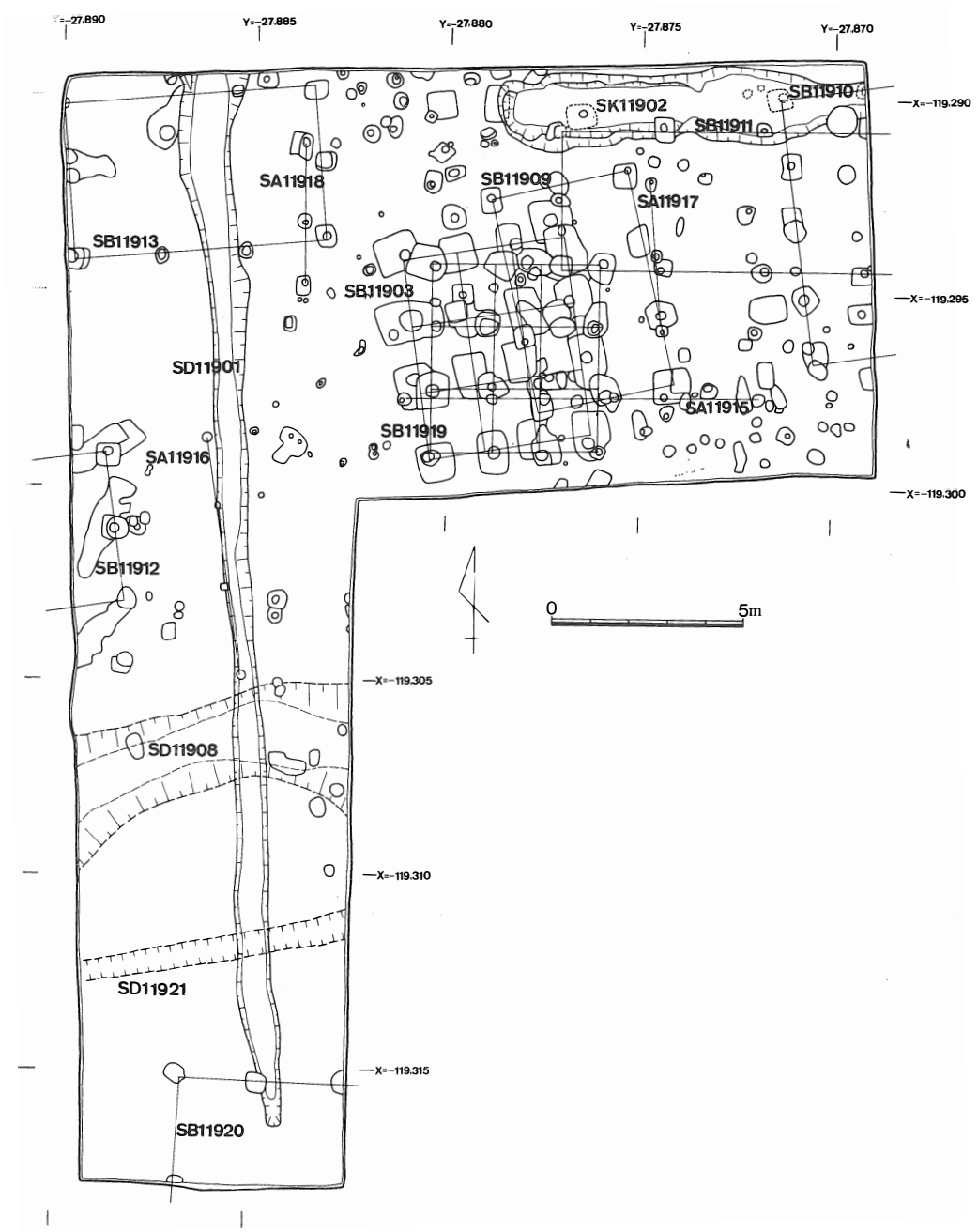
以上の遺構のほかに，瓦器の細片を含むピットや近世以降の溝ＳＤ11901などが検出されている。また，注目される遺構として，Ａトレンチ東南隅で検出された製塩土器片を多数含むピットがある。製塩土器の製作技法はすべて粘土紐の積上げによるものである。付近の遺構や遺物包含層からも，多数の製塩土器が出土しているため，検出した建物群などの性格を検討していく上で貴重な資料となろう。

出土遺物は，弥生時代後期から近世以降の各時代のものがある。主なものは，奈良時代後期から平安時代初頭までの土師器・須恵器・製塩土器などである。他に少量ではあるが，龍泉系の青磁碗・瓦器片が出土している。

以上のように，今回の調査では，奈良時代後期から平安時代初頭にかけての遺構が多く検出され，乙訓地域における長岡京時代前後の状況を明らかにしていく上で貴重な成果をおさめることができた。本報告については，後日明らかにしていきたい。　　（中尾秀正）

注１）調査に参加していただいた方は，次のとおりである。

調査補助員　續伸一郎・上野正一・中江慶・八木信介



第33図　検出遺構配置図

調査作業員　天野菊次郎・生島幸男・中小路徳造・橋本健一・松田保・村上藤一・山内芳治・吉田藤三郎・吉田角太郎・吉田保定・今井幸子・中沢ナツ子・前川秀子・桝田キミ江

整理員　朝倉茂美・太田延子・秦麗子・牧野ゆかり

付表4　右京第119次調査おもな検出遺構一覧表

遺構名		規模			柱間		棟方向		備考
		間数	桁行	梁行	桁行	梁間	方向	方位	
建物	SB11903	東西 南北 3×3	約 m 5.2	約 m 4.2	約 m 1.7	約 m 1 4	南北	N－9°－W	総柱 奈良時代（後）
	SB11909	2×3	5.7	3.6	1.8	1.8	南北	N－13°－W	桁行2間目 2.1m 奈良時代（後）
	SB11910	1以上×4	6.8	2.1以上	1.7	2.1	南北	N－9°－W	奈良時代（後）
	SB11911	3以上×2	8.1	3.6	2.7	1.8	東西	真北	長岡京時代
	SB11912	不明×2	不明	3.8	不明	1.9	東西	N－9°－W	奈良時代（後）
	SB11913	1以上×不明	6.6	4.2	2.2	2.1	東西	N－4°30′－W	平安時代（初）
	SB11919	3×3	4.8	4.3	1.6	西から 1.6 1.2 1.5	南北	真北	総柱 奈良時代（後）
	SB11920	2以上×1以上	4.2以上	2.7	2.1	2.7	東西	N－2°45′－E	
柵列	SA11915	4	9.3		2.3		東西	真東西	長岡京時代
	SA11916	3	6.2		不等間		南北	N－9°－W	奈良時代（後）
	SA11917	2	3.6		1.8		南北	N－4°30′－W	平安時代
	SA11918	2	3.8		不等間		南北	真北	長岡京時代

遺構名		性格	規模			備考
			幅	長さ（検出長）	深さ	
溝	SD11908	南北溝	約 m 0.9	m (27.5)	約 m 0.2	近世以降の陶磁器出土
	SD11908	東西溝	2.5	(7)	0.64	須恵器，土師器小片出土
	SD11921	東西溝	0.7	(7)	0.28	
土坑	SK11902	東西方向の土坑	2	(9.7)	0.42	長岡京時代の須恵器・土師器・製塩土器出土

第３章　長岡京跡右京第39次（７ＡＮＱＭＫ地区）調査概要

１　は　じ　め　に

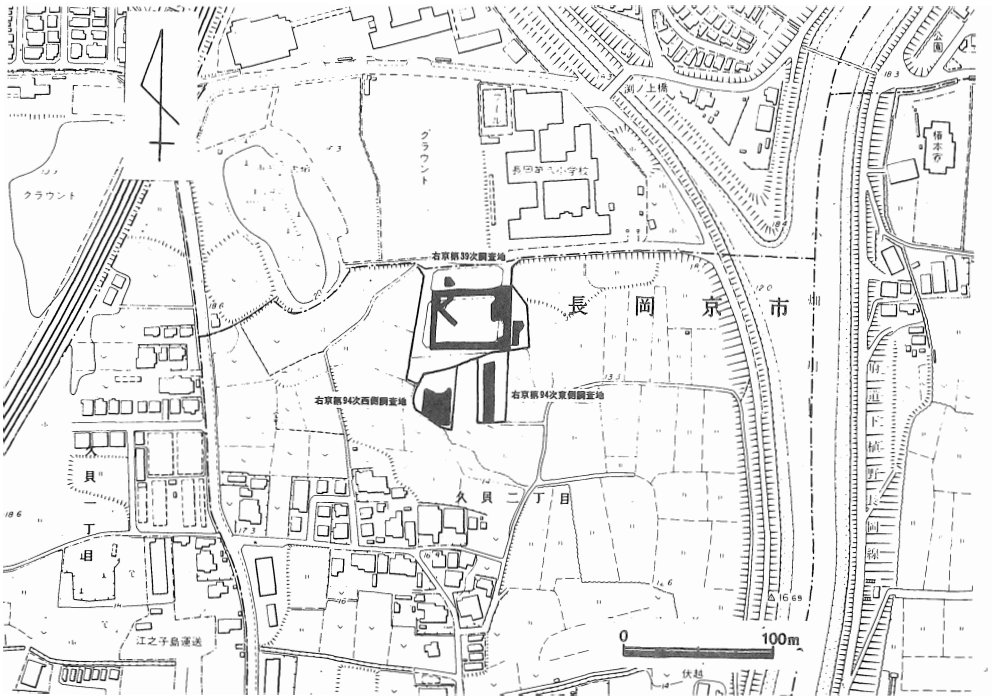
1　本報告は，1980年５月22日から６月30日まで，長岡京市久貝二丁目801～812において実施した，宅地開発に伴う発掘調査に関するものである。

2　本調査は，長岡京市教育委員会が主体となり，長岡京跡発掘調査研究所が委託を受け，同所長中山修一氏（京都文教短期大学教授）の指導のもとに，同調査員竹井治雄が現地調査を行った。現地調査には，地元住民の方々はじめ，諸大学学生諸氏の協力があった。(1)

3　遺物整理，実測，トレースは，原秀樹，前田あけみ，遺構の図面整理，トレースは，白川成明，渡口忠，小泉陽，宮崎茂夫が担当した。編集は，岩崎誠，中尾秀正，鈴木芙美子，が行った。

4　本報告では，中世から古代への順で，時代ごとに，検出遺構と出土遺物を掲載した。

5　本報告のうち，各時代遺構編を白川成明が，遺物編を原秀樹が分担報告した。まとめは，岩崎誠が執筆した。



第34図　発掘調査地位置図

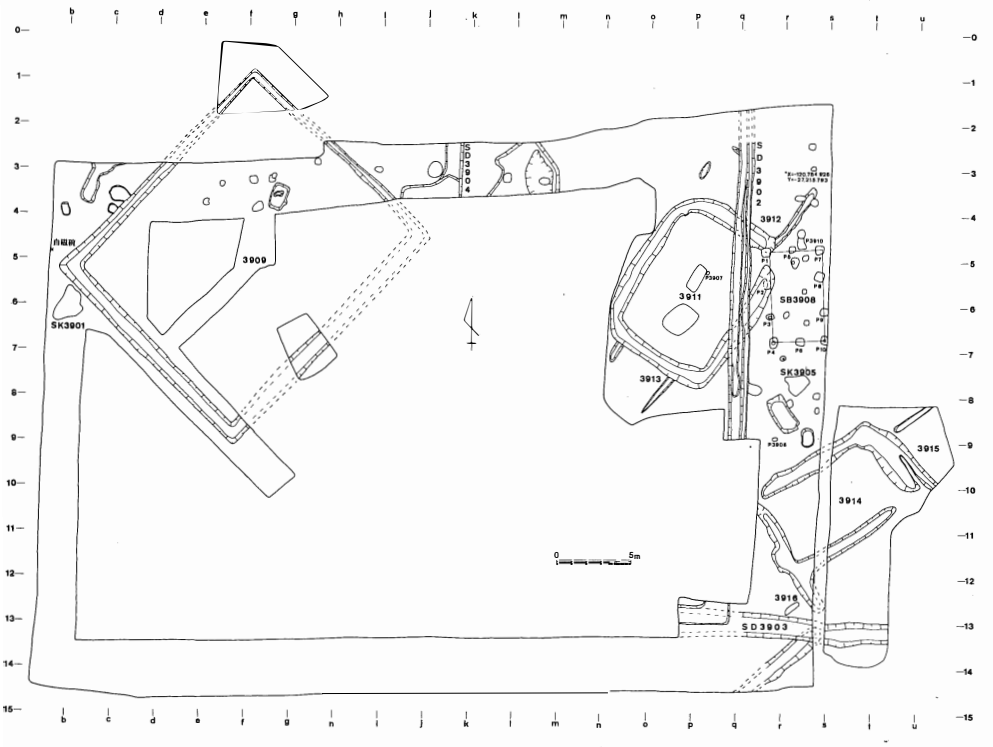
2　調査経過・調査概要

本調査地は，標高約13mの緩扇状地性低地にある。現地形でも，犬川にそって，田畑の畦の並びが付近と異なり，等高線も入り込んでいる。地形は北西から南東方向に傾斜しており犬川と小畑川の合流点近くに位置し，小畑川右岸にあたる。地籍図では恵解山古墳及びその東西を小字北栗ヶ塚と呼び，本調査地の小字南栗ヶ塚は，恵解山古墳の南から南東に隣接している地域を指す言葉となっている（第34図)。

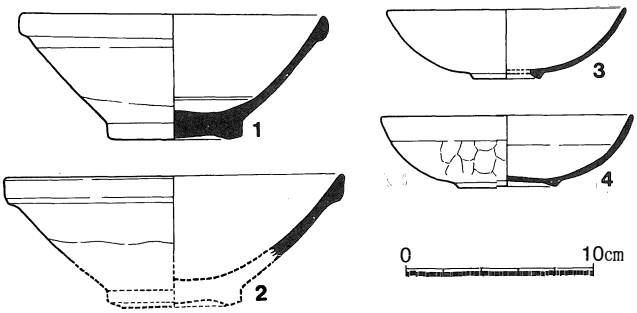
長岡京については，推定右京八条一坊九・十六町に位置し，推定西一坊第二小路が調査地中央にかかる。また，調査地の北西に隣接して，鉄製武器 700点余りを出土した恵解山古墳がある。[2] このため，長岡京に関する遺跡調査とともに，恵解山古墳に係る遺構・遺物の有無を調査することに目的を置いた。

宅地造成に伴う事前調査であるため，遺構の破壊される可能性の高い新設道路計画位置に試掘トレンチを設定し，調査を開始した。この時点で，弥生時代方形周溝墓をはじめ，平安時代南北溝等が確認されたため，トレンチを一部拡張した（第35図)。

トレンチ内の割り付けは，任意に３ｍ方眼に割り付け，南北ラインをａ，ｂ，ｃ……の順で西から付し，東西ラインを０，１，２……の順に北から付した。最終的に国土座標による測量を行った。測量は，長岡京跡基準点測量成果をもとに，51－６を使用した。ｒラインと３ラインの交点に基準ポイントを設定した。Ｐ１の座標はＸ＝－120,784.926m，Ｙ＝－27,215.793mで，トレンチ割り付けラインは，Ｎ－１°11′54″－Ｗの振れ角がある。



第35図　遺構配置図



第36図　土壙ＳＫ3901出土遺物実測図

３．検出遺構

鎌倉時代（第36図）

この時期の遺構は，土壙ＳＫ3901だけが検出され，灰釉陶器の碗と瓦器埦２個体分が出土した。瓦器埦は，楠葉型であり，橋本久和氏の編年[(3)]によると，第Ⅲ期―３小期にあたり，13Ｃ末のものである。又，同時期の遺物として，輸入磁器である白磁の碗が完形あるいはそれに近い形で，トレンチ北西部で出土している。このような鎌倉時代の遺物が，比較的良好な形で発見された。又，輸入白磁が出土したことによって，当調査地周辺には，この時期の集落が想定され，比較的有力な人の居住地が想定できる。

平安時代（第37図）

検出遺構には，溝ＳＤ3902・03の２本があり，溝ＳＤ3902の方向は，ほぼ真南北を向くがトレンチ南部で直角に西へまがる。遺物はｑ－４～６地区が圧倒的に多く，土師器の皿，黒色土器の埦，皿，灰釉陶器の碗，緑釉陶器の碗，須恵器の皿，坏蓋などが出土した。溝ＳＤ3903の出土遺物は，土師器の埦・皿・須恵器の甕・黒色土器片・緑釉陶器片などがある。方向はほぼ真東西を向くが，溝の西で溝ＳＤ3902に切られている。溝ＳＤ3902，溝ＳＤ3903のいずれも東西又は南北方向にあり，条里制を無視した溝とは思われない。さらに，出土遺物が，供膳形態がほとんどであることから，上記両溝により区画された集落が，存在していたと思われる。

長岡京時代（第39図）

長岡京の時期に比定できる遺物が，溝ＳＤ3904，土壙ＳＫ3905，ピットＰ3906・07，ＳＢ3908から検出されている。とくに溝ＳＤ3904は，長岡京の条坊に関する遺構であると考えられる。国土座標による位置関係から見ると，長岡京西一坊第二小路の東溝にあたる。ただし，西側溝は，確認検出されなかった。当溝の出土遺物には，土師器の皿・埦・甕・須恵器の坏・坏蓋・壺・甕などがある。土壙ＳＫ3905は，遺物が散乱した状態で，土師器の皿・埦・坏・甕・須恵器の坏・坏蓋・壺などが出土した。他にピットＰ3906もこの時期と思われる。遺物は土師器の皿などがある。建物ＳＢ3908（第39図）は，２間×３間（3.5×6.0m）の南北棟の掘立柱建物で，当調査地東部のｒ－４～６地域で検出された。当建物の１間は，Ｐ８－Ｐ９間とこれに対するＰ２－Ｐ３間は，2.4mを測るが，他は1.8mである。柱痕は，ピットＰ３・４・10

から検出された。遺物は，Ｐ４から土師器の埦・皿，Ｐ10から土師器の甕などが出土した。

古墳時代（第41図）

当調査地北西部において,一辺が溝の心々で18.5ｍ×15.5ｍ，墳丘部で17ｍ×14ｍの四角くめぐる溝が検出された。この溝の内から,大量の埴輪片が出土した。溝が狭いきらいはあるが,その形状，出土遺物からみて方墳としてさしつかえないであろう。北方部の周壕は後世に削平され，溝の底しか検出されなかった。遺物は，埴輪（円筒・朝顔形・家形）が出土している。混入した遺物に弥生土器の蓋・壺・甕片などがある。出土状況は，南西溝からの検出が多く，大半が円筒（朝顔形）埴輪である。この円筒埴輪は，川西宏幸氏の編年[4]によると，第Ⅳ期に比定でき，５世紀後半にあたる。又，当調査地の北西にある乙訓地方最大の前方後円墳である恵解山古墳の陪塚になる可能性も捨てがたいが，当方墳の方が，やや後出であろう。他に，ピットＰ3910からは，６世紀代の須恵器の坏蓋が出土している。なお，このピットからは長岡京時代前後の土師器片などが出土したことから，ピットの時期は長岡京時代と思われる。

弥生時代（第44～46図）

弥生時代の遺構は，６基の方形周溝墓が検出された。方形周溝墓3911の台状部は長方形を呈し，４周に溝をめぐらすが東隅に陸橋部を有する。出土遺物には，弥生土器の壺（畿内第Ⅱ様式）があり，周溝内に横たえて置かれた供献土器と思われる。さらに，方形周溝墓中央部に主体部を２基検出した。そのうち北側の主体部内には，３点の打製石鏃がいずれも墓壙内の中央部の西よりでかたまって出土し，両主体部で木棺の痕跡を確認した。方形周溝墓3912の南東部溝は残りがよいが，北東部及び北西部は溝の底を少し残すのみである。又，南西部の溝は，方形周溝墓3911に切られている。出土遺物はみられない。方形周溝墓3913の北東部は，方形周溝墓3911の一辺を共有している。出土遺物は皆無。方形周溝墓3914は，東隅と西隅に陸橋部がみられる。出土遺物は，弥生土器の壺などがある。方形周溝墓3915はトレンチ東端で確認された。当方形周溝墓の南西溝は，方形周溝墓3914の北西溝を切っているので，これより時期は新しい。遺物は出土しなかった。方形周溝墓3916は，周溝内より弥生土器片が出土した。これらの方形周溝墓群は，3911を中心とする北群と，3914を中心とする南群に分けることができる。

４．出　土　遺　物

ＳＤ3902出土遺物（第38図）

この溝からは，土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器・平瓦・小鉄片等が出土している。このうち量的に最も多いのが土師器で，他はいずれも少量である。

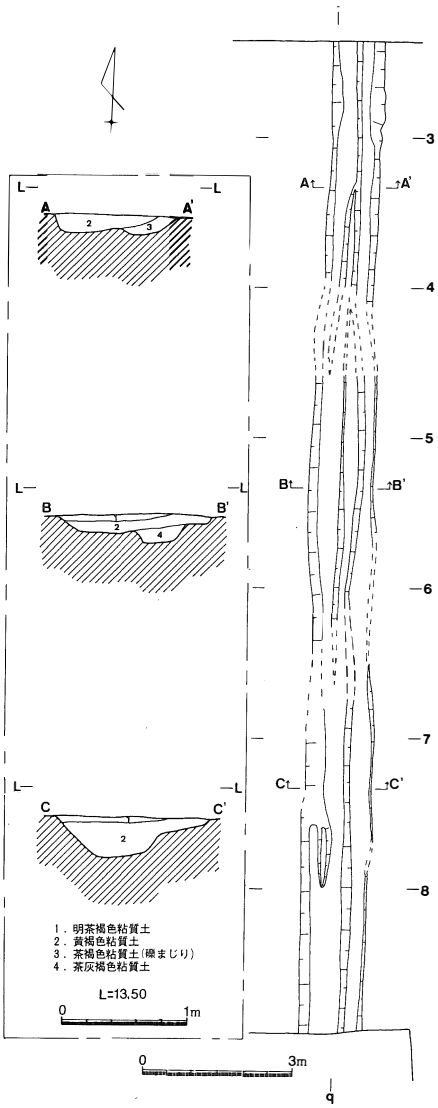
土師器は皿のみで，他の器形はみられない。皿は口縁の形態により２種類に大別でき，さらにその法量により大小に区分される(付表9)。Ａ類は口縁部を外反させた後，端部を内側に肥厚

させる形態のものである。口径13.0～15.2cm，器高1.4～2.8cmのもの（12～20）と，口径8.7～～11.2cm器高0.9～1.7cm（１～９）の２種類がある。B類は口縁部を外反ぎみに上部へひらく形態のものである。口径12.2～14.4cm・器高1.4～2.7cmのもの(21～32)と口径10.6～10.8cm・器高1.0～1.3cmのもの(10・11)がある。以上のA・B類は，いずれも内面をナデ，口縁部外面を横ナデ，外面を指オサエ調整する。胎土は精良で，淡灰色を呈する。また，これらの土師器には，灯火器に使用したとみられる油煙の痕跡をとどめるものが半数近くをしめる。内面の油煙のつき方には数種類あり，メガネ状に輪となって吸着するもの，底部から口縁部にかけて全面に吸着するもの，炭素が吸着せずに四ヶ所円形に残るものなどがある。

須恵器は皿（33），坏B（34），埦（37）の他に瓶の口縁部，甕の体部，糸切り底の埦があるが，いずれも細片であるため図示しえない。皿（33）は，土師器の皿の形態をなすが，糸切り底で体部内外面をロクロナデする。埦（37）は，体部外面に水びき成形によると思われる凹凸が残り，体部中ほどには一条の浅い沈線がつく，底部は幅約1cmの高台がはがれた痕跡が残り，内面をナデる。口縁部外面には重ね焼きの痕跡を残しており，口縁部内面から体部上半部にかけて自然釉が付着する。胎土は精良で淡灰色，焼成は堅緻である。

緑釉陶器（35）と灰釉陶器（36）はいずれも埦であり，その量も極めて少ない。

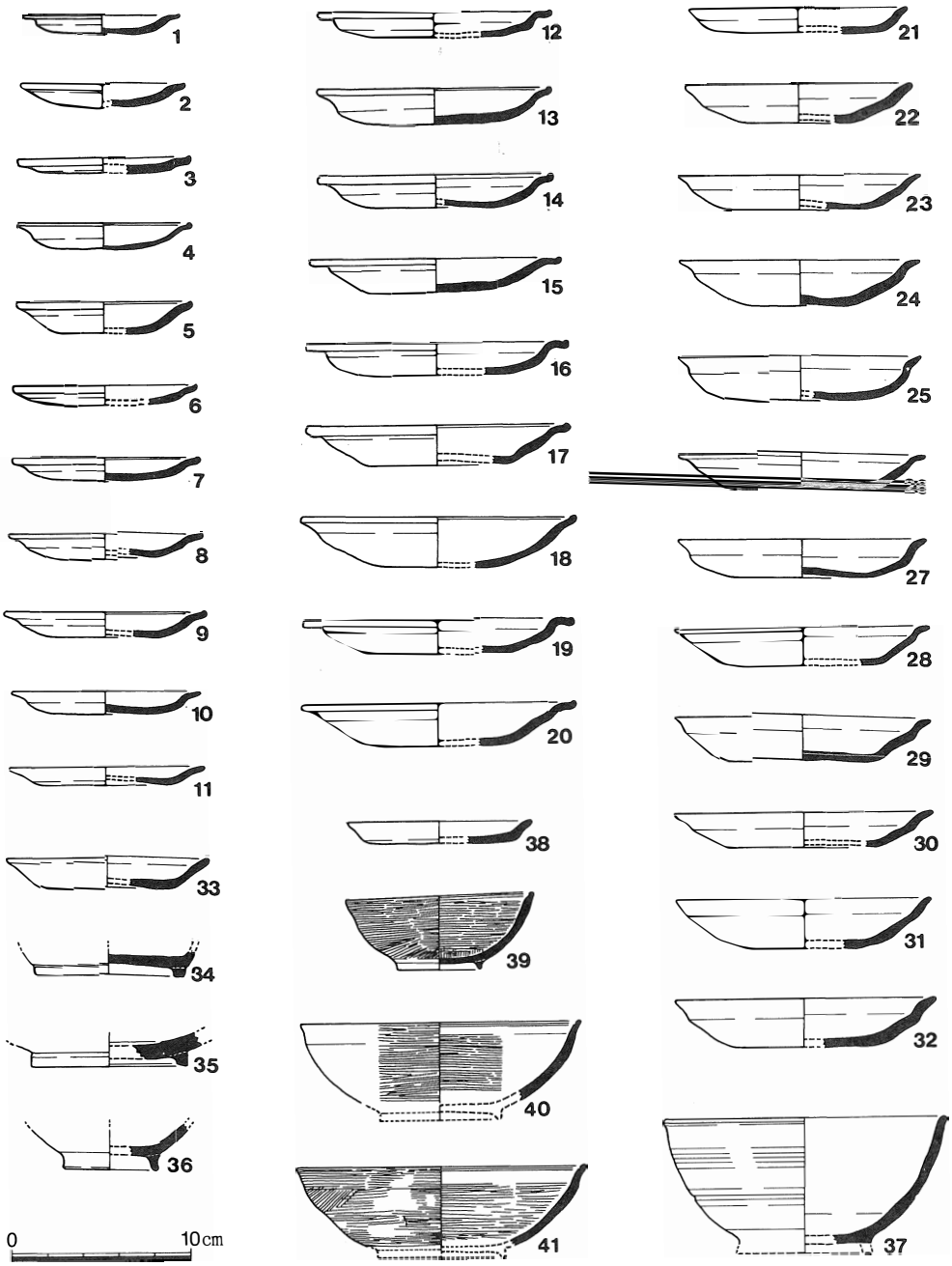
黒色土器には皿（38）と埦（39～41）があり，いずれも内外面を黒色化するB類である。　皿(38)は黒色土器に共通してみられるヘラミガキは認められず，全体をナデ仕上げするのを特徴としている。胎土および内外面は、充分に炭素を吸着しておらず，暗茶灰色を呈する。埦は口径10.4cmのもの（39）と，16cm前後のもの（40・41）に分かれる。いずれも雲母と石英粒子を含む精良な胎土である。前者は内面および外面に密なヘラミガキを施した後，断面三角形状の高台を貼りつけたものである。後者は高台部分を欠くが内外面に密なヘラミガキを施す。口縁は横ナデによりやや外



第39図　溝ＳＤ3902実測図

反する。両者とも口縁部内面に一条の沈線を施している。

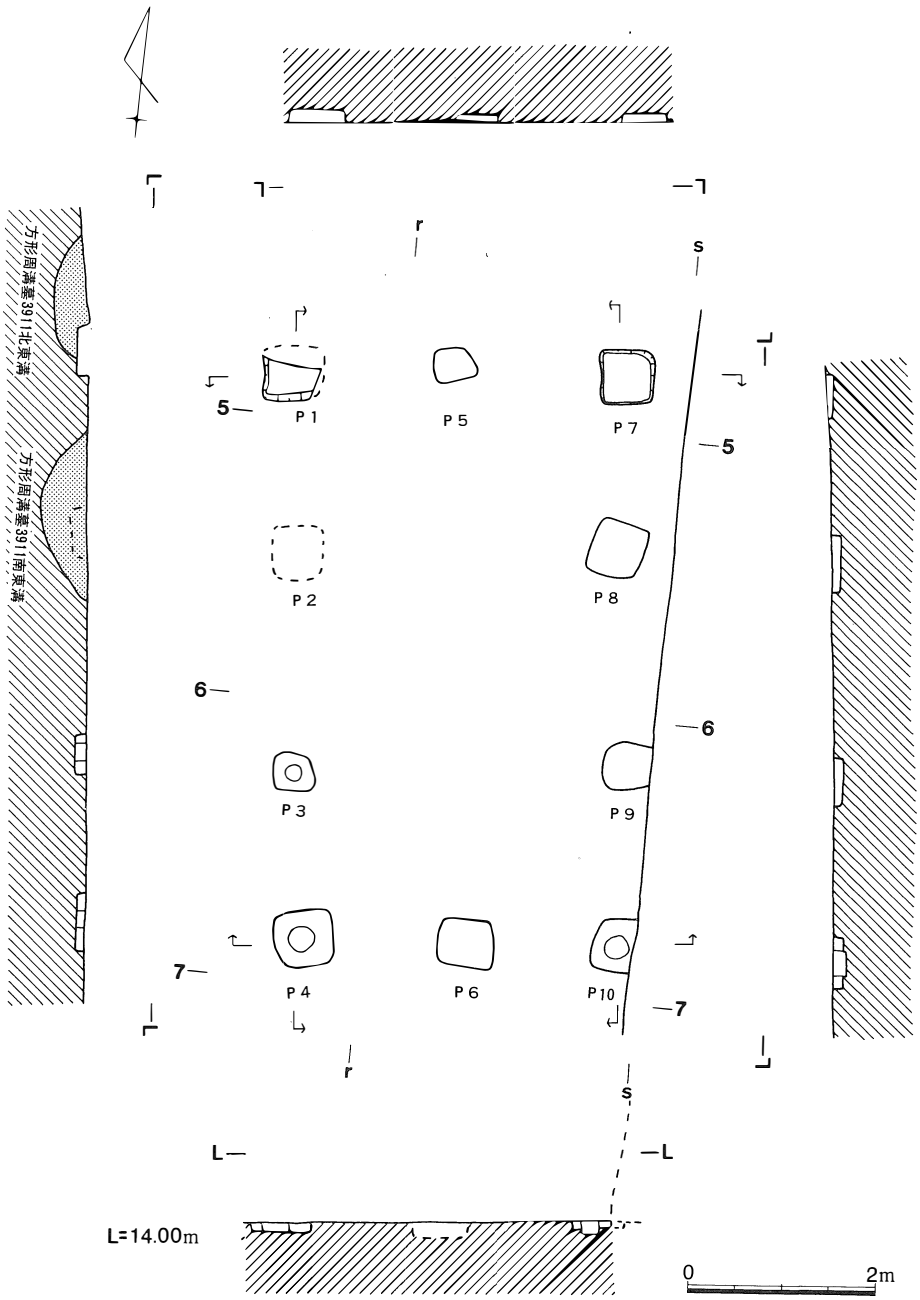
以上のことからＳＤ3902出土遺物を検討すると，供膳形態のみ出土するという特異な傾向を示すものの，乾元大宝（4枚）を伴出した平安京左京内膳町ＳＫ18[5]出土土器に，比較的類似している。ゆえにこれらの遺物の年代は，概ね10世紀末から11世紀初頭に比定されるものと考えられる。



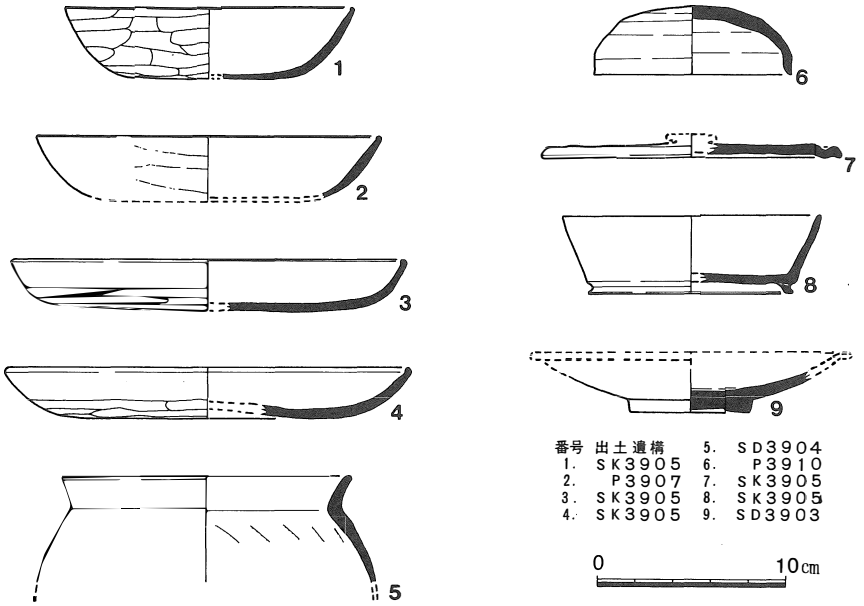
第38図　溝ＳＤ3902出土遺物実測図

長岡京時代の遺物（第40図）

土壙ＳＫ3905をはじめ，溝ＳＤ3903，ピットＰ3907から出土した。土壙からは，土師器坏Ａ（１），皿Ａ（3・4），須恵器坏Ｂ（８），坏Ｂ蓋（７）が出土した。ピットからは，土師器坏Ａ（２）が出土した。この他包含層からも出土しており，他の器種では，土師器甕や須恵器壺，甕等がある。特記すべきものには，墨書土器があるが，解読不可能な小片である。



第39図　掘立柱建物ＳＢ3908実測図



第40図　溝ＳＤ3903・04，土壙等ＳＫ3905，Ｐ3906・07・10出土遺物実測図

方墳出土遺物（第42・43図）

方墳3909からの出土遺物は，埴輪が主で，当古墳の南西溝に集中して出土した。埴輪は全て破片となっており，まばらな状態で検出された。器種には，円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪，家形埴輪がある。

円筒埴輪は，朝顔形埴輪と同じ整形で，同じ技法が使われている。すなわち，製作は，粘土紐巻き上げ技法によっており，内面ナデ，外面ハケ目，タガは，押えナデによる整形が行われている。外面のハケ目は，第１次整形には縦ハケが，第２次整形には川西宏幸氏の分類のＢ種横ハケが施され，丁寧に調整されている。縦ハケと横ハケは，いずれも同一原体によるものと思われる。いずれも非常に細かい目の原体である。内面のナデは縦方向であるが，粘土紐単位のすきまを残す部分が多々あり，また，その単位の凹凸を残すものが多い。これによると，粘土紐の幅は約３cm前後である。断面観察によると，粘土の目が全て内傾しており，製作に際して，粘土紐を内面では下へ伸ばし，外面では上へ伸ばして，上下の粘土紐を接継していることがわかる。縦ハケはタガ接合前に施されており，横ハケは，タガ接合後に施されている。タガ間は 9.4cm等間と思われ，最下段と中間段の差もない。横ハケは，幅約 8.5cmの原体幅で，各段同じ原体で施されている。円筒埴輪の口縁部は，わずかに外反し，外へ巻き込むように終わる。朝顔形円筒埴輪は，くびれた肩部に断面三角形の凸帯をめぐらし，大きく開く口縁をもつ。口縁部は頸部から大きく開き，疑口縁を作り出し，その上に外反する口縁をもつ。接合面には，疑口縁内面にヘラによる刻目をつけ，接合しやすくしている。口縁端部は，横ナデによる

整形が施されているが，口縁部内面は，口縁端部下から疑口縁との接合点まで横ハケがなされている。円筒埴輪の口縁部も，内面は横ハケ整形である。タガは，断面台形の安定した形に作られており，接合面は，円筒部本体に横ナデを施している。底部底面には，植物の繊維の圧痕が，ほぼ一定方向に並んで見られる。埴輪の製作段階又は乾燥段階に付着したものと思われる。また，製作時における，粘土の継ぎ目の認められるものもある。透し孔は全て丸く，一対が残る。

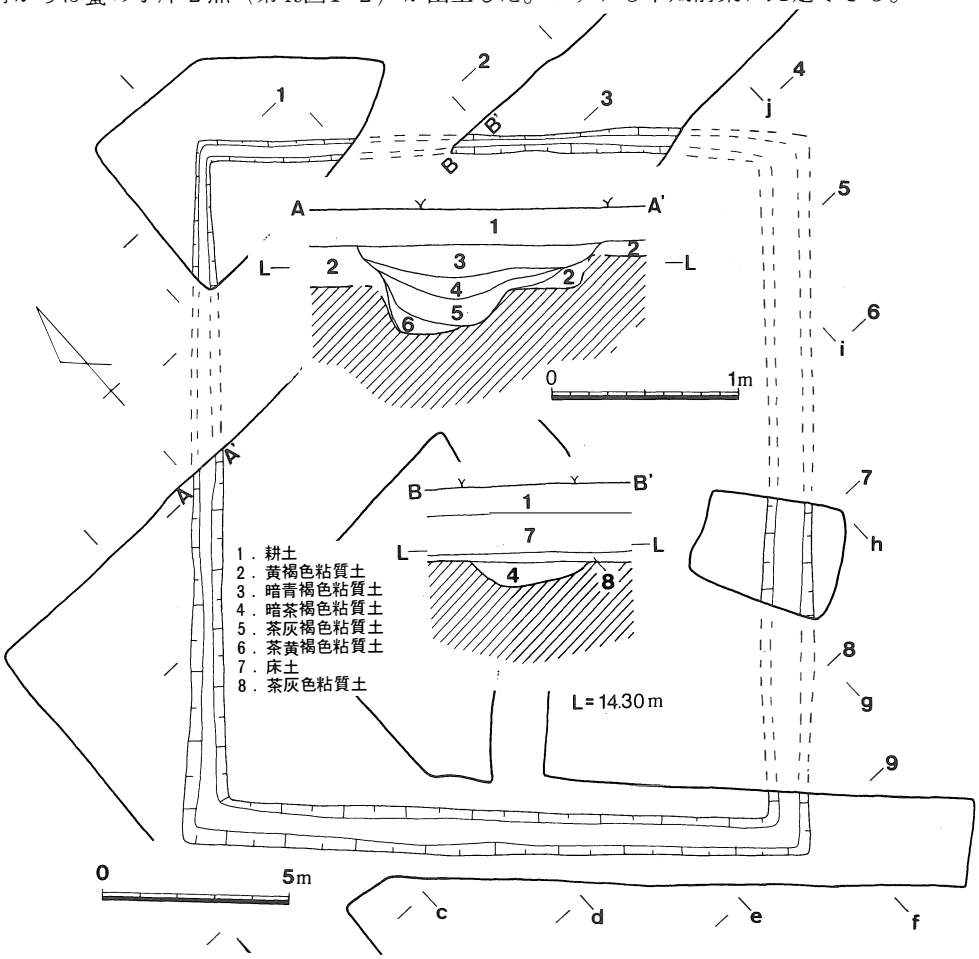
家形埴輪は，柱等の表現は線刻によっている。表現には，ヘラ描き線刻による直線，綾杉，ヘラによる刺突によるものが見られる。外面は，ハケ目の上から荒くナデている。内面は，成形時の指の痕を明瞭に残し，ナデ痕や指圧痕がある。

これらの埴輪は，特に円筒埴輪類の整形や製作技法の特徴より，５世紀後半，川西編年の第Ⅳ類に比定できる。家形埴輪も伴出していて矛盾はない。

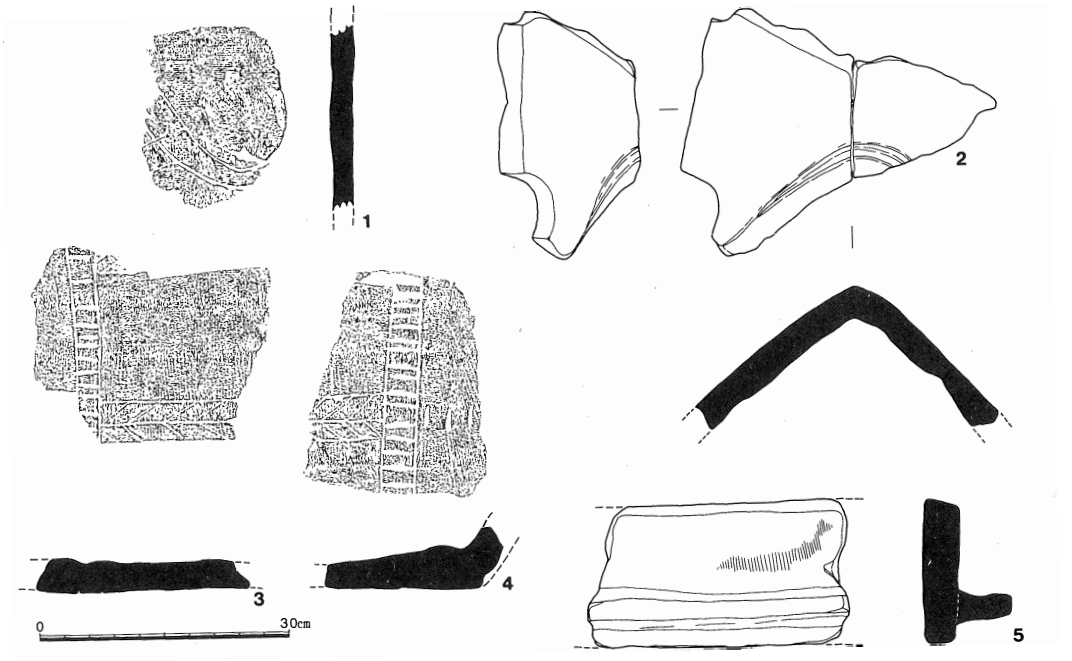
方形周溝墓出土遺物（第47～49図）

方形周溝墓は，合計６基が検出された。そのうち，3911と3914が最大のものである。

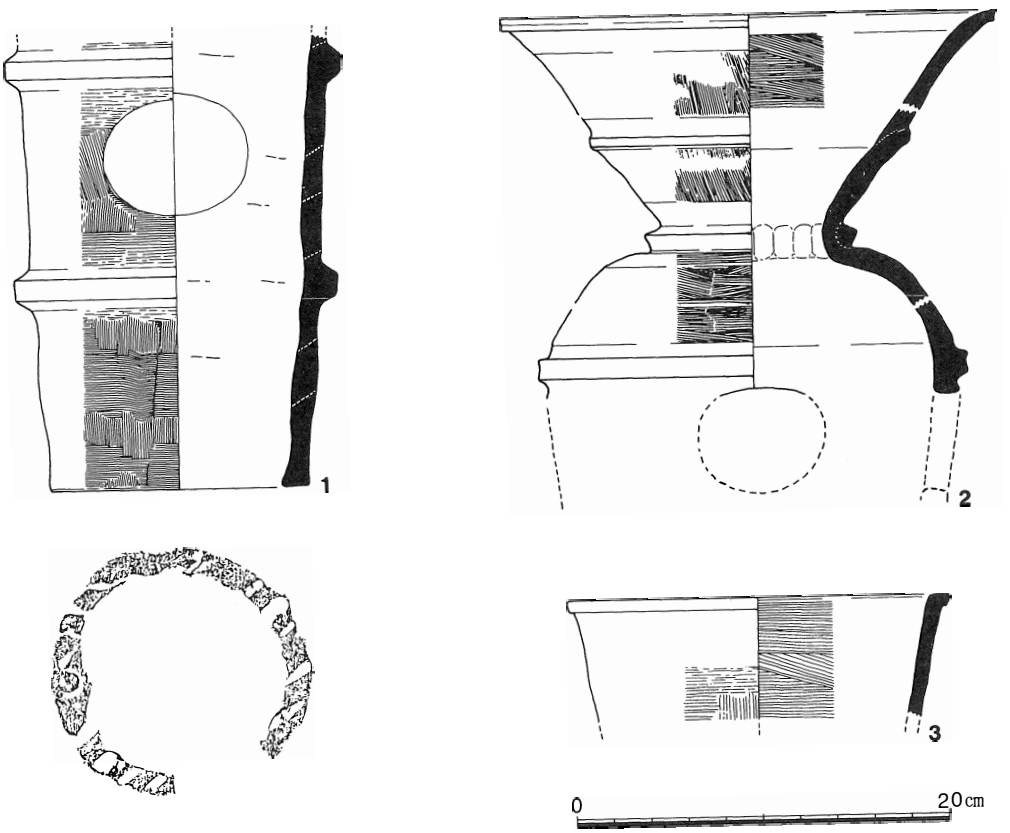
3911の周溝からは，供献された壺４個体（第47図１～３，第48図８）等が検出された。3914の周溝からは甕の小片２点（第49図1・2）が出土した。いずれも中期前葉に比定できる。



第41図　方墳3909実測図



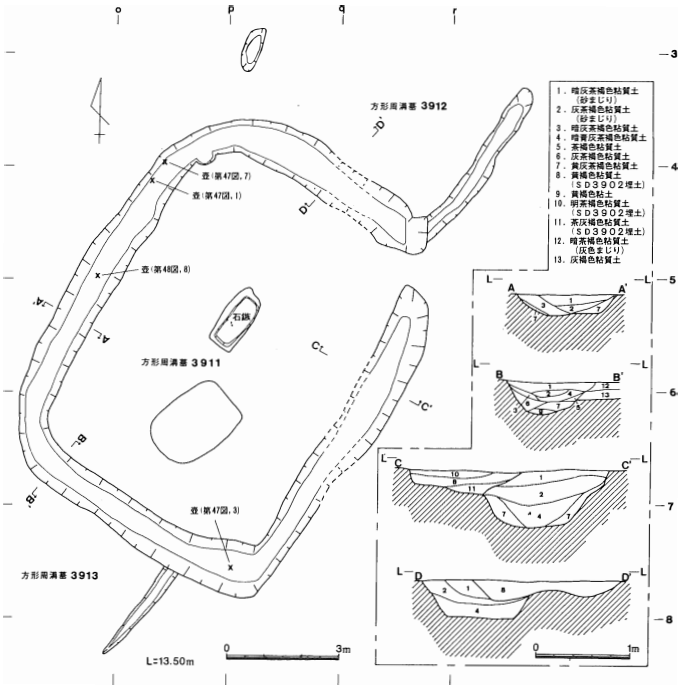
第42図　方墳出土埴輪拓本実測図



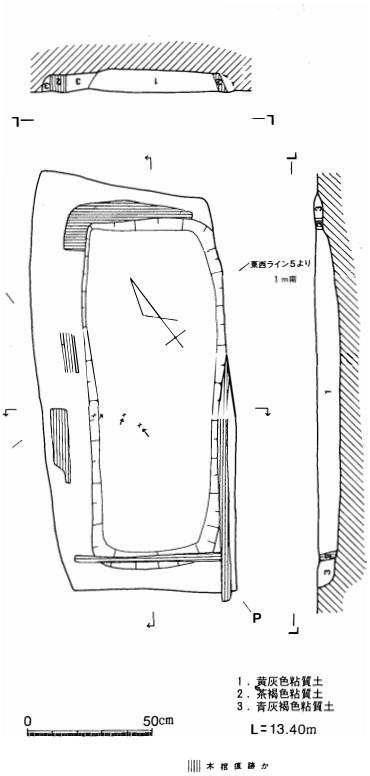
第43図　方墳出土埴輪実測図

石器（第50図・図版15）

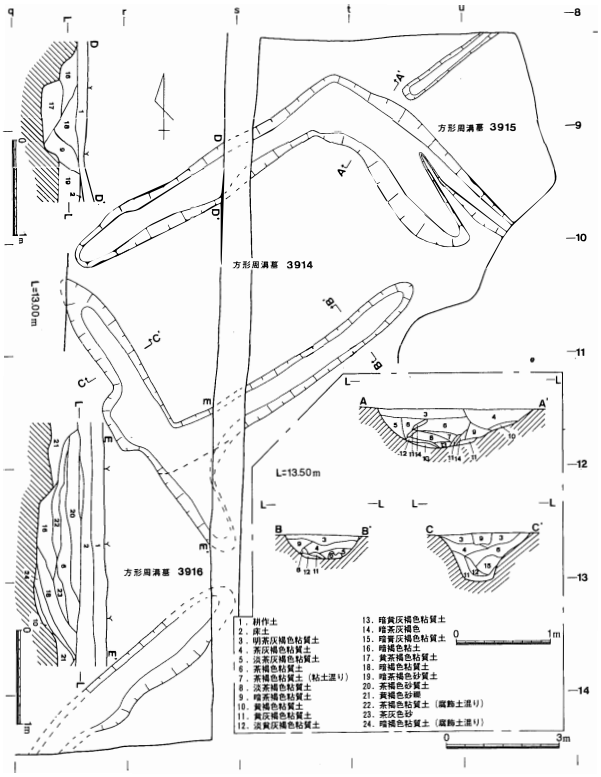
石器類には，先土器時代のナイフ形石器，弥生時代の石鏃，時期の明確でない砥石がある。ナイフ形石器は，翼状剥片を背面調整したもので，国府型ナイフ形石器に通じるものである。いわゆる小型ナイフ形石器か。石鏃は，凸基式２個，凹基式１個がある。いずれも，方形周溝墓3911主体部からの出土である。



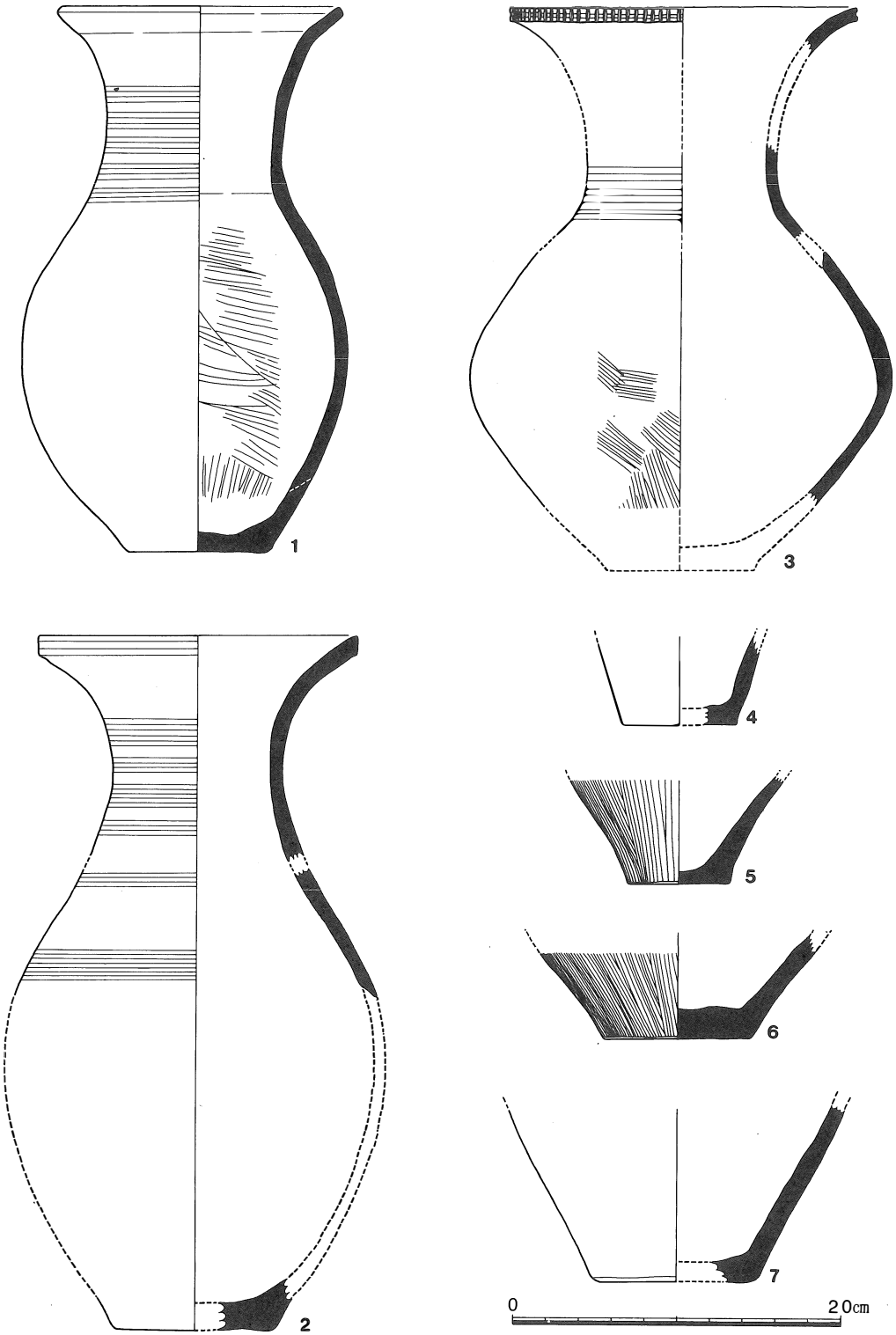
第44図　方形周溝墓3911実測図



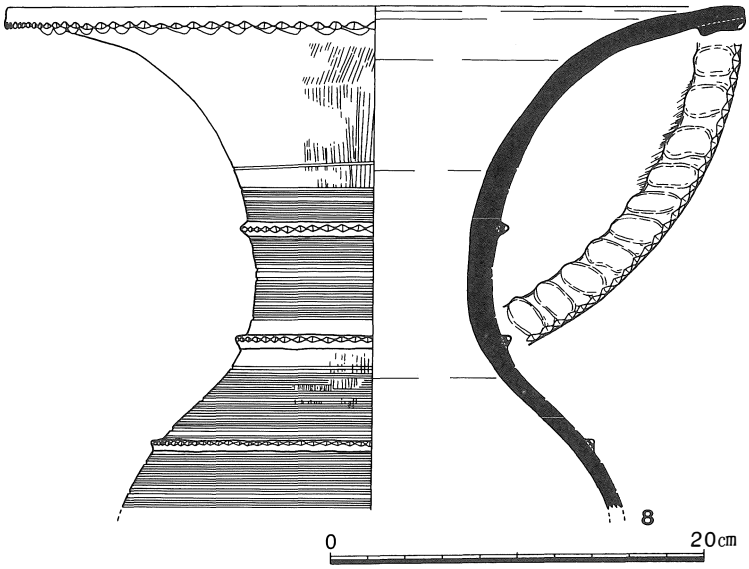
第45図　方形周溝墓3911の主体部



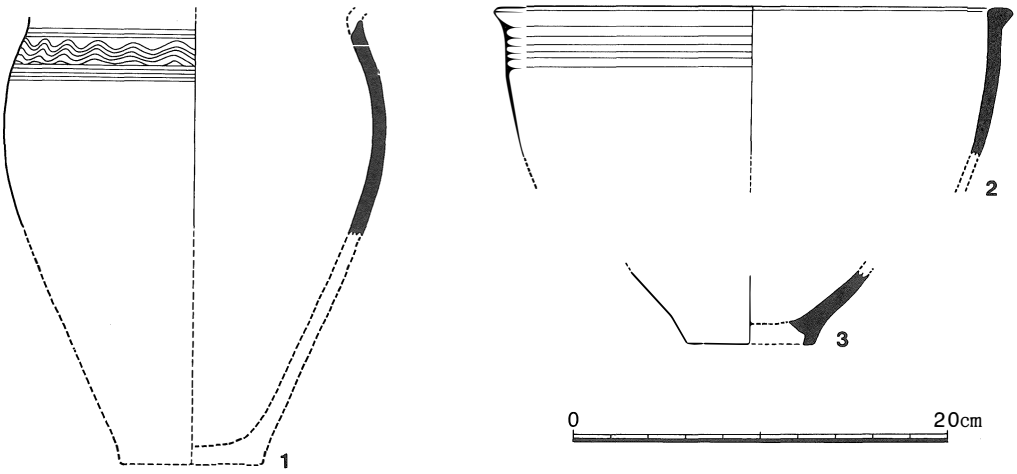
第46図　方形周溝墓3914実測図



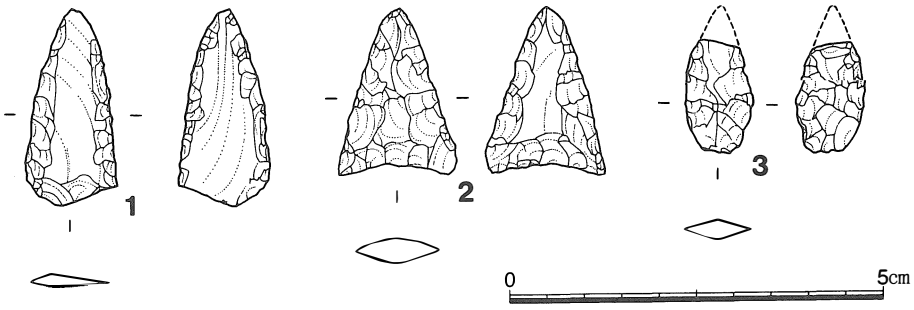
第47図　方形周溝墓3911出土弥生土器実測図(1)



第48図　方形周溝墓3911出土弥生土器実測図　(2)



第49図　方形周溝墓3914出土弥生土器実測図



第50図　方形周溝墓3911主体部出土石鏃実測図

付表５　右京第39次調査検出遺構観察表(1)

遺構名	時代・性格	規模	特徴	出土遺物	備考
ＳＫ3901	鎌倉時代 土壙	東西 1.5m南北 2m	不定形な形状で性格は不明である。	瓦器椀，灰釉陶器碗	
ＳＤ3902	平安時代 溝	幅　約1.30m 検出長　19.8m 深さ　0.16～0.25m	方形周溝墓3911の北東，南東溝の一部を切る。ゆるやかに南に向けて深くなる。溝の中央が一段深くなっている。　N－1°20′－E	土師器皿・椀，須恵器坏・皿・壺・甕・坏・蓋，黒色土器，灰釉・緑釉陶器等(第38図)	条里制による地割と関係するか。 遺物から10世紀末と推定
ＳＤ3903	溝	幅　約 1.5m 検出長　10m 深さ　0.22～0.34m	方形周溝墓3916の南東溝の一部を切る。西に向けて深くなる。 N－84°－W	土師器椀・皿，須恵器甕，黒色土器，緑釉陶器(第40図９) など	遺物から10世紀と推定
ＳＤ3904	長岡京時代 溝	幅　約 1.1m 検出長　3.6m 深さ　0.05～0.06m	埋土は１層のみで，流れによる推積層は見られない。 真南北	土師器皿・椀・甕，須恵器坏・坏 蓋・甕・壺など	西一坊第二小路の東側溝の可能性がある。(表注１)
ＳＫ3905	土壙	東西　1.44m 南北　1.26m	不定形な形状である。 遺物がまばらに散乱	土師器皿・(第40図3・4)坏(同1)須恵器坏Ｂ蓋(同7)坏Ｂ(同8)	遺物から，長岡京時代と推定
Ｐ3906	柱穴	東西　0.34m 南北　0.24m	東西に長い楕円形	土師器皿など	遺物が小片のため，時期を決めがたいが，長岡か平安と推定
Ｐ3907	柱穴	直径　0.22m	方形周溝墓3911の主体部の北東角と隣接する。	土師器皿(第40図2)他小片	遺物から長岡と推定
Ｐ3910	柱穴	東西　0.50m 南北　0.75m以上	不定形	〈須恵器坏蓋(第40図6)を混入〉土師器椀・甕など	古墳時代の須恵器坏蓋を出土するが，他の遺物から，長岡～平安か
ＳＢ3908	掘立柱建物	梁行　２間(東西) 桁行　３間(南北)	隅丸方形の掘方をもつ 梁行１間約180cm東西　N－4° 桁行１間約180cm・240cm南北　－W		南北方向に棟をもつ建物 出土遺物は，長岡京時代前後の遺物を，Ｐ4・Ｐ10等から出土。 方向は真北より少し西に向くが，長岡京に関する　のと考える。 付近の調査を待ちたい。 溝ＳＤ3904の中軸より，当建物の北西端(ＳＢ3908－Ｐ1)まで19m～20mの間隔がある Ｐ8－Ｐ9間は，2.4mで，他の柱間は，1.8mを測る。Ｐ2－Ｐ3の柱間は，これに対応する。Ｐ8－Ｐ9間と同じか。
Ｐ1	同上の柱穴	東西　0.56m 南北　0.56m以上	四隅が丸い方形 柱痕不明		
Ｐ3	〃	東西　0.44m 南北　0.40m	四隅が丸い方形 柱痕の直径18cm	土師器小片	
Ｐ4	〃	東西　0.58m 南北　0.62m	四隅が丸い方形 柱痕の直径32cm	土師器椀・坏・皿など	
Ｐ5	〃	東西　0.46m 南北　0.38m	四隅が丸い方形 柱痕不明	土師器小片	
Ｐ6	〃	東西　0.56m 南北　0.52m	四隅が丸い方形		
Ｐ7	〃	東西　0.60m 南北　0.58m	四隅が丸い方形 柱痕不明		
Ｐ8	〃	東西　0.60m 南北　0.60m	四隅が丸い不整台形 柱痕不明		
Ｐ9	〃	東西　0.54m以上 南北　0.52m	隅の丸い五角形 柱痕不明		
Ｐ10	〃	東西　0.42m以上 南北　0.56m	隅の丸い方形 柱痕の直径26cm深さ5cm	土師器甕など	
3909	古墳時代 方墳 南栗ヶ塚	北東－南西17.7m 北西－南東15.5m	北東－南西方向にやや長い方形に区画する溝を検出　N－43°－E	埴輪(第42・43図)	恵解山古墳との関係に，興味が持たれる。 旧小字名より，南栗ヶ塚古墳と名付ける。 恵解山古墳よりやや後出か。 乙訓地方の方墳は，新たに，小西古墳，塚本古墳が発見されており，意外と多くの方墳が存在したと思われる。(表注2)
北東溝	同上の周溝	幅　0.51m 検出長　5.66m 深さ　0.15m	中央部でやや細まり，南東に向かってやや深くなる。	〈土師器片を混入〉	
南東溝	〃	幅　1.0m 検出長　2.40m	方墳の４つの溝の中で最も幅広い北東，南西両溝に続くと思われる。	埴輪片(朝顔形埴輪など)	
南西溝	〃	幅　0.3～0.8m 検出長　11.0m	北西から南東方向に伸びる。	埴輪片(円筒・家形・朝顔形埴輪など)(須恵器，土師器片を混入)	
北西溝	〃	幅　0.9～0.75m 検出長　5.50m 深さ　0.43m	北東から南西に伸びる	〈土師器椀・高坏各小片を混入〉	
3911	弥生時代 方形周溝墓	北東－南西10.5m 北西－南東 8m	長方形をなす，中央部に中心主体部，南西に第２主体部？N－34°－E	供献土器と推定される壺４点他小片	供献土器と思われる壺が，北西溝に多く，南東溝に　一点検出された。いずれ　，溝底近くで出土。 埋土は基本的に３層に分層できる。 遺物から，畿内第Ⅱ様式(中で　い段階)と思われる。
北東溝	同上の周溝	幅　約1.20m 検出長　約5.70m 深さ　0.20～0.25m	ＳＤ3902に一部を切られる。北西から南東に伸びる。方形周溝墓3912の南西溝と共有	弥生土器壺・甕など	
南東溝	〃	幅　約 1m 検出長　約7.60m 深さ　0.30～0.40m	ＳＤ3902に一部を切られる。北東から南西に伸びる。	弥生土器壺・甕など	
南西溝	〃	幅　約 1.0m 検出長　6.50m	中央部でやや細まり，周溝墓3913の北西，南東の両溝を切る。	弥生土器壺(第47図３)	

付表６　右京第39次調査検出遺構観察表(2)

遺構名	時代・性格	規模	特徴	出土遺物	備考
３９１１ 南西溝	弥生時代 方形周溝墓 同上の周溝	深さ0.30～0.40m			北東隅に陸橋をもつ 当調査検出の方形周溝墓のうち、最大のものである。
北西溝	〃	幅　約1.10m 検出長　7.10m 深さ0.25～0.30m	北東部から南西部にかけて幅が広がる。中央部と北部において壺が出土。	弥生土器壺（第47図１・７、第48図８）	
中心主体部	同主体部	幅　0.77m 長さ　1.58m 深さ　0.10m	長方形を呈する。木棺と思われる痕跡を残す。	石鏃（第50図）	台状部の中心やや北より長軸に平行して、当主体部の長軸がある。
第２主体部	同主体部	幅　1.20m 長さ　2.10m 深さ　0.30m	いびつな長方形をなす。 ２体埋葬か。 木棺痕跡を残す。	――	中心主体部の南にある。 長軸はほぼ平行。
３９１２	弥生時代 方形周溝墓	北西－東南 6.8m 北東－南西 4.2m	北西－南西方向に、長い長方形 N－31°30′－E	――	北西溝と北東溝は、土壙状に痕跡をとどめるのみ。 いずれの周溝も残存状況がわるく、非常に浅い。 遺物が皆無であるため、時期不明。
南東溝	〃	幅　0.5m 検出長　7.4m 深さ　0.05m	北東部から南西部にかけて、徐々に深くなり、南西端部において周溝墓3911の北東溝に切られる。	――	
南西溝	〃		方形周溝墓３９１１の北東溝と共有する。	――	
北東溝	〃	幅　0.5m 長さ　0.7m	細長く土壙状を呈する。 非常に浅く、溝がわずかに残る。	――	
北西溝	〃	幅　0.4m 長さ　1.2m 深さ　0.1m	長楕円の形状を呈する。 非常に浅く、溝がわずかに残ったものと思われる。	――	
３９１３	方形周溝墓	北西－東南　4m 北東－南西3m以上	南西溝が検出されていないため北東-南西の距離不明。N-42°-E	――	北西溝が最も深く、掘られている。 出土遺物がないため時期不明。
北東溝	〃		方形周溝墓３９１１の南西溝と共有する。	――	
南東溝	〃ュ	幅　0.3m 検出長　2.4m 深さ　0.08m	北東から南西方向に向かって伸びしだいに細くなり、消滅する。	――	
北西溝	〃	幅　0.6m 検出長　1.4m 深さ　0.2m	南東溝よりも多少幅が広い。	――	
３９１４	方形周溝墓	北西－南東 5.5m 北東－南西 9.3m	北東－南西方向に長軸をもつ。 N－60°－E	――	方形周溝墓３９１６より新しい。 当調査地検出の方形周溝墓中、規模は第２位。東部隅と西部隅に陸橋を有する。 山陽地方に特有な形態の甕を、周溝内より出土。 被葬者との関係が興味深い。 出土遺物は、山陽地方の千代田Ⅱ式甕形土器と共通する。
北東溝	〃	幅　1.4m 検出長　5.3m 深さ 0.2～0.25m	方形周溝墓３９１４の溝の中で最も幅が広く、中央部から方形周溝墓3915の南西溝に分かれる。	弥生土器、壺小片	
南東溝	〃	幅　0.95m 検出長　7.3m 深さ0.22～0.26m	溝幅はほぼ一定で、北東端部に陸橋部をもつ。	弥生土器小片	
南西溝	〃	幅　1～1.5m 検出長　5m 深さ　0.4～0.5m	中央部で南西方向に突出し、溝幅は一定していない。	弥生土器、壺小片	
北西溝	〃	幅　約１m 検出長　8.6m 深さ　0.3～0.4m	南西端部付近が最も深く北東部に向かってやや浅くなる。溝幅は一定ではなく中央部が最も広い。南西部に陸橋をもつ。	弥生土器	
３９１５	方形周溝墓	北西－南東 4.5m以上 北東－南西 ３m以上	北東溝、南東溝が、確認できなかったため、形態不明。 N－52°30′－E	――	北東部、南東部が不明なため、規模不明。 出土遺物は、小片のため時期不明。
南西溝	〃	幅　0.7m 検出長　4.5m 深さ　0.2～0.3m	北東部はトレンチの外に出る。	弥生土器小片	
北西溝	〃	幅　0.3m 検出長　2.7m 深さ　0.15m	周溝墓３９１４の北東部の溝と中央部で接し、南東部はトレンチの外に出る。	――	
３９１６	方形周溝墓	北西－南東 5.5m以上 北東－南西 5.5m以上	検出状況が不明確なため、形態不明。 N－52°－E	――	方形周溝墓３９１４の南東溝が、当墓北東溝を切っていることにより、当墓の方が古いと考える。
北東溝			方形周溝墓３９１４の南西溝と共有する。	――	
南東溝	〃	幅　約1.2m 検出長　3.7m 深さ 0.25～0.3m	北東端部は、ＳＤ３９０３に切られる形であり、南西部に伸びる。	――	

（表注１）　当溝の中心座標（国土座標）は、以下のとおり、
X＝－120,785.500
Y＝－27,238.000

（表注２）　小西古墳は、右京第72次（７ＡＮＧＫＳ地区）の調査で、発見されている。
塚本古墳は、長岡京市内遺跡立合第8104次調査で確認されている。白川成明他、「昭和56年度長岡京市内遺跡立合調査概要－長岡京跡第8104次（７ＡＮＫＨＴ地区）立合調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第９冊1982長岡京市教育委員会。

付表7　右京第39次調査出土遺物観察表(1)

器種	器形	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	番号	器形の特徴	手法の特徴	質	焼成色調	個数	備考
		( ) 残存高								
ＳＫ３９０１										
瓦器	椀	12.8	3.7	3	○体部は大きく内弯し端部は丸い。高台は断面三角形。器壁はうすい。ひずみがある。	○口縁部から体部上半をナデ調整する。体部下半指オサエ。貼りつけ高台。	良好	内面灰白色 外面淡黒色～灰白色	2	磨滅する
		13.5	3.8	4						
白磁	碗	16.7	6.7	1	○口縁部を折り返して玉縁とする。端部外面は丸みをもつ。器壁はうすい。体部は直線的にのびる。焼けひずみがある。	○体部のヘラケズリが稜として残る。	精良	淡緑灰色	1	
	碗	18.2	(4.6)	2	○口縁部を折り返して玉縁とするが、ナデがつよく直線的にのびる。器壁はやや厚い。		精良	淡緑灰色	1	
ＳＤ３９０２										
土師器	皿A大	13.0～15.2	1.4～2.4	12～20	○口縁部は外反し、端部を内側へ肥厚させる。	○体部外面を指オサエ。口縁部内外面を横ナデ、体部内面をナデ調整する。	良好	淡灰色	9	灯火器として、使用したものがある
	皿A	8.7～11.2	0.9～1.7	1～9	○皿Aの小型	○皿Aと同じ	良好	淡灰色	9	
	皿B	12.2～14.4	1.4～2.7	21～32	○口縁部は外反ぎみに上方へひらく。	○体部外面を指オサエ。口縁部内外面を横ナデ、体部内面をナデ調整する。	良好	淡灰色	12	
	皿B	10.6～10.8	1.0～1.3	10·11	○皿Bの小型	○皿Bと同じ	良好	淡灰色	2	
須恵器	皿	11.2	1.8	33	○平底の底部からゆるく上方へひらく。端部は丸くおさめる。	○口縁部、体部内外面ともロクロナデ調整する。底部は糸切り。	良好	灰色	1	
	坏B	底径 8.4		34	○高台は直線的にのびる。	○貼りつけ高台。内面はロクロナデ調整。外面はヘラ切り後ナデ調整する。	良好	灰色	1	
緑釉陶器	椀	底径 8.6		35	○底部内面を凹ます。高台内面に浅い沈線が、円周にそって残る。	○貼りつけ高台。	硬質	内外面とも緑灰色の釉をかける。	1	
灰釉陶器	椀	底径 5.3		36	○高台は断面三角形状を呈し、外方へ少しはり出す。内面に釉が、うすくかかる。	○貼りつけ高台。内外面とも、ロクロナデ調整する。	精良	淡灰色	1	
須恵器	椀	15.8	(7.0)	37	○口縁端部は外方へ若干ひらく	○体部下半部に沈線。底部に高台が、はがれた痕跡をとどめる。底部外面ナデ調整。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がある。	良好	灰色	1	水びき成形か？
黒色土器	皿	10.3	1.3	38	○平底の底部から内弯	○口縁から体部内外面にかけてナデ調整。		暗茶灰色	1	
	椀	10.4	4.1	39	○高台は断面三角形状を呈する ○焼けひずみがある。	○内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。底部のみ一方向のヘラミガキを行う。口縁部内面に一条の沈線がある。貼りつけ高台。	良好、長石粒を含む石英	黒色	1	
	椀	15.6	(4.4)	40	○口縁部は横ナデ調整により、やや外反する。	○内外面ともヘラミガキを施す。口縁部内外面を横ナデ調整する。	良好石英長石粒を含む	黒灰色	2	
		16.0	(4.4)	41						
ＳＫ３９０３										
無釉陶器	皿	底径 6.5	(2.2)	9	○削り出しによる蛇の目高台。内面を浅く凹ませる。	○内面は仕上げナデを行う。	精良	淡青灰色	1	
ＳＤ３９０４										
土師器	甕	15.6	(5.7)	5		○外面をヘラケズリし、内面をナデ調整する。	良好	黒色化している。	1	
ＳＫ３９０５										
土師器	椀	15.4	3.8	1	○平坦な底部から、わずかに内弯しながら立ちあがる。 ○口縁端部は内側に肥厚する。	○外面をヘラケズリし、内面をナデ調整する。	良好	赤褐色	1	
	皿	21.6	2.7	4	○平坦な底部から、わずかに内弯しながら立ちあがる。	○外面をヘラケズリした後、内面をナデ、体部上半部のみ横ナデ調整する。	良好	淡褐色	1	
須恵器	坏B	13.8	4.2	8	○高台部は外方へふんばる。 ○体部は直線的にのびる。	○貼りつけ高台。内面はロクロナデ調整。外面はヘラ切り後ナデ調整する。	良好	淡灰色	1	
	蓋	16.1	(1.3)	7	○扁平で低い器高、端部は丸くおさめる。	○口縁端部から体部内外面をロクロナデ調整する。 ○体部外面はヘラ切り後、ナデ調整する。	良好	淡灰色	1	

付表８　右京第39次調査出土遺物観察表(2)

器種	器形	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	番号	器形の特徴	手法の特徴	質	焼成色調	個数	備考
		P 3906								
土師器	皿	21	2.7	3	○平坦な底部から、わずかに内弯しながら立ちあがる。 ○口縁部は内側に肥厚する。	○外面をヘラケズリした後、内面をナデ、体部上半部のみ横ナデ調整する。	良好	赤褐色	1	
		P 3907								
土師器	坏	18.5	(3.3)	2	○平底の底部から、わずかに内弯しながら立ちあがる。	○外面をヘラケズリする。 ○内面は磨滅し、調整不明。	良好	淡褐色	1	
		P 3909								
埴輪	円筒	底径 13.6	(23.8)	1	○粘土紐のつぎ目が、部分的に残る。底部にセンイ状の圧痕をとどめ、基底部に粘土紐のつぎ目を残す。スカシ孔あり。	○タテハケの後ヨコハケ。ヨコハケは左回りで５回のつぎ目をとどめる。	硬質	赤褐色	1	タガは３本か？
	朝顔	26.3	(20.3)	2	○頸部は、三角形の突帯をはりつけ内面を指オサエする。口縁部は外反し端部をつまみ上げる。二重口縁状にひらく口縁部は下に凹面、上に凸面をつけて接合する。スカシ孔あり。	○口縁から頸部タテハケ、体部ヨコハケ。内面は口縁部$\frac{1}{2}$をヨコハケ。	硬質	赤褐色	1	タガは３本か？
	円筒	20.4	(6.5)	3	○口縁端部は外側へ折り返し、平坦な面をもつ。	○内外面とも粗いハケ。	硬質	暗茶灰色	1	１とセットになると思われる。 タガは３本か？
		P 3910								
須恵器	蓋	10.5	3.7	6	○口縁部から天井部まで丸く仕上げる。	○天井部の$\frac{1}{3}$をヘラケズリし、内外面ともロクロナデ調整する。	良好	淡灰色	1	

器種	器形	番号	()復元法量 口径(cm)	()復元法量 器高(cm)	器形・手法の特徴 口縁部	器形・手法の特徴 体部	器形・手法の特徴 底部	胎土	焼成	色調	備考
		3911									
弥生土器	壺	1	17.5	32.7	○口縁部はやや外反し、端面は外傾する。	○内面に植物質の粗いハケが残る。櫛描直線文は４条１組で５帯施文する。	○ハケは、タテ方向で最後にナデる。	赤色粒、石英、チャート等。	良好	淡褐色	畿内的要素が強い。
	壺	2	19.5	(41.8)	○端面に２本の櫛描直線文を施す。	○櫛描直線文は６条と４条を交互に６帯。最下部のみ８条施文する。	○内面調整不明。外面ナデ。	赤色粒、石英φ４mm以下。	良好	赤褐色	
	壺	3	21.2	(34)	○端面に一条の沈線。その上に刻み目。	○櫛描直線文は５条１組で９条施文する。体部中ほどに黒斑がつく。外面に粗いハケメを残す。		石英他φ５mm以下。	良好	淡赤褐色	
	甕	4	7.0	底径			○内外面ともナデ。	石英、長石粒他	良好	茶灰色	
	甕	5	6.4	底径			○２～３mmのハケ。	石英、長石粒他	〃	赤褐色	
	甕	6	9.2	底径			○植物質の細いハケ。	石英、長石粒他	〃	淡褐色	
	甕	7	10.2	底径			○剝離し調整不明。	石英、長石粒他	〃		
	壺	8	39.2		○端部外面の斜方向のハケの上に突帯を接合し、指オサエのあと刻み目を施す。 ○突帯はさらに１本あり、全部で４本になる。 ○体部に黒斑がつく。	①粗いハケメ（タテ方向）を施す。 ②中央の突帯部分にヘラミガキを施す。 ③櫛描直線文を施す。 ④ヘラ描沈線を施す。 ⑤突帯をはりつけ、刻み目を入れる。		赤色粒、長石、石英他最大φ６mm以下	良好	淡赤褐色	
		3914									
弥生土器	甕	1	27.5		○文様帯の下に炭素が吸着する。	○櫛描波状文５条の上に直線文３条、下に５条施す。		赤色粒、長石他。	良好	淡灰色	山陽地方（おそらくは播磨）の地方色が濃厚。 中山Ⅱ～Ⅲ式並行期か。
	甕	2	体部最大径 20.2		○外方へ三角形に鋭く突出し、水平な端面をなす。	○櫛描直線文（５条）を施す。		長石、石英他。 赤色粒	良好	灰白色	
	甕	3	6.8				○内外面とも剝離し、調整不明。	〃	良好	淡灰色	

5．ま　と　め

京都盆地のなかで，桂川右岸には，弥生時代の遺跡数は39遺跡に昇り，発掘地点も80ヶ所を越えている。このうち，墓域もしくは，単独の墓が検出された遺跡には6遺跡があり，当遺跡もそのひとつに加わることとなった。これらの大多数は方形周溝墓であり，他に土壙墓，壺・甕棺墓がある。弥生時代中期のものは，古市森本遺跡[6]と神足遺跡[7]，今里遺跡[8]で確認されている。これに加えて当遺跡も，弥生時代の中期墓制のありかたを考える上で，重要かつ良好な資料といえる。

当遺跡では，検出された方形周溝墓のうち，比較的大型のもの（3911と3914）を中心に，それぞれ北東・南西両方向に，周溝の一辺を共有しあって群をなしている。これらは，3911を中心とする北群と，3914を中心とする南群の2群に分けることができ，しかも，ほぼ同時期に構築されたものである。3911の場合，周溝内に供献土器が認められた。そのいずれもが壺類である。これに類似したあり方を示すものとして，高槻市安満遺跡[9]が著名であるが，当地方では，神足遺跡がある。ただ，神足遺跡の場合，周溝を共有しない中期前葉の東群と，比較的大型の2基（1号墓，2号墓）を中心として，周溝を共有し合う中期前半の西群とに分かれており，少し様相を異にする。周溝内に，供献土器をもつものがあることは，当遺跡と同様であるが，神足遺跡では，周溝内に壺棺を安置したものがあり，東大阪市瓜生堂遺跡[10]などに類例がある。また，石剣や石鏃の他，石斧，石包丁等の生産具が含まれている点は，一般的なありかたとは異なっている。ともあれ，安満遺跡や和泉市池上遺跡[11]等で検出されているように，畿内で弥生時代前期に成立した方形周溝墓の墓制が，少なくとも中期初頭には（あるいは前期の段階[12]で）当地方にも波及し，家長クラス以上の墓[13]として一般化していたことが確実となった。また，神足遺跡では，方形周溝墓群と隣接した所に，木棺墓や土壙墓[14]による葬法がおこなわれていた。そして，これらには，供献土器も見られず，群として検出された。当遺跡の場合も，土壙墓群が隣接地に想定できるが，周辺地の調査をまちたい。さらに，方形周溝墓がほぼ同時期に2群ある点についても，住居との関連なくしては，理解できないであろう。

土器についてみると，方形周溝墓3911の供献土器（第47・48図）は，当地方における畿内第Ⅱ様式単純資料として，良好なものである。山城盆地の弥生土器編年とその内容については，まだまだ遅れており，その点でも，この資料は重要なものといえよう。ここでは，私見を略記するにとどめたい。

京都盆地における，畿内第Ⅱ様式段階の資料は，京都市山科区中臣遺跡[15]，伏見区深草遺跡[16]が標式遺跡とされている。中臣遺跡の資料は，畿内第Ⅰ様式段階に比して，地方色が濃厚に認められる。たとえば，壺形土器には，頸部から胴部に至るまで，単体構成の櫛描き直線文を施しこの下に櫛描き波状文を施したものがあるが，これには櫛描き文施文前のタテハケがそのまま

残されており，口縁端部を水平とせず，不整波状口縁とでも表現できるものがある。甕形土器には大和型の甕がある。この他畿内中心部や瀬戸内沿岸にはない形態のものがみられる。またこれに続く深草遺跡の資料には，明らかに琵琶湖地方の影響が見受けられる。さて，当遺跡（方形周溝墓3911）の資料は，畿内的要素が強く，全体のプロポーションと櫛描き直線文の施文位置，その施文前のヘラ磨き等は，畿内中心部のものとよく合致する。口縁部は端面に２条の櫛描き直線文や刻み目文を用いている。口縁端部の特徴は，すでに前期中～新段階で当地方にもみられ，雲宮遺跡や鶏冠井遺跡にも，比較的多く見ることができる。また櫛描文原体は，厚みのある深いものを用いており，条間にも幅がある。また，粗い櫛描文原体を使用していることは，畿内第Ⅰ様式にみられる沈線文の系統を引くものであろう。体部から口縁部まで，なだらかに移行する特徴は，畿内第Ⅰ様式新段階の壺ｂ形態をついでいる。これらの諸要素から，畿内第Ⅱ様式でも，古い段階のものと考えている。また，当遺跡の方形周溝墓3914出土の甕も併行期と考えている。この甕２個体は，広島市中山遺跡の中山Ⅱ・Ⅲ式[17]や姫路市千代田遺跡の千代田Ⅱ式土器[18]等にみられ，播磨の特徴をもつものである。これらに続くものには，古市森本遺跡のＳＤ1707や，神足遺跡の方形周溝墓群があげられる。

弥生時代の遺物整理が進むにつれ，乙訓地方の弥生土器，ひいては弥生社会のベールが，ようやく剝がされようとしている。今後の発掘調査によって，弥生時代の集落や水田遺構なども，時を追って発見されるであろう。

当遺跡は，弥生時代のみならず，方墳，平安時代の溝等が検出されているが，ここに全てをまとめることはできなかった。そこで別の機会すなわち周辺地の発掘調査報告の際に，一括してまとめる機会をもちたい。

注１）現地調査は，以下の方々に協力を得た。

橋本清一　岩崎沢市郎　梅村修　木下栄太郎　高橋治一　中川安太郎　渡辺丈俊　岩松保　上坂昇　小川忠夫　小熊秀明　高島登　滝本直人　辻林磨宏　常田博　中村保彦　広瀬高彦　松尾隆志

２）山本輝雄「恵解山古墳第３次発掘調査概要（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第８冊（1981）』昭和56年３月）

３）橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」（高槻市教育委員会『高槻市文化財調査報告書第13冊（1980年２月）』昭和55年２月）

４）川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第２・４号，昭和53・54年）

５）平良泰久・伊野近富他，「平安京跡左京内膳町昭和54年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980）』昭和55年３月

６）岩崎誠「（仮）古市保育所建設にともなう発掘調査概要ー長岡京跡左京第17次調査（７ＡＮＭＭＴ地区）」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第５冊（1980）』昭和55年３月）

７）山本輝雄「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要ー長岡京跡右京第10・28次調査（７

ＡＮＭＭＢ地区)」(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書第５冊（1980)』昭和55年３月)

8）浪貝毅「発掘と調査」（日本考古学協会『日本考古学年報』21・22・23　1968～1970年度版)

9）大阪府教育委員会，高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査概要』
原口正三「稲作と鉄器の時代」（高槻市史編纂委員会『高槻市史』本文編１昭和52年)

10) 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』Ⅰ～Ⅲ，資料編
財団法人大阪府埋蔵文化センター『瓜生堂』

11) 第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池1970』

12) 古市森本遺跡の場合，周溝内より中期前葉の遺物とともに，前期新段階の遺物も出土していることから，畿内第Ⅰ（新）様式段階で構築された可能性もすてきれない。

13) 大塚初重，井上裕弘「方形周溝墓の研究」(『駿台史学』24　昭和44年)
都出比呂志「農業共同体と首長権」（東京大学出版会『講座日本史』１　昭和45年)

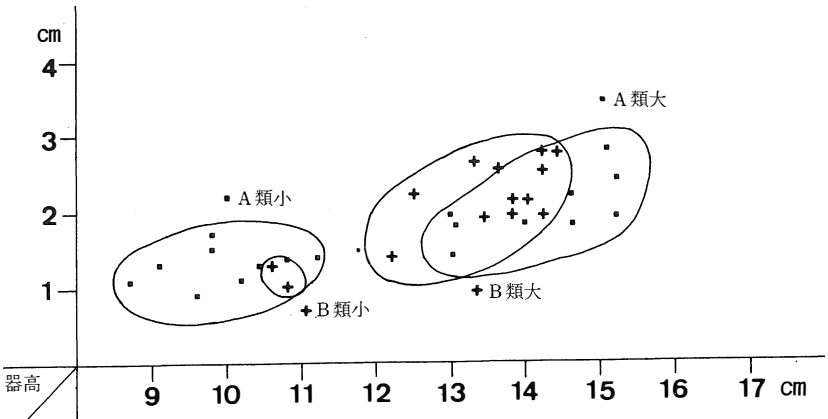
14) 神足遺跡の調査で検出された土壙には長方形の平面形をなし，木棺の痕跡を残すものがあり，木棺墓と考えられるものと，楕円形で，直葬と考えられるものがある（注７)。

15) 京都市調査成果交流会関係機関の努力により実見できた。記して感謝したい。

16) 杉原荘介，大塚初重「京都深草遺跡」（日本考古学協会『日本農耕文化の生成』昭和36年３月)

17) 松崎寿和，潮見浩「広島県中山遺跡」(日本考古学協会『日本農耕文化の生成』昭和36年３月)

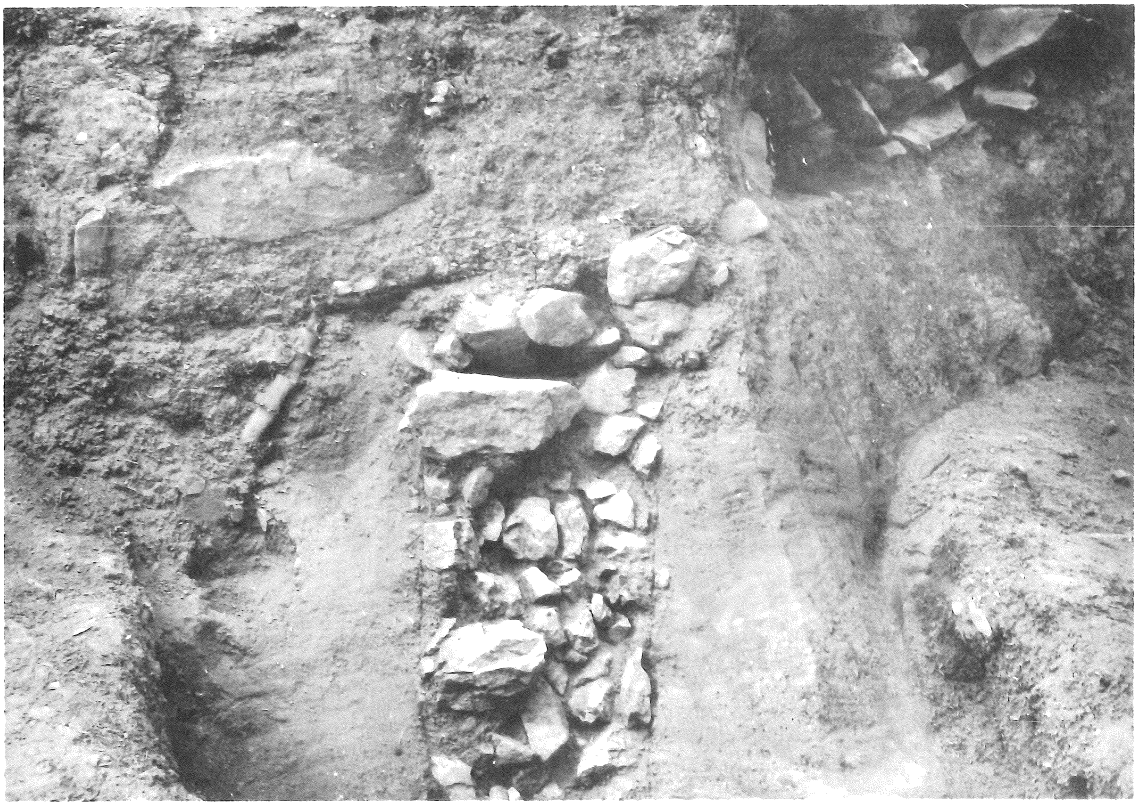
18) 杉原荘介，小林三郎「兵庫県千代田遺跡」（日本考古学協会『日本農耕文化の生成』昭和36年３月)



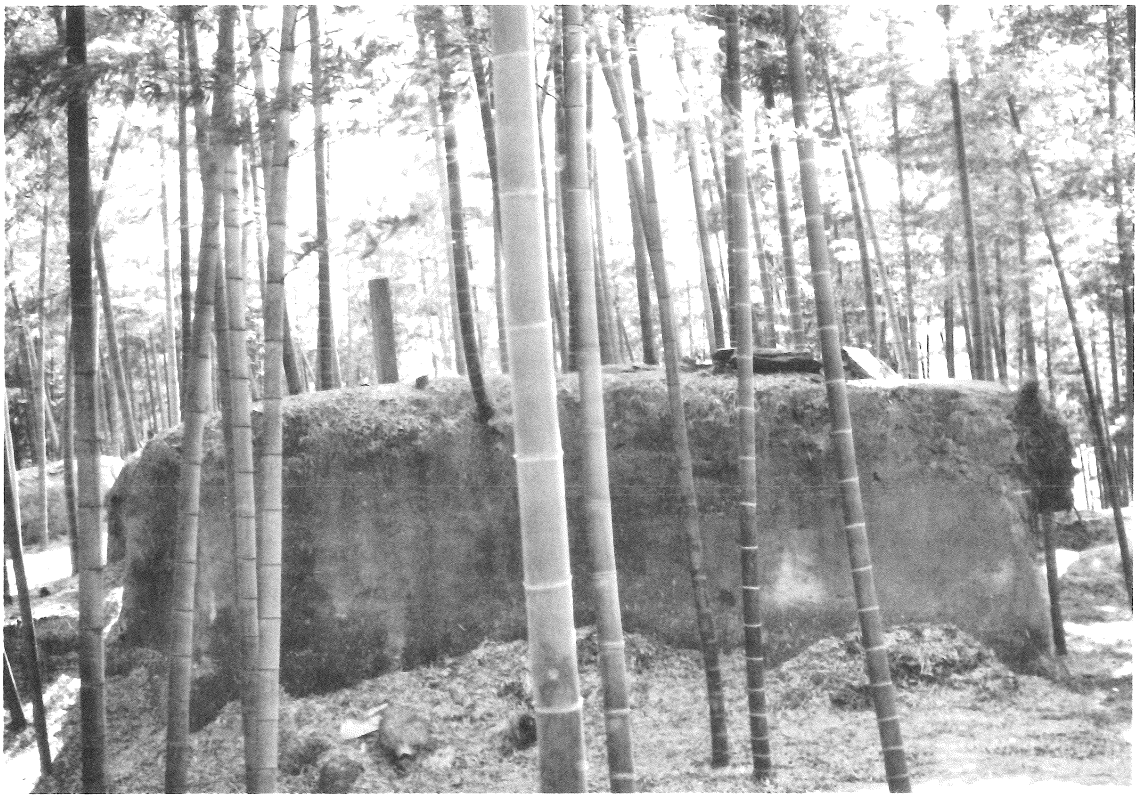
付表９　ＳＤ3902出土遺物高径指数表

図　　版

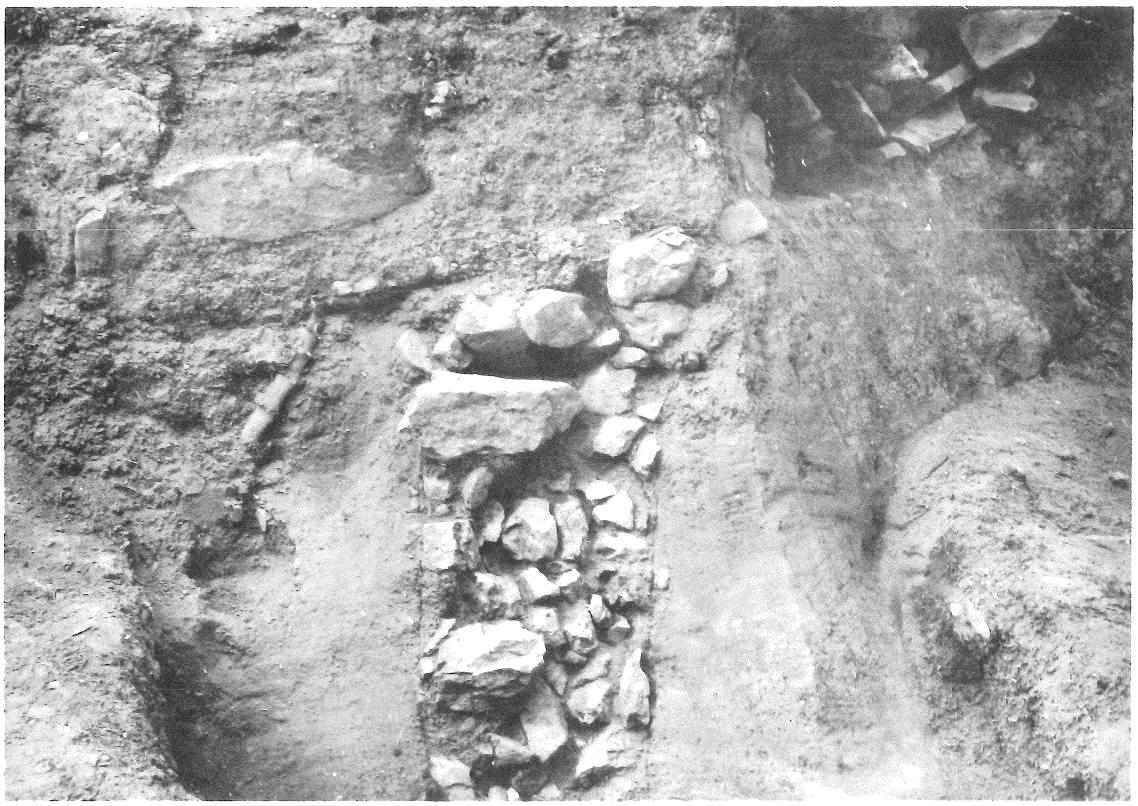
1　墳頂部石室残存部分(北から)



2　石室の控積と排水溝(南から)

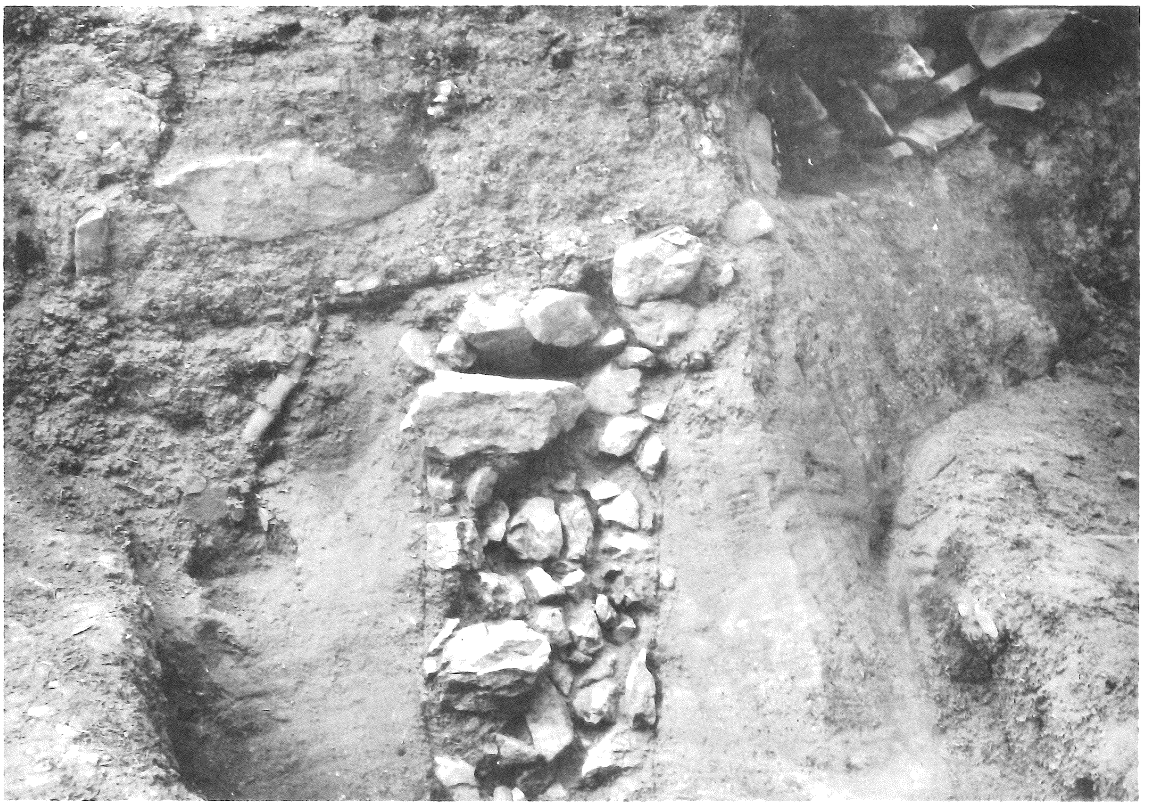


1　墳頂部石室残存部分(北から)



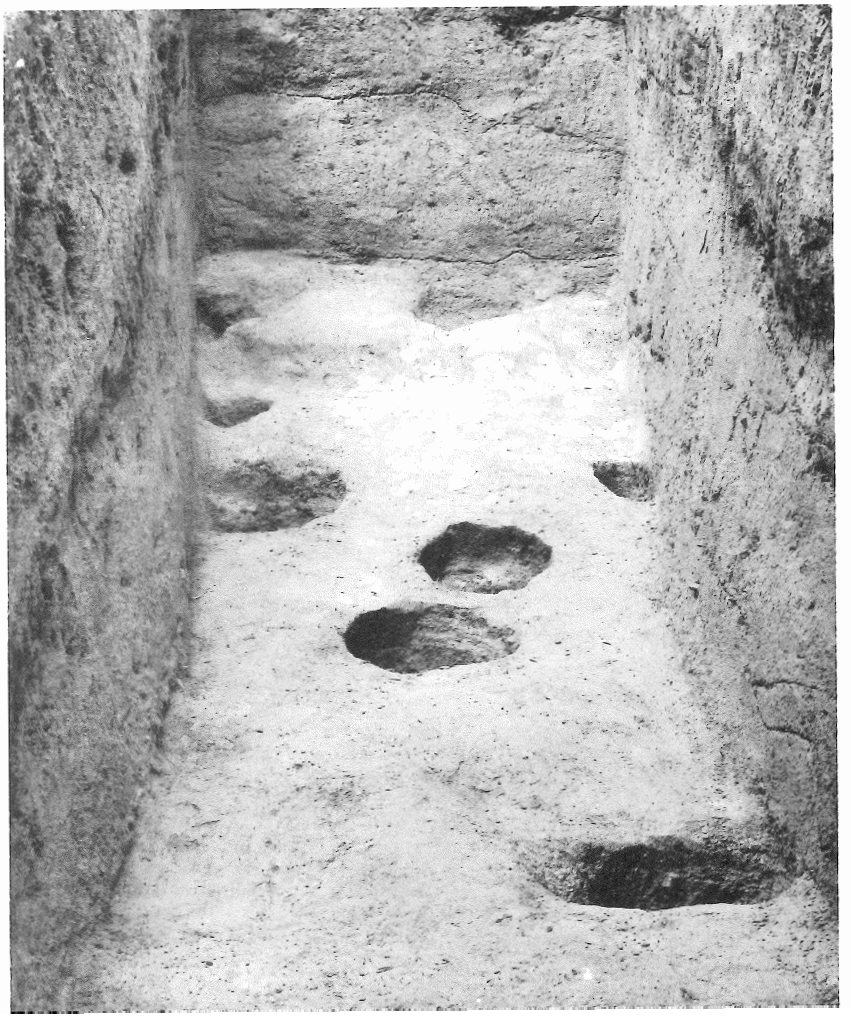
2　石室の控積と排水溝(南から)

1　墳頂部石室残存部分(北から)

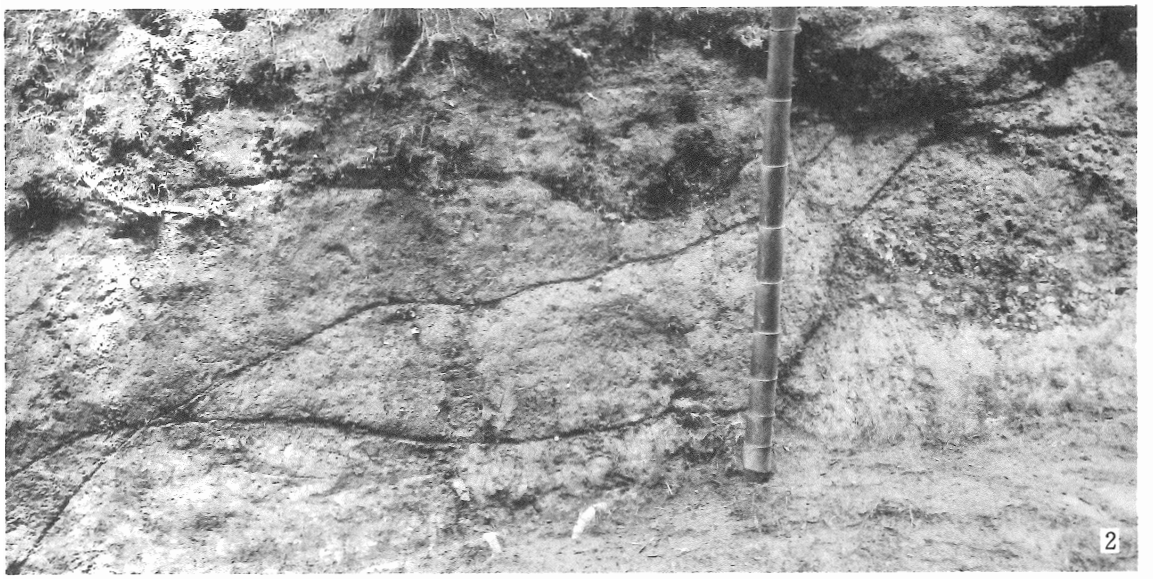


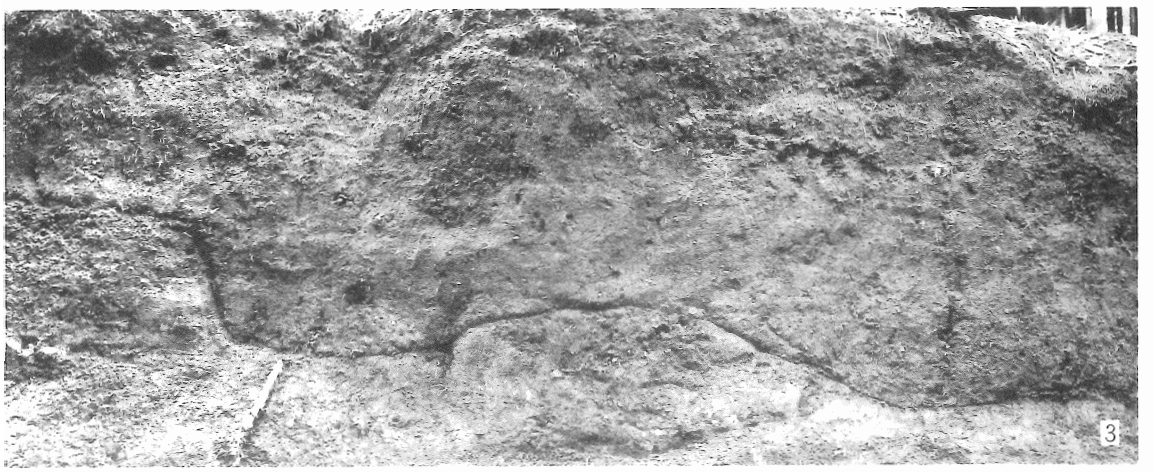
2　石室の控積と排水溝(南から)

1　石室の控積(東から)

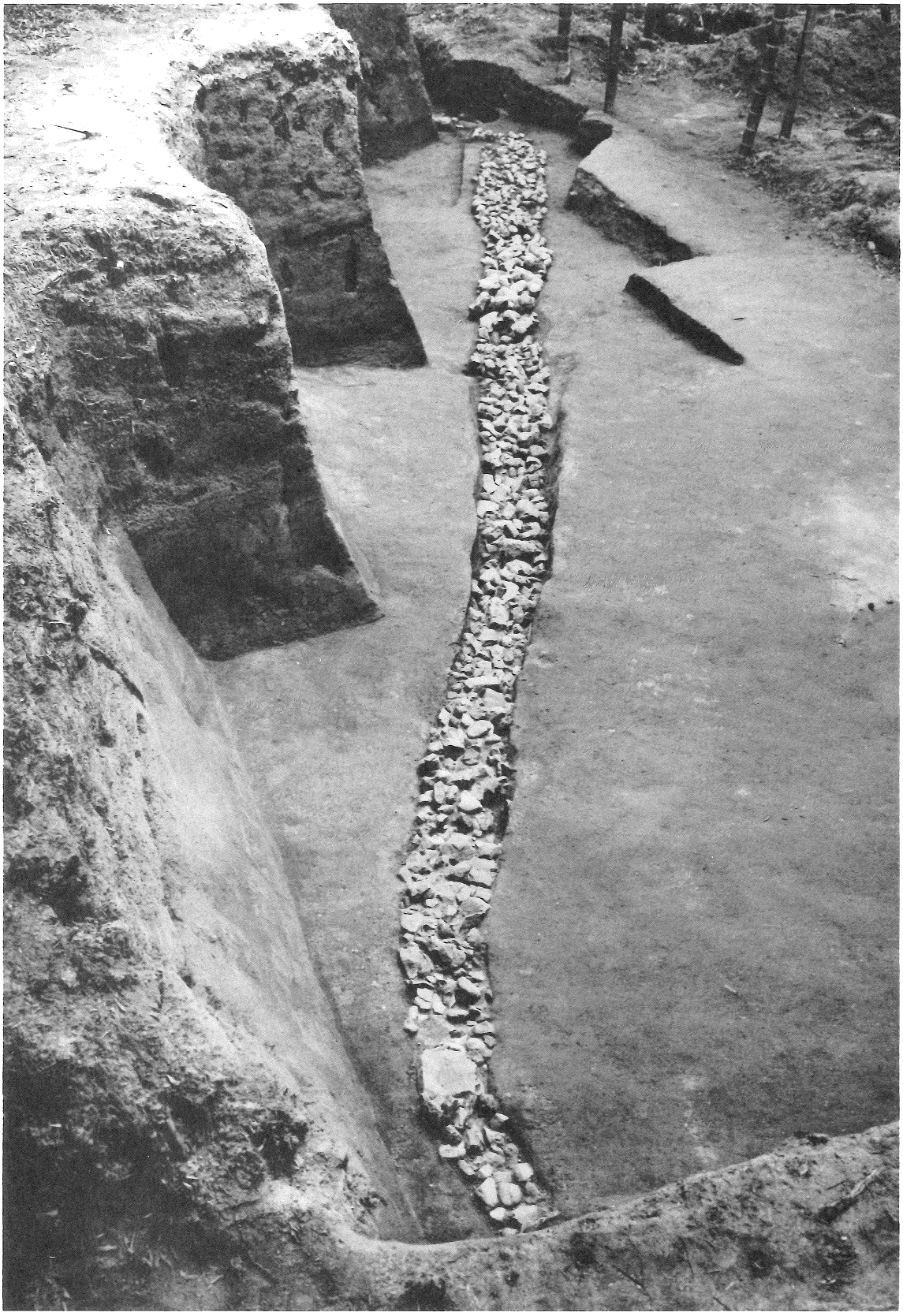


2　Aトレンチの柱穴群
(東から)



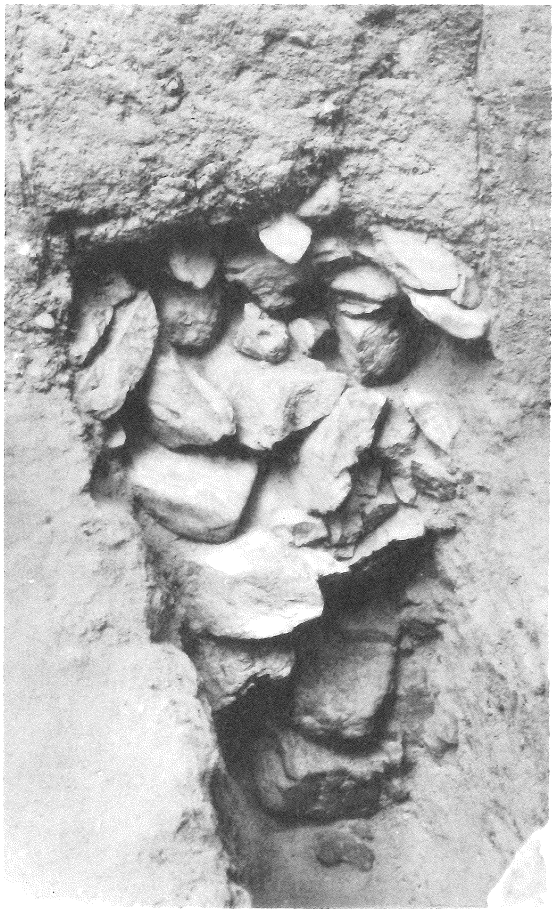


1　Eセクション、2　D区北壁西端部，3　D区東壁



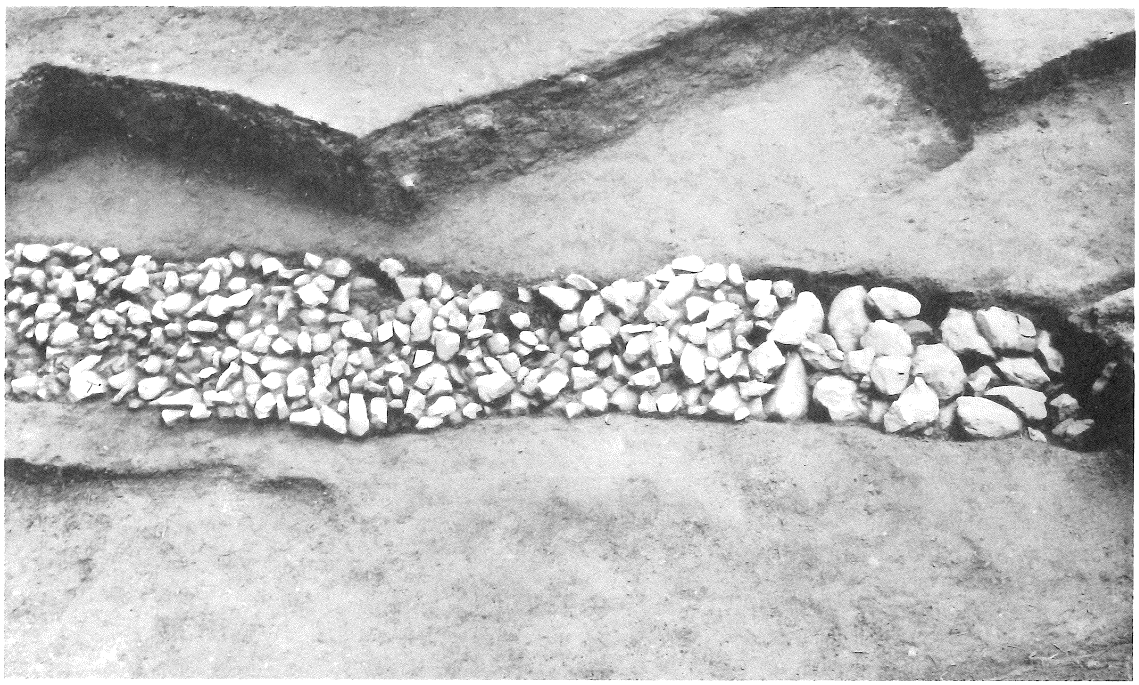
排水溝(北から)

排水溝（南から）



1　排水溝北端断面

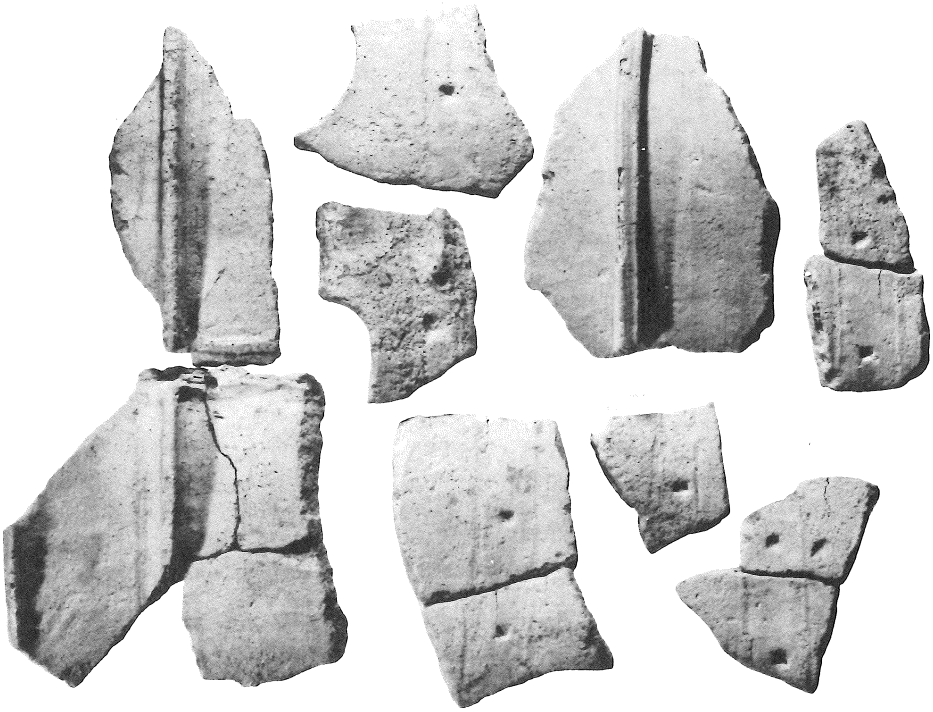
2　排水溝中央部断面



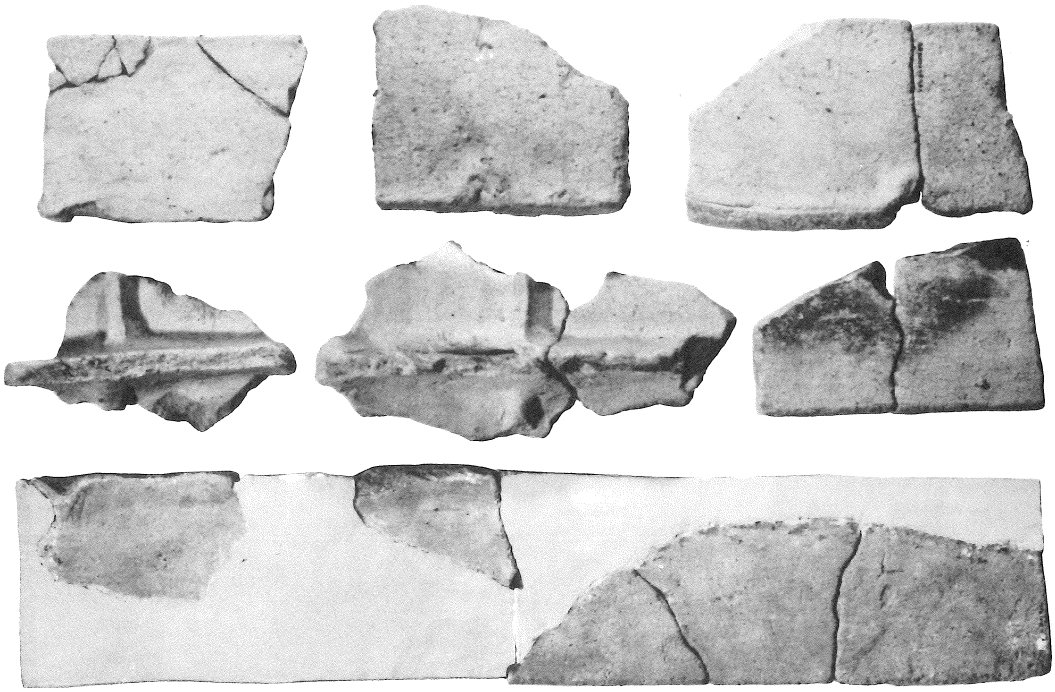
3　排水溝南端付近（東から）

1　円筒埴輪（B1）

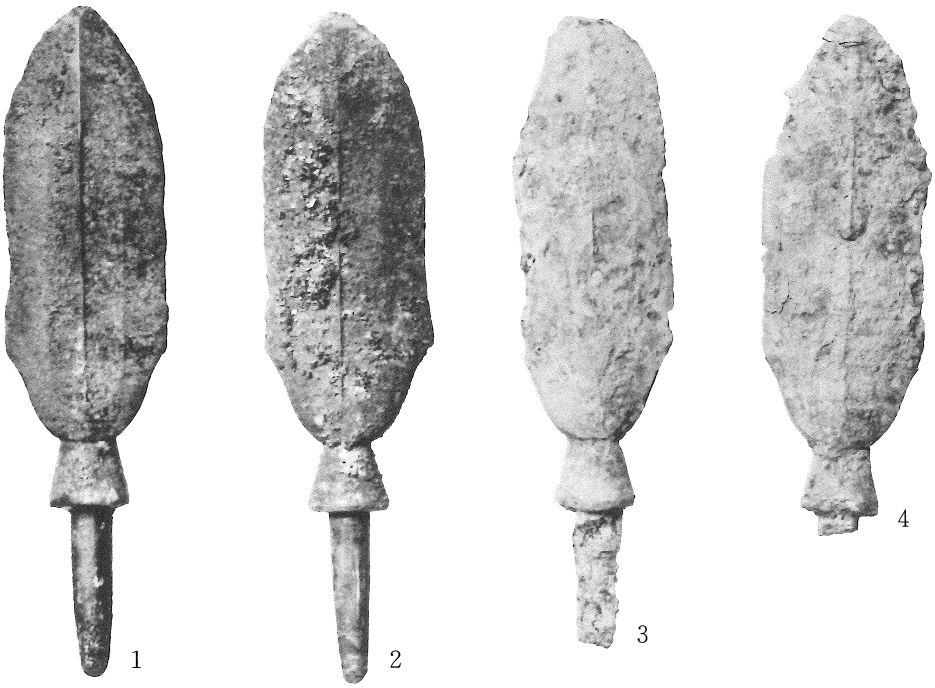
2　円筒埴輪（B2）



1　円筒埴輪　細部

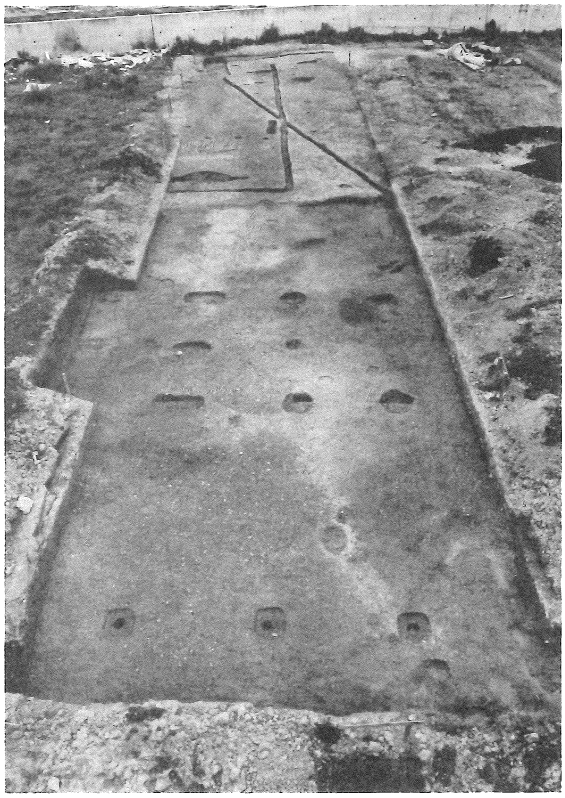


2　円筒埴輪　ヒレ部

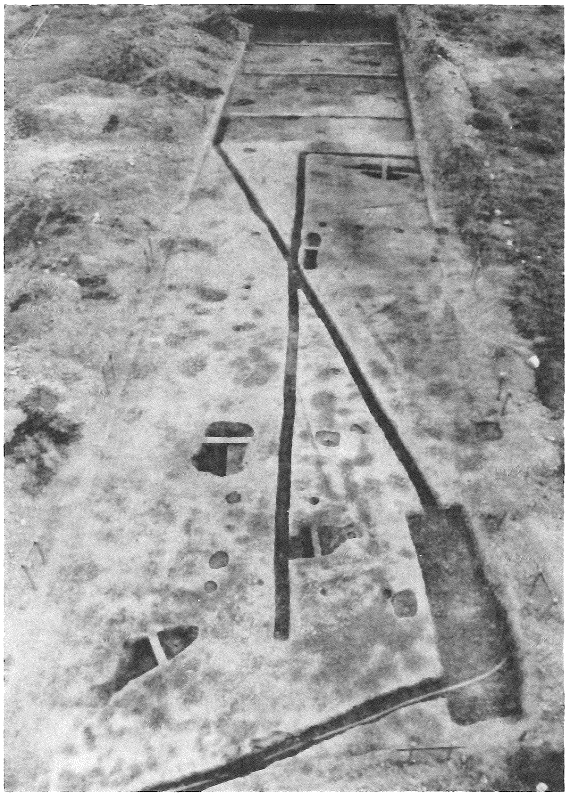


1　銅鏃（1　長法寺南原古墳，2　伝長法寺古墳，3・4　松岳山古墳）

2　円筒埴輪底部（H 9）



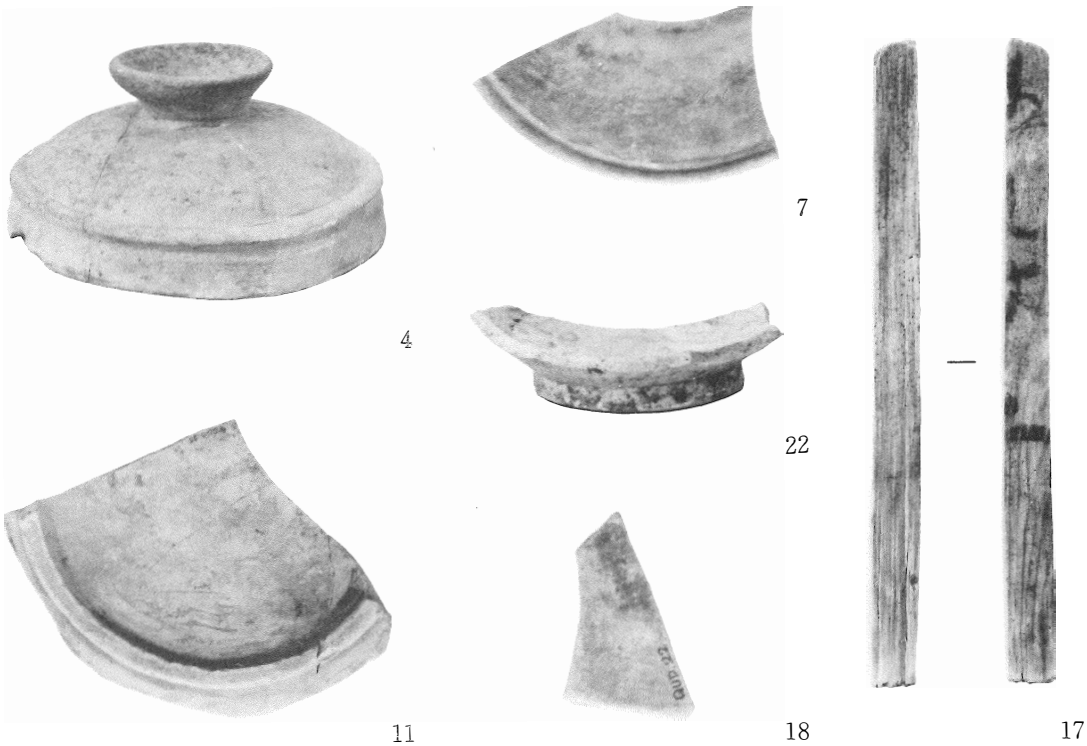
1　第1トレンチ全景(南から)



2　第1トレンチ全景(北から)

3　第1トレンチ検出遺構（掘立柱建物　SB9401・SB9402，柵列　SA9403　南から）

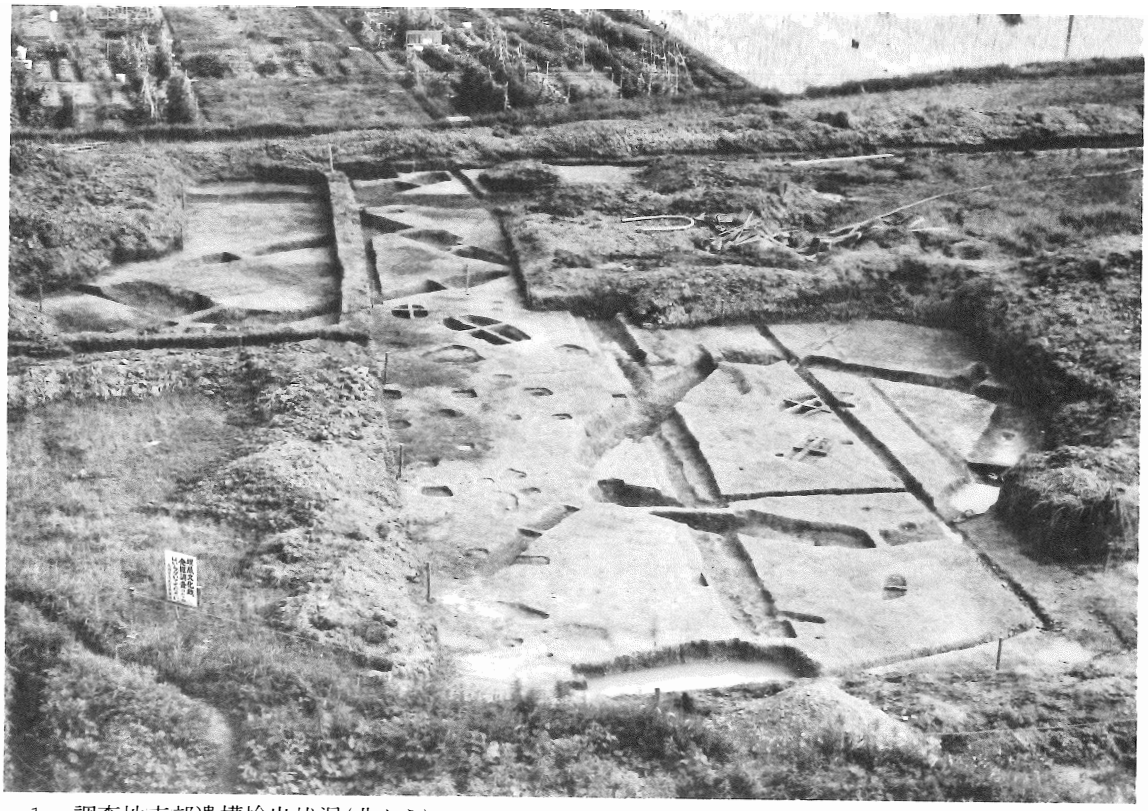
1　第２トレンチ全景(南西から)



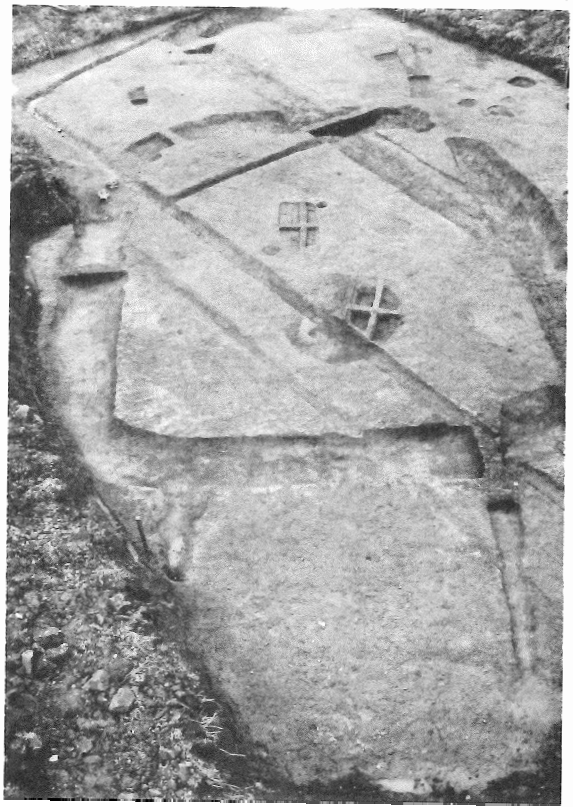
2　第１・２トレンチ出土遺物

1　調査トレンチ全景(東から)

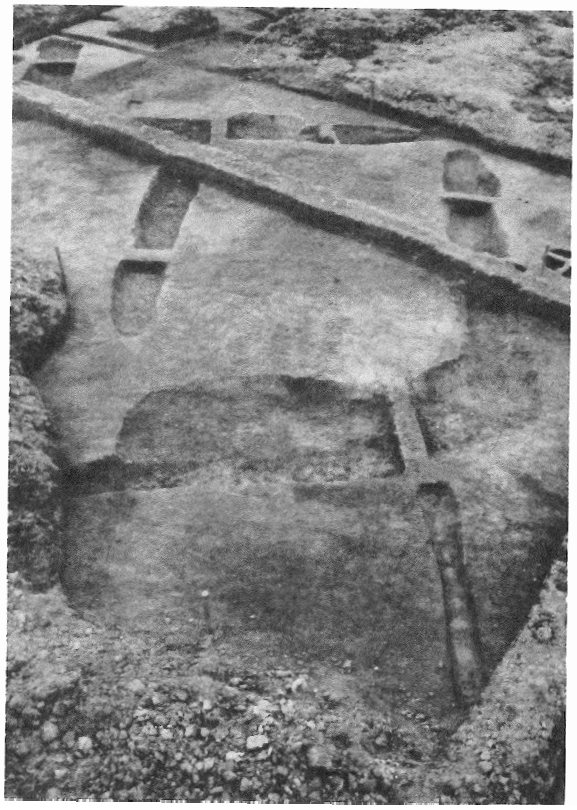
2　Aトレンチ全景(西から)



1　調査地東部遺構検出状況(北から)

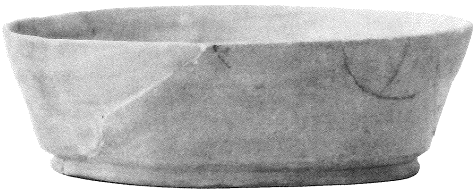


2　方形周溝墓　3911



3　方形周溝墓　3914

1



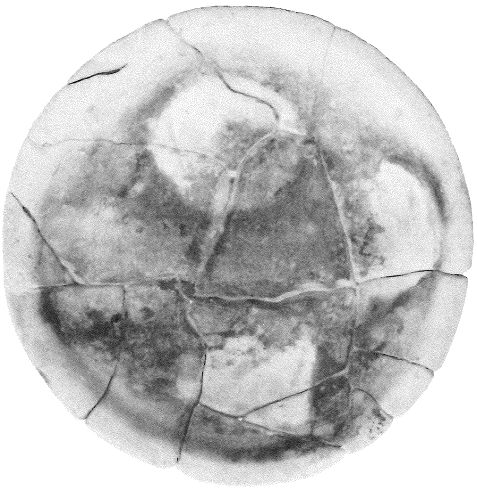
8

39

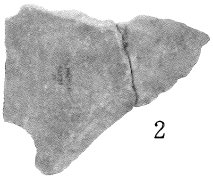
6

41

1

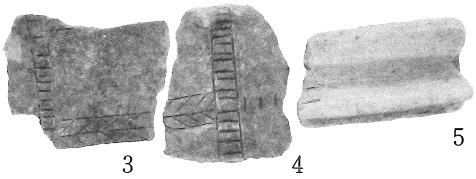


1



2

29



3 4 5

4

右京第39次調査出土遺物　（鎌倉時代～古墳時代）

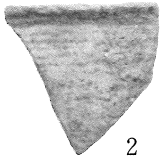
1

3

8

2

1



2

1

2

3

右京第39次調査出土遺物　（弥生時代以前）

長岡京市文化財調査報告書　第11冊

発 行 日　昭和58年3月31日

編集・発行　長 岡 京 市 教 育 委 員 会

〒 617　京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電　話　075—921—2121

印　　刷　株式会社 図書印刷 同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町2

(075) 361-9121